

ロータリークラブに入ってよかった！

素晴らしい出逢い
よき師、よき友は人生の宝

1



戸田 孝

ローターリークラブに入ってよかった！

素晴らしい出会い

よき師、よき友は人生の宝

①

戸田 孝

ロータリークラブに入ってよかった！

素晴らしい出会い　よき師、よき友は人生の宝

発刊にあたって

筆者の戸田孝パストガバナーは1961年八尾RCに入会されて以来今日まで45年となり、当2660地区最古参のパストガバナーとして現在もかくしゃくとして活躍されておられます。

その間、筆者プロフィールにありますように、ロータリーにおいて数多くの重責を果たされており、今も地区内外から講演の依頼が数多く寄せられ、ロータリーの真髄に触れた卓話に啓発され感動した多数のロータリアンがおられます。

私は1972年に八尾RCに入会以来今日まで33年間、先輩戸田孝さんに御親交を頂いておりますが、穏やかで常に笑顔を絶やさず柔和に人と接しておられるお人柄と並々ならぬロータリーに対する深い御理解

と情熱に対して敬慕の念を抱くと同時に、何につけても御相談申し上げ御指導頂いておりますことに常々感謝しております。

私はロータリアンとしての本籍地は八尾RCで、現住所が大阪西RCであるとの思いで、八尾RC出身であることを誇りとしております。

今回、長年のロータリーの卓話その他の御講演の原稿をまとめられて出版されることになりましたことは誠に時機を得たものであり、心から嬉しく有難いことだと考えております。日本中の一人でも多くのロータリアンに読んで頂けるよう微力を尽したいと考えております。

願わくは今後とも御健康に留意され末長く御指導を続けられますよう祈念致します。

国際ロータリー第2660地区

2005年～2006年度

ガバナー 神崎 茂

目次

1	先輩にまねて知る、ロータリーのいい話	6
2	退会を決意したとき、 「それ恕か」「拝みあう心」を学ぶ	10
3	平沢先生に学ぶ「如是我聞」	16
4	ベートーベンの声が聞こえた	21
5	栄光に輝くロータリアンたるの幸福	28
6	第2650地区大会で知った「ロータリーの真価」	35
7	2004年大阪国際大会 — 国際研究会「ロータリーの心」から —	43
8	人皆に 美しい種子あり	50
9	ロータリーは人間銀行	59
10	心動かされた 盲目の元会員が語る、新会員の集い、	71

- 11 宇野さんの思い出「青春の詩」など ――― 78
- 12 今田・パストガバナーに学ぶ「人間関係十戒」 ――― 92
- 13 大先輩・伊瀬芳吉・パストガバナーに学ぶ「前赤壁賦」 ――― 99
- 14 自分流の速記術―それが私の宝物 ――― 105
- 15 一隅を照らすもので私はありたい ――― 112
- 16 現在の幸福論から、幸せなロータリーライフを考える ――― 120
- 17 指導者道：・愛はおしみなく ――― 128
- 18 積尊の言葉「自分が一番愛しい」から ――― 138
- 19 Motion は Emotion を生む
(行動は情感を生み、感動を生む) ――― 148
- 20 新会研修セミナー余話「ある出会い」 ――― 155
- 21 ロータリー・私の歩んだ幸せの道 ――― 162
- 22 ロータリークラブは自分を磨くところ ――― 170
- 23 ロータリーと教育を考える ――― 177
- 24 良い習慣をつける ――― 186

25	若々しく老いる「不老長寿」という人類の夢	195
26	米山奨学会、2つの話	202
27	ポリオプラスに命をかけたロータリアン ・山田ツネさんに学ぶ	211
28	リンカーンに学ぶ、希望を失わない生き方	219
29	ロータリーが個人を向上させるには	235
30	ロータリーあれこれ	246
31	ガイ・ガンディカー氏の 「ロータリーに入ればいいことがある」より	266
32	近代日本の企業倫理と企業経営に見る職業奉仕	270
	発行にあたって — PG 神崎 茂	1
	筆者プロフィール	290
	あとがき — PG 戸田 孝	285
	電子文庫版について	291

1

先輩にまねて知る、 ロータリーのいい話



ロータリークラブに入会した当初は、誰もがロータリーが何であるか分らないものである。渡された「ロータリーの解説書」などを読んでもなかなか理解できないものである。先輩は「毎週の例会に出ているうちに分ってくるものです」と言ってくれたが何年たっても分らない、そこで「ロータリーは判らないもの」と決め込んでいる人が多いのではないか。ロータリーを理解するには多く出版されている図書や解説書を読むことが大切だが、読みつけない本を読むには相当のエネルギーと根気があるのは確かであり、あまりロータリーに馴染んでいない会員諸兄には適していないのではないか。

そこで私が退会を考えた時、翻意させる素晴らしい話を聞かせていただいた平沢ガバナーの話や、長いロータリー人生の中で頂いた多くの先輩の、心に残る感動の事例などを皆さんに読んでいただくことが、ロータリーを知る一つの足がかりになるのではないかと考え、永年記録してきたメモの中から、週刊誌を読むような気楽さで取り組める「先輩にまねて知る、ロータリーのいい話」を思いついた。私のメモの一部が、

皆さんに『心で知るロータリーの素晴らしさ』を知ってもらおうきっかけともなれば幸いである。

ここで私が思ったのは、『先輩にまねる』ことが、ロータリーを知ることと繋がるかどうかという不安であった。そこで以前に読んだ斉藤孝氏の書、「できる人」はどこがちがうのか、を引っ張り出して再読した結果、ある程度の自信を得ることができた。その中に書かれてあった、あるプロ野球選手の着想に「かつて阪急ブレーブスに所属した大投手、山田久志氏がシンカーという技を習得していくプロセスの一つの例に『先輩にまねる』ことによって上達し、プロ通算284勝を達成した事例が載っている。しかし、『まねる』ためには前提があるように、その前提は、自分が積極的に『まねるようとする力』を持つことと、『まねる意識』を持つことが大切であると記されている。『まねる』は学ぶの語源であることから考えれば、『先輩からまねる』は学ぶことになり、自分を高める上で大切なことだと思う。

これには、もう一つの要件があって それは「持続力」と「集中力」

である。

何事もサツとやって、サツと終わるのではなく、例えば、長年にわたり毎週の例会に出席して、親しい仲間と語り、笑い、楽しみ、人のお役にたつ奉仕を積み重ねるといふような持続力を持ち、集中力をもつて『先輩にまねる』。そのことで他では得られない長期にわたる訓練ができ、よき人生を歩むための教養を身につけることができるのであろう。

ロータリーの素晴らしさは、古来から、人間の持つべき倫理観や、良く生きるための基本理念を学ぶ場でもあるが、多くの良き、先輩にまねるゝことで人間の温かさを自分のものにするのできる場でもあるといえるであらう。

註：本を読むとき、右手に赤ボールペンを持って速読し、大切に思うところにアンダーラインか○をつけてページに折り目をつけ、繰り返し読むことが理解の早道です。

2

退会決意したとき、
「それ恕か」
「拝みあう心」を学ぶ



私が八尾ロータリークラブに入会したのは36歳の時であった。クラブで一番若かったこともあって、37、38歳と副幹事、続いて39、40歳と幹事を務めることになった。先輩から「幹事をやるとロータリーがよくわかるよ」と教えられたが、4年間の幹事を終えて感じたのは「ロータリークラブの運営や、手続きなどはよく分ったが、肝心のロータリーとは何かが分らない、また自分にとってロータリーがどのような役立つのか分らない」その上、仕事が大変忙しかったこともあり、私を推薦していただいた会員へのご恩返しもできなかったのではないかと考え、「昭和42年の12月に退会しよう」と決心した。

退会を決心した年の9月6日にガバナー公式訪問があった、ガバナーは、京都大学の総長を務められた平沢興先生であった。第一日目は、ガバナーを迎えてのクラブ協議会が2時から5時まで行われた。そのあと6時からガバナーと協議会に出た会員が一緒に会食することになった。

協議会が終わって会食までの間、ビールを飲みながらガバナーと和や

かに談笑していたが、ある会員がガバナーに「ちよっとお尋ねいたしますが、世の中を生きるうえで一番大切なことは何でしょうか？」と難しい質問をした。

平沢ガバナーは「孔子が大切にした言葉に『それ恕か』があります。

それは『己の欲せざるを他に施すこと勿れ』『あなたが人からして欲しくないことは、人にしてはいけないよ』という教えです」平沢ガバナーは言葉をついで「ロータリークラブの例会の中で会員が、お互いに拝み合う心を身につけることが大切ですね、拝みあう心とは、感謝 尊敬 謙虚 の意味で、世の中を生きる上で大切な徳性ですね。ロータリークラブの例会は、恕の心と、拝みあう心を身につけるために最も優れた場なのです」と教えられた。

私は、平沢ガバナーの話聞いて「自分の心がけ次第でこのような『人生を生きる大切なもの』を、自分のものにできるかもしれない」とロータリーへの認識を新たにし、退会を断念して今日を迎え、会員を続けることができたことを思えば、先人の言葉の重さ、大切さをしみじみ感じ

るのである。ロータリーライフを続けるうちに、いろんなことが見えてくるものである。平沢ガバナーから教えていただいた「恕」は、「相手を許し、思いやる心」で、恕の字を解析すれば「女は母、口は子供、心は慈しみ」で「お母さんが赤ちゃんを抱っこしながら心から慈しんでいる有様」で「恕は母の慈しみ」を表すことがわかってくる。

また、世界の多くの人々に信奉されるイエス・キリストの黄金率は、「汝 他人より与えられんと欲するすべてを他に与えよ」「何事でも人から自分にしてもらいたいと望むことは、すべて人にもそのようにしてあげなさい」で、キリストの黄金率は愛を表すことがわかってくる。そのような経験をへて、孔子の慈しみとか、キリストの愛は、ロータリーの「奉仕の理想」と同じ意味をもっていることが徐々に分ってきたのである。奉仕の理想、とはこのような深い意味をもち、古来から存在する人間の最高の倫理を表すことを知ることができた。

ロータリーの奉仕の理想は「他人に対する思いやりの心で、他人のお役に立たせていただく精神」で、ロータリアン共通の理念として心の中

にしつかり刻み込むべきものであり、奉仕の理想を永年の間に身につけることが、会員それぞれの意識を高めることに繋がることを学ぶことができた。

真剣に退会を考えていた私を立ち直らせ44年間ロータリークラブに留まらせたものは、平沢ガバナーが私たちに教えてくれた「それ恕か」と「拝みあう心」であり、ロータリーの中心に内包する優れた心の部分を分り易く教えていただいたことによるものであると思っています。

ロータリーに疑問を抱いている人、クラブ会員である意味が分らず悩んでいる人々には、先人に教えられた心に残る実話を気持ちこめて伝えることが大切であると思う。私は平沢ガバナーのお陰で、毎週の例会で親しいメンバーと笑い、語り、歌い、例えば俳句を作ったり、楽しい日々を送ることができると今の幸せをできるだけ多くの人に伝え共有したいと思っている。

年を重ねると共に孤独になりがちな人生に明るく前向きな日々を与えてくれるロータリーに感謝しながら今年傘寿を迎えることができた。

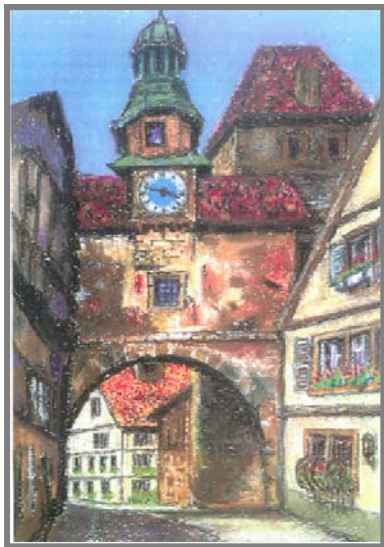
参考として「奉仕の理想」の意味を OFFICIAL DIRECTORY で見るよ

Rotary club everywhere have one basic ideal—the “Ideal of Service”, which is
thoughtfulness of and helpfulness to others.

いずこのクラブも一つの基本的な理想をもっている—それは
「奉仕の理想」で、その意味は「他人に対する思いやりの心、
助け合いの心」なのである。

3

平沢先生に学ぶ 「如是我聞」



1982年5月、私達ガバナーノミニーは国際協議会の研修を終え、全員揃ってダラスで開催された国際大会に参加した。開会式から閉会式までの5日間の滞在であった。

ある朝、家内と一緒に朝食のテーブルについたとき、隣に2510地区の山賀 勇さんと奥さんが座っておられた。山賀さんは、私の家内と同じ眼科医であったので、共通の先生や先輩の話に花が咲いていた。私は山賀さんが新潟医科大学の出身であることを知っていたので、「山賀さんは平沢先生に学ばれましたか？」と聞いてみた。

山賀さんは「平沢先生は私と同じ新潟県のご出身で、大学時代、解剖学を教えていただきました。私たちの同期のみんなが尊敬している先生です」と、次のような想い出話をされた。

「私は、大正15年4月、新潟医大で解剖学の講義を新任助教授の平沢先生に学びました。解剖学の最初の講義、先生は教室へ入ると何も言わずに黒板に「如是我聞」と書かれ、学生の方に顔を向けられた。

各地の旧制高校を終えたばかりの生意気盛りの若者にとって「如是我

聞」は正に「是難問」で、誰もが何のことかわからずにポカンとしていた。

先生は学生の方を向いて「解剖学の講義を始めるに当たって、言っておきたいことがある。自分はまだ若い、何でも知って諸君に教えるのではない。昔、お釈迦さんの弟子たちが釈尊に聞いた教えを持ち寄って一卷のお経にまとめ、その最初に、これは凡て釈尊から聞いたものを伝えるのである」という意味で「かくの如く我聞く」「如是我聞」とある。

私がこれから行う講義は、わが師に教わったこと、先人の文献に学んだことを諸君に伝えるにすぎない。諸君は私の講義を基礎に更に多くのことを勉強して、後に続く人びとに伝えて頂きたい。これが学問を進歩させるために最も大切なことなのであり、これから諸君と共に勉強していききたいものである」と教えられたそうである。

先生は講義の最初に、ゲータやベートーベンなどの名句を黒板に書き、人生に処するための、人間としての道、医師としての心構えを学生に教えられたということである。

山賀さんのクラスは、昭和5年卒業にちなんで、「昭5会」を作り、毎年一回集まって、青春時代を懐かしみ「旅行記、身边雑記、各自の消息」などを集めて「如是我聞」に因み、文集「如是我聞」を創刊した。

平沢先生は、母校京都大学教授となられ、やがて、大学総長の大役をつとめられ、日本学士員会員をはじめ日本の最高頭脳の一人となられ、各方面に活躍され、滋味あふれる書も出版され多くの人に敬愛された。

先生は、京都で開かれる「昭5会」には、時間の都合がつけば出席された、酔えば昔にかえって一緒に歌を歌い、肩を組んで踊り童心に帰られたそうである。

先生は、多くの弟子に「如是我聞」の心を伝え、自分が学んだことを次の世代に伝え継承することがいかに大切かを教えられた気がした。

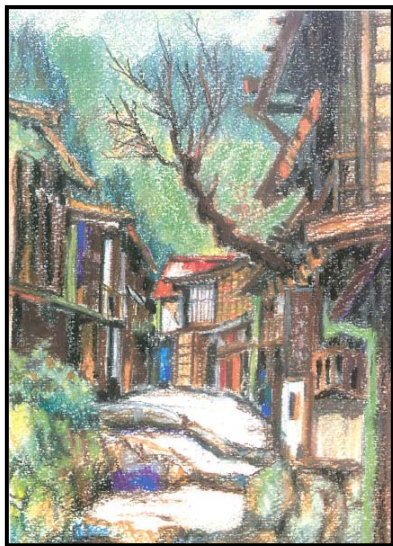
私は平沢ガバナ―は「私は先輩からロータリーの素晴らしさをかくのごとく聞き、教えていただきました、そのことを後輩にしつかり伝えます」が一番大切であることを教えられたように思う。

みんながこの精神をもって、次に続く人々にロータリーを確実に伝え

ること、他に例のない世界的善意の組織を保ち発展させることができるであろう。

4

ベートーベンの 声が聞こえた



平沢パストガバナーの思い出の書に出てくる言葉である。

平沢先生は、金沢の第四高等学校を主席で卒業し、大正9年京都大学医学部に入學する。大学の講義は思ったほど面白くなく、ただ講義を聞く受身の勉強だけでなく、自ら原書の参考書など読んで積極的。且つ徹底的に勉強しようという私の計画も思うように行かず、9月に始まった講義は1ヶ月も欠席しがちなり、さりとて下宿で勉強するわけでもなく、だんだん神経衰弱になり眠れぬ夜が続くようになった。それで、その年は冬休みにならない前に早々と越後の郷里へ帰った。

私を絶対的に信じている家人たちは、何も聞いたりせず安心した。

家を一步でると、すべて雪に埋もれた白一色の広野のみである。私は毎日、広野を歩いたが、そのようにしているうちに調子の狂った私の心も次第に平静を取り戻し、ある日の散歩の途中に、かつて読んだことのあるロマン・ローランの「ベートルベン伝」を思い出した。

そして私自身に言ったのである。「何を前はそんなに苦しんでいるのか。お前はまだ、やるだけのことを何もやっていないではないか。まず

命をかけて、やるだけのことをやってみるべきだ。人生には迷いはあろう。だがやるだけのことをやらずにそんな迷いに負けてはならぬ。とにかくやることだ。やがて新年が来る。」

このとき、私は偉大な、楽聖ベートーベンが、耳の病で倒れかかり、25才のある日 自分に向かって叫んだ声をドイツ語で聞いた「さあ、元気を出せ、たとえ我が肉体にどんな弱点があろうとも、我が魂はこれに打ち勝たねばならない。25才、そうだもう25才になったのだ。今年こそ男一匹全き人間たるべく決心しなければならぬ。」という言葉であつた。

ベートーベンは音楽家として耳の病は致命的なものであつたが、遂にこの困難を克服して偉大な足跡を残したのである。

おかげで私の神経衰弱も治り、大正10年1月からは毎朝2時の起床を實行して勉強して、どうやら大学1年の危機は脱却した。やればできるのである。

先人として仰ぎ見るような平沢先生でも弱点を持ちながら、それに負

けず、次第に長所を伸ばして偉大な存在にまで成長されたことから、その内面的成長の過程に学ぶところ大きく、未熟な私に励ましを頂いたことに感謝したものである。

2001年11月23日、私は、関西ロータリー研究会で「ロータリーの本質を見つめて」の題で90分の講演を終え、フォーラム・タイムが入った。いろいろな質問が出て、それに答えていったが、質問が一瞬途切れたときに私は平沢先生の「ベートーベンの声が聞こえた」の話をした。

フォーラム後の懇親会で親しいロータリアンと話をしていると、京都大学の医学部を卒業した2人のロータリアンがやって来て、「懐かしい話を聞かせていただきました、平沢先生の思い出は懐かしいですね、『私は、今でもベートーベンの声をドイツ語で全部覚えていきます。』『戦争後、京都四条の飲み屋で平沢先生とよく焼酎を飲みました、飲んで先生と肩を組んで大きい声で歌をうたいながら歩いたものです、平沢先生って教授でありながら若い学生のような心をもっておられましたね』」

やはりロータリアン平沢興先生は、多くの人から親しまれ、尊敬された偉大な方であった。

私の地区の2000～2001年度の地区大会閉会後の懇親会で、私の隣の席に第2560地区の吉田昭平ガバナーが座っておられた。新潟の銘酒の話などしているうちに、新潟県出身のパストガバナー北沢敬二郎さん、平沢先生の話で大いに話が盛り上がった。吉田さんは、「平沢先生が新潟医科大学で教鞭をとっておられた頃の同郷の弟子がいます。その方は2002～3年度ガバナーの佐野孝さんで、白根緑ヶ丘病院の理事長です。平沢先生についての書を沢山書いておられますので、帰郷しましたら本を送るよう依頼しておきます」と話された。

それから間もなく平沢先生についての素晴らしい数冊の書をお届けいただいた。その中に昭和32年、京都大学総長に就任された時の訓示の一節が載っている

「…常に高き遠き処に着目せよ…よく真理を愛し、学会進歩のため、

人類のため、全く小我をすてて、あくまで奮闘し努力し……とある。

総長退任された4年後、第266地区のガバナ―を務められ京都、滋賀、福井、奈良、大阪、和歌山に及ぶ広大な地区の管理に過密スケジュールを誠実と情熱をもってこなされた。出版社 日学社、家庭教育研究会の総裁に就任され毎号に文を寄せられた。

平沢先生が学生の頃、最愛の母を亡くされた。母への詩に

母よ

尊い母よ

日本の子らに

美しく

逞しい魂を

世界の子らに

誇らしく

清らかな心を

偉大な母よ

とある。

私は、ロータリーという人間を学ぶには、この上なくいい場にいると感じるのである。このような良き師に出会い、よき友と楽しみ、学ぶ心さえあれば自分を高めることのできる場にいることを忘れてはいない

か？

世の中には憂いも苦しみもあるう、これは人間である限り避けられないのだから、ロータリーの中から楽しみの種を大いに拾い集め、憂いを忘れようではないか。

ロータリーは、人生を肯定し、人の善意を信じ、不安な世の中であっても理想を捨てず前向きに生きる人を育てるところである。

5

栄光に輝く ロータリアンたるの幸福



(1) 1967年10月、平沢ガバナーが主催された地区大会が、田辺ロータリークラブをホストに、白浜ロータリークラブをコホストとして白浜観光会館で開催された。

平沢ガバナーは開会第一日目のガバナーアドレスで感動的な話をされた「本日ここに国際ロータリー会長の代理として Charles H Miller (チャールズ・ヘンリー・ミラー) 夫妻をお迎えし、多くのロータリアンの参加をいただき R I 第365地区大会を開催することが出来ますことは真にご同慶の至りであり、私は今日ほどロータリアンとしての喜びと誇りを感じたことはありません。私たちは皆「奉仕の理想」に生きるロータリアンであります。ロータリー創立以来62年を迎え、今や世界137カ国、622,000余人に及び、人種、宗教、国境を超えて世界の隅々まで広がっております。ロータリーが歩んだ僅か62年の歴史から考えれば、確かに驚嘆すべき人数であり、私たちロータリアンはこの素晴らしい歴史の足跡を顧みて、良き仲間を増強しなければなりません。」

「私は皆さんと共に、天を仰いで今日の幸福に心から感謝を捧げたい

と存じます。

第一は、人間たるの幸福であります。10億年の地球の歴史の流れの中で、その頂点である人間に生まれたことの幸福。

第二は、健康たるの幸福であります。肺も心臓も、60兆の細胞も、それぞれバランスを保ちながら機能し、精神力も充実して活躍している幸福。

第三は、職業に成果を持つ幸福であります。皆さんと同様に、天から与えられた天職に恵まれ、活躍し、成果をもつ幸福であります。

第四は、家庭の理解をもつ幸福であります。良き家庭人たらずして、良き社会人たり得ない。生涯の基本である家庭の理解をもつ幸福。ロータリアンたるの幸福であります。栄光に輝くロータリアンの

メンバーであること、超我の奉仕を胸に、良き人生を生きる道であるロータリーの一員であることの幸福、これは何ものにも変えがたいものであります。私たちは、この五番目の幸福をし

みじみ感じさせ、教えてくれるロータリーを、ここまで育て上げられた偉大な先輩たちの組織力と生命力に敬意と感謝を捧げたいと存じます。」

私はこの素晴らしいスピーチから、いろんなことを学ぶことが出来た。万物の霊長である人間に生まれたこと、健康で日々活躍できる喜び、天職に恵まれ働くことのできる幸せ、良き家庭に恵まれた幸福、という人間の幸福の最も基本的な条件と、同じレベルにロータリアンである幸福を位置づけておられる、ということに深い感銘を受けた。私は毎日の多忙な仕事に追われ、毎週の例会出席が重荷になり義務感と惰性、無関心で過ごしてきた数年を振り返り、平沢ガバナーから永年にわたって教えていただいたなから、徐々にロータリアンになったように思う、「ロータリーから感銘を受けたとき、ロータリーの素晴らしさを見出したとき、奉仕の体験から感動を受けたとき、ロータリーの素晴らしい人生哲学を知った時、などの機会を積み重ねることで、本当のロータリアンになっていくように思うのである」

ロータリークラブに在籍して年を重ねるうちに人生の大切な宝を見出すことが出来るであろう。

(2) 心を開いて友人をつくり、活力ある社会を！

(1986年、東大教授 木村尚三郎氏の講演から)

① 心を開いて友人をつくろう

さまざまな集会に参加する意味は、友達ができること。いろんな問題があれば相談しよう、研究会をやろう。それには広い人脈をもつことが世の中を切り開いていくために非常に大事な時代になってきた。

修道院でいちばん大事な場所は食堂である、修道士が一堂に会して食事をすれば、たとえ沈黙の時間であっても、お互いに心が開け兄弟である実感が湧いてくる、と教えられた。

この講演から思うのだが、ロータリークラブの例会は毎週会員同士が食事を共にして、お互いが心を開いて語り楽しみあう場であり、広い人脈づくりの大切な場であり、世の中を切り開いていくために知恵を分かち合う場といえるであろう。

② 知恵は暇から生まれる

私たちの暇とは、忙しい時間の中の1〜2時間をさいて、自分の時間を持つことであろう。ロータリーでよく開かれるシンポジウムは、ともに酒を酌み交わすということなのである。

シンは「共に」、ポーシスは「飲む」でギリシヤ人は酒を酌み交わし、学問、芸術、スポーツなど、あらゆることを話し合いながら知恵を出しあった。

スクール、スカラーは、ギリシヤ語のスコールからきていて、暇のことである。暇をつくり、心を楽しませながら会話し、食べたり飲んだ

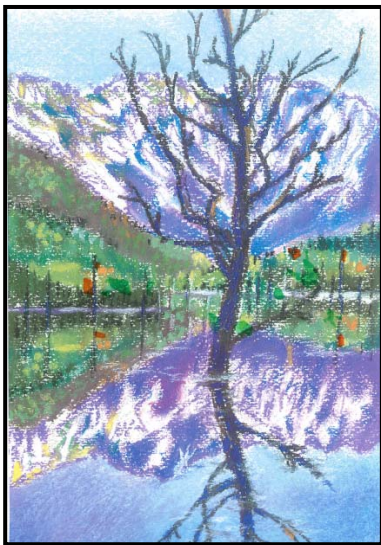
りすることで、本当の知恵が生まれる。

ギリシヤ、ローマ以来、優れた学問や芸術を生んできたのは、暇のある人たちであった。リッチというのは単にお金持ちというのではなく、自分なりの時間をもって絵を楽しむ、スポーツに励む、自分を磨く、あるいはロータリーで活躍する。そんな自由な時間をもって、知恵を大切に、ということが今後を生きる上で大切なことであろう。

木村先生の講演を読みながら、ロータリークラブのなかにある大切な要素、友情、自己研鑽、人の為に尽くす、知恵を出し合う、相談して良い方向を目指す、学ぶ、伝える、笑う、共に行動する、などを考えながら、ロータリーが私たちの人生に大きい役割を果たしていることを強く感じるのである。

6

第2650地区大会 で知った 「ロータリーの真価」



1987年、福井で開催された第2650地区の大会に、RI会長代理として参加することになった。1969年に地区が分割されるまでは、同じ地区であったこともあり、特に親しみのある地区である。

私のエイドを引き受けていただいたのは、私と同期のガバナーであり、京都大学理学部、物理学科在学中に起業され、今日の堀場製作所の隆盛を築かれ、誰もが存じ上げている実業家 堀場雅夫さんである。私は尊敬する同氏のお世話になる喜びと、申し訳なさを感じたものである。このような幸運はロータリーならではの恩恵であり、得がたいめぐり合わせというものであろう。

私は、地区大会の前日に行われた「記念ゴルフ大会」に、堀場さん御夫妻と一緒に楽しくプレーすることができた。思えばアメリカ、フロリダ州のボカ・ラトーン国際協議会でゴルフを楽しんだことを思い出す。「こんな厳しい協議会でゴルフをした人がいるそうだ」というような評判があったとか聞いたが、その後、ジャパンエース、宝塚、大洗、箱根湯の花、などで堀場さんご夫妻と一緒にプレーしたお仲間であったので、

大会の記念ゴルフ大会にも気兼ねなく参加することができた。

プレー後、山代温泉に宿泊し、翌朝、妻と共に迎いの車に乗って大会会場である福井県民会館に到着した。

第2650地区は例年、会長代理を迎えるにあたって、年代の古いパストガバナーから順番に一列に並んで迎えただく慣わしになっていて、この年も大会場へのメイン通路に一列に並んでおられた、一番先頭に立っておられたのは平沢パストガバナーであった。私は緊張

しながら「先生ますますお元氣のご様子、嬉しいことでございます。この度は大変お世話になります、どうぞよろしくお願い申しあげます」とご挨拶した。平沢先生は「ご苦労さんですね、私も元氣そうに見えますが、一昨年に手術をしましてね、そのあと、毎年検査入院で調べながら何とか過ごしています。ご大役ご苦労さまです」と握手をしながらにこやかに応えていただいた。

堀場さんにお聞きすると「平沢先生は膀胱がんの手術をされて、袋をつけての不自由な毎日です。昨日退院されて今朝福井まで来られる、

あの精神力は大変なもので敬服しますね」と教えていただいた。

私たちは、とかく安易に流れ自分に甘くなるものである。しかし尊敬する平沢先生は昨日検査入から出られて、今朝早く真如堂のお宅から京都駅まで出て、福井まで電車に乗って開会時間に間に合うようにお越しになる。私たちでは到底考えられないようなことをおやりになる。堀場さんは「自分が自分に約束したことはきっちり守られる、私たちも見習わなければなりませんね」と話された。

私たちは、忙しいからといって例会を休み、メーカーアップも面倒だからやめよう、IMも地区大会もゴルフとかち合うから欠席、というようになりやすいものである。

だけど、平沢先生は病後の体でありながら、遠い地区大会に朝早くから出席される。

自分がやらなければという心情は終生変わることがなかったそうである。

私がRI会長代理として始めて参加した地区大会で、尊敬する平沢先

生からまた、大きい教訓を頂いたことは今も忘れえぬ貴重な思い出である。

私たちは、苦しいこと、難しいことからどうしても眼をそらして逃れようとしがちであるが、これに立ち向かう意志をもち頑張っていくことで目の前が少しずつ開けてくるということを、永年のロータリーライフの中で学ぶことができたように思う。

地区大会委員長 黒川誠一さんに学んだこと

大会委員長 黒川さんは、私と同じ大学の機械科を卒業された大先輩である。

東証1部上場「セイレン」の社長で、福井県の経済界の指導者として有名なかたであった。地区ガバナーにとの要請を多忙の理由で断られ、その償いに大会委員長を引き受けられたということである。お会いするとたいへん心配りのある素晴らしいお人柄、背の高い恰幅ある紳士で、横に並ぶと私など貧弱に見えたものである。

地区大会は、3500人の登録をえて盛大で意義深いものとなった。私は6回のスピーチをこなし、手にてつないで、の合唱で幕を閉じた。大会終了後、黒川大会委員長から「お疲れでしょうが、内輪のご苦労をしますので、出ていただけますか」とお誘いを受け、大会の打ち上げ会に出席した。

ガバナーの挨拶に続いて、私は感謝の言葉と大成功のお祝いを述べた。続いて黒川大会委員長が演壇に立って、お世話になった多くの役員、委員を前に心情あふれる感謝の言葉を贈った「一昨年に私に大会委員長をとという要請を受けましたときは、何からどのように取り組んでいけばよいか五里霧中でありましたが、何も分らない私を支えていただき無事大役を果たすことができましたのは、すべてここにお集まりいただきました皆様のお陰でございます、お一人お一人に心から感謝申し上げます。思えば私にとりまして、毎日が苦難の連続であったような気がいたしますが、今日、無事にお役を果たし、皆さんの晴れやかなお顔を拝見しながら、みんなが力を併せて頑張ればこのような大きいことでも成し遂

げられるものだ」と実感することができました。この気持ちは、ロ

ーターリーの大役をお引き受けして初めて体感できるものあり、人のために尽くした後に、大きい心の収穫を得ることができると言うロータリーの真価を教えられた思いです。皆さん本当に……」と口ごもり、どつと涙を流された。

参加したみんながハンカチを目にあて、私も溢れる涙をどうすることもできなかった。奥さんたちもみんな泣いていた。

黒川さんの奥さんは「長く一緒に暮らしていますが、主人が涙を流すのを見たのは初めてです」と言われた。

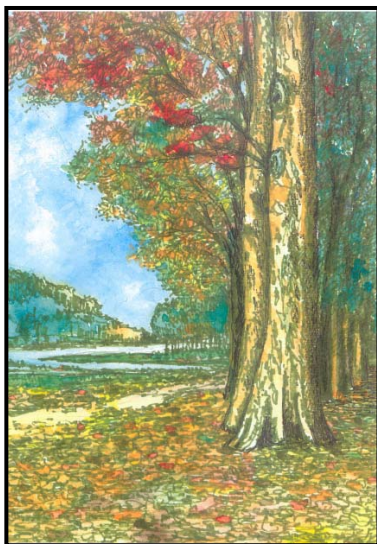
ロータリーで、みんなが目的に向かって力をあわせ、長期間にわたり工夫をこらしながら苦労と共にする、そして成し遂げたときに得られる感激は例えようのないもので、この感動が良きロータリアンを創るのだ。

私は、本大会に参加して、平沢先生のロータリーにかける熱い思い、温かい堀場さんのおもてなし、黒川さんの感謝の言葉、参加者みんなの感動の姿などから、ロータリーの真価を見た思いであった。

数週間後、黒川さんから電話でお誘いをいただき、リーガ・ロイヤルホテルでフランス料理をいただきながら楽しいひと時を過ごし、後日、黒川さんの俳句と奥様の短歌を収めた「温かき雪」を恵贈いただいた。ロータリーにはこのように心くばりのある良き人びとと巡り会うことのできる素晴らしい場であることに言い知れぬ喜びを感じるのである。

7

2004年大阪国際大会 －国際研究会 「ロータリーの心」から



2004年大阪国際大会開催に先立って、2日間のロータリー国際研究会が開かれた。

国際研究会の第1日目、分科会「ロータリーの心」のスピーカーを引き受けられた成川。パストガバナーは、広い国際会議場で私を探しておられた。成川さんは、日本各地から集まったパストガバナーの親しい仲間とわいわいと賑やかに話している私をみつけ、「あ！見つけた！戸田さんが担当する分科会、ロータリーの心」に、私の話だけでは弱いので、戸田さんのマズローの話で補強してくれませんか」と、分科会が始まる直前に頼まれた。原稿も何もなかったが、「分かりました、やりましょう！」と引き受けた。

分科会が始まり、D, 2640地区の成川パストガバナーは『2度とない人生だから一輪の花にも無限の愛を そそいでいこう。一羽の鳥の声にも 無心の耳を傾けていこう』と、坂村真民さんの詩を朗読し、人生でどんなに小さいことでも大事にすることが大切です。ロータリーも同じで、小さいこと、自分でできることで人の為に尽くすことが大切な

のです。ロータリーの「奉仕の理想」は、他人に対する思いやりの心、助け合いの心ですが、マザー・テレサは“Giving the Love”と教えられた。この“Love”、愛は、ロータリーの心です。

21世紀は心の世紀といわれますが……美しい花を咲かせるには、水を丹念にやらねばなりません。人間も同じで人生の美しい花を咲かせるには丹念に自分を磨かねばなりません。ロータリーはそれを可能にするところです。ロータリークラブって、自分を磨くという大きい役割があるのです。

ロータリーは素晴らしい、これは自分がロータリークラブに入らなければ分からないことです。ロータリークラブに入れば、ロータリーの素晴らしいさを是非知って欲しい、それには、ロータリーを理解するための努力と、学ぶ意欲をもつことが大切でありましょう。学ぶのはあくまで自分です、その為には、「自分で学ぶ、先輩に聞く、多くの会合に出席する」ことが大切でありましょう。

このようなことを、新しい会員を迎え、伝えていかねばなりません。

ロータリーは会員に「優しい心」を植え付けてくれるところです。ロータリーを大いに楽しみ、その素晴らしいさを知って欲しいものです。

成川パストガバナーの「ロータリーの心」の話は参加者の心を打つ素晴らしいものであった。次は私の番である。私たちは、新しい会員を迎えるためにも「ロータリーとは何か」を明確に説明する必要がある。また、ロータリアンにもその認識を深めることが大切です。そのため、国際ロータリーは、「ロータリー真の姿委員会」を設置し、議論と検討を重ねてその結論を出したのです。

そして、ロータリーの真の姿とは、「ESS」で表される、と発表しました。

E・S・SのEはEnjoy（楽しむ）・毎週の例会で地域の職業を代表する会員どうしが信頼感を高めながら心から楽しむ。

SはStudy（学ぶ）・ロータリーから人生哲学、職業倫理を学び、多くの会員から学び、自己を研鑽し、人間性を高める。

SはService（奉仕する）……「思いやりの心で人のお役に立つ行動

を」というロータリーの奉仕をごく自然に自分の生活の中に活かし、世の為、人の為に尽くす。

これが、ロータリーの真の姿である、と発表されました。

私は、ずっと以前に読んだ世界的な心理学者、アブラハム・ユマズロー博士の「人間の真の満足は、欲求を充たすこと無くしては得られない」と主張し「人間の欲求5段階説」を唱えた。

5段階説の低字の欲求から

第一段階 生理的欲求・食べたい、飲みたい、眠りたいという欲求。

第二段階 安全の欲求・生活環境のあらゆる危険を防ぎ、安全に生活したいという欲求。

第三段階 親和の欲求・集団の中で円満な関係を築き、親しい関係を深めたいという欲求。

第四段階 尊敬の欲求・集団の中で人のお役に立ち、尊敬される

ような自分を目指したいという自己完成の欲求。

第五段階 自己実現の欲求：自分の理想、目的を達成し、例えば、

自己を越えて他人の為に尽くす、という人間を本質的価値
で高めたいという自己実現の欲求。

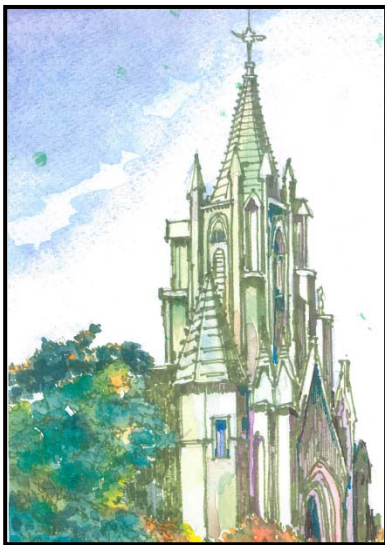
茲で、アブラハム・H・マズローの説とロータリーの真の姿とを比較して共通点を探ると、マズローの高度の欲求と言われる第三段階の親和の欲求、第四段階の尊敬の欲求、第五段階の自己実現の欲求と、ロータリーの真の姿とがほとんど一致していることに気づくであろう。

ロータリーの真の姿、**Enjoy Study Service** は、私たちロータリークラブ会員が、互いに磨き合い、楽しみ、学び、奉仕することが、人間の真の満足を充たす道になるのではないか。ロータリークラブは、会員が、お互いに相手を思いやり、相手のお役にたとうとする心をもって親しみ、そこから生まれる人間的温かさの空気を共有することで、「良き人たちを作る」ことになるのだ。

アメリカの推理作家レイモンド・チャンドラーは、彼の作品の中で主人公に「男は強くなければ生きていけない、然し男は優しくなければ生きる資格がない」と語らせている。男は、自分と家族が安心して生活できるように、又将来のためにも強くならなければ生きていけないことは誰にも分かるが、男は、常に他人への思いやりの心、助け合いの心をも身につけることが大切であり、その結果として 他人に認められ、信頼されて人間としての、生きる資格、が与えられるのであろう。ロータリーは、人間の優しさを磨き、成長を促すところともいえるのではないか。

8

人皆に 美しき種子あり



私が第2660地区のガバナノミニーに指名されたのは1980年、54歳のことである。当時、私にはロータリーのことは勿論、人生についても未熟であり、人と人のお付き合いや、まして地区ガバナーという立場でどうすれば多くのクラブ会員と親しくなっていけるのか、また、どうすれば先輩・パストガバナーとお仲間になれるのか？ 自信のない憂鬱な毎日であった。

そこで、ロータリーに関するいろいろな本を読んだり、ロータリアンの講演集を読んだりしたが、その基本となるロータリーの心や 精神的な裏付けを学びたいとの思いから、東京南ロータリークラブの安積得也先生に手紙を出して、著書「人間讃歌」を送っていただいた。安積先生の本の表紙の見開きに、戸田 孝様 『人皆に 美しい種子あり』東京南ロータリークラブ 安積得也と墨筆で添え書きがあった。

安積さんは、東京大学法学部卒業後、内務省を経て栃木・岡山県知事、総理大臣諮問委員などを歴任され、青年読本「あすをひらこう」などを執筆された。氏の詩集「一人のために」は、臼井吉見著「安曇野」に引

用され、吉川英治氏は同詩集を常に座右に置き、折にふれて、拾い読み、されたということである。

安積さんは、東京南ロータリークラブ会員として各地で講演されるなどロータリアンの心のありようを教えられた。

安積さんの詩集に「三つの窓」がある、

人間は、底窓 横窓 天窓 をもっている

；底窓は、自分を見つめる窓である。はっきり言えば、自分の知らない自分、「未見の我」を見つめる窓であり、自分を掘り下げて見る窓である。

；横窓は、社会をみつめる窓である。その窓を開けて自分以外は一切の他者を思いやりの心をもって見つめる窓であり、人の美点をみつめる窓である。

；天窓は、人間を超える者との対話の窓である。

この3つの窓を開けて自分をよりよく生かすことの大切さを教えてい

る。

日本の歴史の中で、最も不十分にしか開けられていないのは何か。それは、天窗！ではあるまいか。

私は、この詩から、ロータリーの中で一つ一つ体験し、学んでいく課程を教えられた思いがした。この、三つの窓をロータリーライフに当てはめると

・底窓は、自分を見つめる窓である。「自分の知らない自分を見つめる窓」永くロータリークラブに在籍して、多くの会員と楽しみ、学び、自分の知らない自分を見つめ、自分を掘り下げて 磨いていく自己研鑽の窓ではないか。

・横窓は、ロータリークラブに在籍することで、自分一人では見えにくい社会を見つめる窓ではないか。自分以外の全ての他者を思いやりの心をもって助けあう、親睦と奉仕の窓ではないか。

・天窓は、人間を超え宗教的境地にまで拡がる、いわば 理想を追求する窓ではないか。ロータリーの「使命感、祈り」、「奉仕の理想」に通

ずる窓なのではないか。

ロータリアンは、「底窓を深く、横窓を広く、天窓を大きく開けて」自分を磨き、親睦を深め 奉仕に献身し、奉仕の理想を追及することを目指したいものである。と教えているように思うのだ。天窓で思い出すのは、サブー会長のテーマである。

1991〜2年度 インドから出られたRI会長ラジエンドラ・サブー氏は、テーマとして、Look Beyond Yourself、「自分を超えた眼を」を、掲げられたが、このテーマは天窓に通じるものではないか。

ロータリアン一人一人が、天窓を大きく開けて 使命感をもって日々進むことが、私達の役割ではないか、と思ったのである。

サブー会長は、「あるロータリークラブ会員のアメリカ人が、ネパールのカトマンズへ行つたとき、道端で片足の無い少年が物乞いをしている光景に出会った。そのことをしばらく記憶から消え去っていたが、あるときそのときの光景が強烈な印象となって蘇った。彼は、早速カ

トマンズロータリークラブへ連絡して、その少年を見つけ出してもらった。彼は、カトマンズロータリークラブへ、義足のお金と、教育を受ける資金を、送り、少年への救済をお願いした。

クラブの適切な応援のお陰で、その少年フマーギー君は誇りをもって生きる青年に成長した。 私たちは、ロータリーと言う国際的な組織を通じて、自分の国を越えて、他の国の若者への貢献が可能なのである。

彼は、少年への僅かな奉仕から、自分が触発されて 普通の会員からロータリアンへの変身が始まったことを実感することができた。

ロータリーは、普通の人間であることから、人のために役立つ道を見出し、意義ある人生を送る、価値ある生き方を教えてくれるのです。 だんだん変身していく過程が大切であり、それにつれ、自分が徐々に成長していくことを認識することができるであろう。

Look Beyond yourself、

自分を超えた眼を、です。

安積さんの詩集「一人のために」の中に「光明」という詩がある。

自分の中には 自分の知らない 自分がある
みんなの中には みんなの知らない みんながある
みんなえらい みんな貴い 天の秘蔵っ子

人間をこのように肯定的にとらえて、人間の中にある「未見の要素」を自分自身で明らかにすることが大切であると教えている。 そのために詩や文章は、自分への「応援歌」と考えることができよう。

安積さんは、同じ詩集の中の「平均をあげる」で次の詩を書いている。

あの人に来てから 職場が明るい
あの人に来てから 職場に出るのが楽しみだ
あの人に来てから 驚くほど職場の平均が上がってきた
平均をあげる人は偉いかな 一人残らず
平均をあげる人間になれ

仏様は私たちに「眼施」という言葉を教えてくださった。知恵も金も無い、食べ物もない、何も施すものもないなら、温かい笑顔を施したらどうか、というのである。

アメリカのレストラン・チェーンのある経営者は「service」という言葉がなぜSで始まるか 知っているかい」それは「あのSはスマイル、微笑みのSなんだよ。私の店では、全米一の笑顔をつくれ、と命じている。更衣室に大きい鏡を置いて、暇さえあれば 美しい笑顔をレッスンさせているんだ」

これは、日本の眼施と同じ意味で、眼施の人は、人に和らぎを与えることと、敵を作らないという特性をもっているのではないか。また商売繁盛にはスマイルは欠かすことの出来ないものである。

ロータリークラブの例会に集まってくるロータリアンはいつもスマイルで挨拶を交わし、お互いに今日の元気な出会いを喜ぶ、そこには厳しい社会の営みからしばし離れて、心から憩い、人と人との楽しい裸の集いがある。

「朋あり、遠方より来る、亦楽しからずや」の心境で、自然にスマイルが湧いてこようというものである。

1985～86年のR I会長カドマン氏は「ロータリアンとして年月を重ねると、そこから受ける人間的温かさや愛情、これは、ロータリアンに尽くすより圧倒的に大きなものであることが分かってくるでしょう」と話しているように、温かい人柄になれることが一番大切なもので、温かさが自然にスマイルとなり、スマイルが温かさを作るといふ相互作用があるのではないか」と思っている。

9

ロータリーは人間銀行



東京南ロータリークラブの安積得也さんは講演の中で、私はいつも、ロータリーは世にも珍しい人間銀行だと考えています。ロータリーそのものの性格が実に不思議なご縁の銀行だと思ふのです。

ロータリーが人間銀行であるという意味は、世間の普通の銀行と比較しますと、預金を引き出して残高がゼロになれば銀行とのご縁は終わります。

ところがロータリー人間銀行では、友を得ることが、預金を引き出してお金を得ることに相当します。ロータリーで友を得れば得るほど、また友との知り合いの度が深まれば深まるほど、残高が増えるのです。そのように考えますとロータリー人間銀行は不思議なご縁の世界的大殿堂といえましょう。

ロータリーの目的は、ロータリーの綱領に示すように、「奉仕の理想」の鼓吹育成にあります。行動の主体は自分自身ですが、行動の対象は自分以外の他者です。

即ち「他のお役に立つことです」。

ハーバート・テラ氏が「神に深い祈りを捧げた後に書きあげた、四つのテスト」はロータリアンの行動の指針であり、1911年ポートランドの大会で発表され、1950年のデトロイトの大会で採択されたロータリーの「二つの標語」、フランク・コリンズの“Service above self”（超我の奉仕）と、アーサー・F・シエルドンの“*He profits most who serves best*”（最もよく奉仕するものは最も多く報いられる）などは何れも他者を先にする自分を自身自身に命ずることが中心となっています。その実践は職業生活、日常生活の行動を通じて人のために役立つ、奉仕を現実化しようとする姿勢に、ロータリー百年の歴史の見事さがあると考えられます。

真珠の生成を見るとき、真珠貝の体内に砂などの異物が入ったときに、自ら分泌する体液によって異物を見事な真珠に変えていく。そのように、身にふりかかる困難も悲痛も、自分自身の積極的な心のありかたで取り組むことで、自分の生活の中に宝石をつくり、自分自身を高めていく。

この世の宝石はお金で買えるが、本当の豊かな生活とは、自分の中に永遠の真珠をつくっていくことなのだ。

我々は、奉仕ということに熱心のあまり、自分以外の第三者の上のみに注がれて、自分自身の心の内面を培養することが棚上げにされていることはないか。

奉仕だ、実践だと叫びながら、行動という外形的な *Doing* の世界にだけに心を奪われて、わが心の内側を養い、自分の魂を高めるという内面的な *Being* の世界が、おろそかにされていないか。

ロータリー運動は、宗教や政治を超越しながら、しかも一人一人という生活者の生き方 (*way of life*) に関りあっていく友愛奉仕運動です。

それだけに、奉仕と友愛の対象である他者が高度に重んじられると同時に、それを行う行動主体である自己自身の「内面的ロータリー度」とも称すべき心の姿勢、精神の水位をおろそかにしてはならないと、痛感するのです。

私がアメリカの、ワシントン・クラブ(会員380人)、ニューヨーク・

クラブ（会員375人） エングルウッド・クラブ（会員88人） ハイランドパーク・クラブ（会員96人）の四つのクラブを訪問したときの六つの驚きを示しますと、

- 1、 祈りがある
- 2、 笑いがある
- 3、 転回がある
- 4、 結合度の高さがある
- 5、 体温がある
- 6、 質問がある

この七つは（起、承、転、結、退、出、）と語呂合わせにすると覚えやすいのですが、この七つの「意外性」をアメリカで経験しました。

(1) 祈りがある、第一の驚きは祈りです。

例会の開会は祈りで始まります。時間は1〜4分で大抵は牧師さんがされるようですが、素人の方の祈りもあるようです。外国からのビクターへの言及もあって、それが実に自然で温かく感じられました。

お祈りのシーンとした静けさは格別で、お祈りのなかに「使命」という言葉が心に響きました。最も印象的な言葉は、ロータリーの使命とか、ロータリアンの使命感という言葉でした。例会とは、単なる「出席」ではない。例会の眼目は、時間励行だけではない。例会はロータリアン同士の楽しくも厳しい一週一回の勢揃いである。

かりそめにも「使命感なんて言葉の飾りに過ぎないよ」と心の中できめこんでいるなら、ロータリーは世間ありきたりの社交クラブとどこが違うのか。といささか深刻に考えました。

日本でも経験した国際大会の、何万人をこえる参加者による「沈黙の祈り」の数分が、深い静寂へと導いてくれたことを考えれば、日本の例

会でも、開会の「一分の黙禱」という試みがどこかのクラブで工夫されても不自然であるまい。

職業奉仕も、使命感抜きの職業奉仕なら、ロータリーの金看板足り得ないのではないか。

(2) 笑いがあゝる、第二の驚きは笑いです。

四つのクラブ例会とも、お互いによく語り、よく笑う。和やかな気分が支配的で爆笑さえ起こります。笑いの価値が尊重され楽しい雰囲気です。

彼らは笑いを好むだけでなく、笑いの価値を知っている。笑いというコミュニケーションの価値を高く評価しているのでしょう。

あれほどにぎやかなのに、誰かが壇上で発言中は私語がない。あれほどべちゃくちゃとにぎやかなのに、誰かが壇上で発言中は、私語がないし、あつても低い声で壇上発言者を意識している。

「民主主義の年期が古いな」と思った。また建国二〇〇年の草の根の

民主主義のマナーが、苦勞を重ねながらしつけられてきただけに、他人の発言中は黙って耳を傾ける行儀は、日本のロータリアンよりもいささか兄貴なのか、少なからず驚いたのである。

(3) 転回がある、第三の驚きです。

状況の変化に応じて、臨機応変にそれに対処する。その臨機応変の弾力性を回転と呼びたい。彼らはものごとくに拘泥しない、ルールにとらわれない。

ユーモアがあつて言いたいことはずばりずばり言う。率直で素直でスカツとしていた。そして出席者のほとんどが発言していたのには驚いた。

臨機応変の弾力性、ロータリーの名に相応しい生命力豊かな転回ぶりで、卓話にまさる集団卓話を聞いた想いであつた。

私はアメリカのロータリーの例会に出席して、ライフとロマンを感じたように思う。

(4) 結合度の高さがある、第四の驚きは結合度の高さです。

言うまでもなく、ロータリーは理想を共通にする選ばれた職業人の同士の結合組織です。だから、何らかの意味で結合があるのは当然ですが、問題はその結合の度合いがどれくらいかということです。

アメリカのロータリアンの結合度が高いと感じたのは、クラブの仲間のロータリアンの名前と顔をフルネームでしていますね、これは頭の良さ悪しの問題ではなくて、子どもの時からの社会習慣と躰の相違なのでしょうか。

山田太郎とフルネーム、ターちゃん、とかタロヤンという呼び名まで知っている。

私のクラブは210数名で半分もあやしい状況で、メイキャップで名刺を出し合ったら「おやおや、同じ南クラブじゃありませんか！」日本人は顔と名前をあわせて覚えることに対する価値観が薄いのでしょね。

同一クラブの仲間には相すまぬ、もっともつと、わが内心の、友たらんとする意思、を高めて意識的に努力しなければならぬとの思いが強く感じた。

積極的に相手の中に飛び込んで溶け合っていくことが大切でしょう。

(5) 体温がある、第五の驚きです。

体温とは心の温かさです。ここで「体温がある」というのは、クラブの空気全体としても、会員一人一人の態度にしても、外部からのお客様さんや、海外の訪問者をとりにすホスピタリティが実に温かいことに驚きました。

「このクラブに体温がある」というのはアメリカの四つのクラブで感じましたが、会員一人一人に温かいホスピタリティがあつてこのような雰囲気になるのでしょうか、このようになるまでの修練が行われていたのでしょうか、社会生活にも欠かす事のできないお互いの自己訓練が大切であります。

(6) 質問がある 第六の驚きは質問で賑やか

例会の卓話の後で必ず質問があるのに驚きました。日本の例会では質問はありませんね。閉会の点鐘の前に自席に立って質問するようなことは日本ではありませんね。ところがアメリカでは3人も4人もいて実に賑やかでした。

「今すぐにキッシンジャー國務長官を辞めさせないのか」というような質問がでます。どの質問も簡潔、答弁も簡潔です。応答の間に時々笑いがあり、ユーモアを好む国民性なのでしょう。

質問には3つの功德があると感じました。第一に、卓話の趣旨が明確になります、それは卓話者にとつては満足ですし、聴衆にとつても有益です。第二に、質問者の人柄が仲間に解ります、彼はあんなにきめ細かい人柄なんだというように。第三は、質問によってクラブ全体に一体感が醸し出される契機があります。クラブが一体になる瞬間は少ないものです。

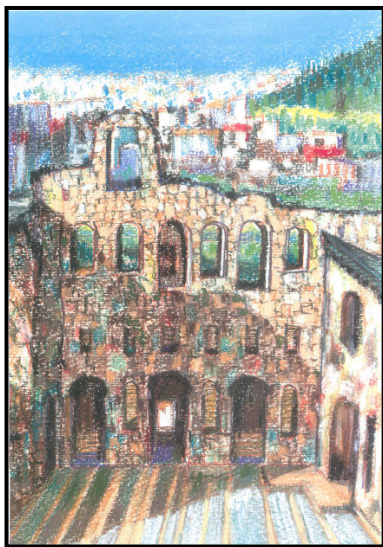
卓話中眠っている人も、質問が始まると目をさまし、クラブ全員が質問とその答えに耳を傾け一体感がかもし出されるのです。

アメリカと日本のロータリークラブの違いを知ること大切であると思う。

アメリカの良いところはドシドシ取り入れ、常にクラブを活性化していかなければ自己流の殻に閉じこまれ楽しい雰囲気が増なわれるように思う、それと毎年新しい計画の元にクラブを運営することが大切で、マンネリ化したプログラムを踏襲するようでは、新しい会員を迎える意欲も薄れると思うのである。

10

盲目の元会員が語る "新会員研修の話"



1989年～90年度、2640地区の大会は榎本ガバナーの主催で田辺市で開催された。田辺市は私の母の出身地であり、幼いころから母と姉に連れられよく遊びに行ったこともあり、懐かしい気持ちで出かけたのである。私がガバナーノミニ時代には、第2660地区と同じ地区であり、分割後も親しいロータリアンが多かったこともあって妻と一緒に大会に参加した。

田辺出身と伝えられる弁慶の大きいブロンズ像が駅前建てられているなど、町の様子はすっかり変わっていた。

地区大会は田辺市の市民会館で開催され、第1日目の本会議のプログラムは無事終了し、RI会長代理の歓迎晩餐会は白浜の古賀の井で開かれ、終了後のラウンジバーでの2次会は榎本ガバナーを中心に親しいロータリアンたちで大いに盛り上がって楽しい集いであったことを思い出す。

大会2日目の本会議が進み、遠方からの参加者のために2時ごろからエクスカージョンがあり、梅で有名な南部梅林の散策に出かけた。

丁度その時間に、本会議場で新会員の集いが開かれた、私は参考のために集いに参加することにした。新会員と入会2〜4年の会員が対象であったように思うが、沢山の会員が集まっていた。

やがて講師の入場であるが、明るくなった会場の中央通路を手を引かれてゆっくり入ってきて段を登り演台に立った。講師は盲目であった。講師、中西力三郎さんは静かに話し始めた「私は、昭和40年、田辺ロータリークラブに入会しました。そして22年のロータリーライフを経て昭和63年に網膜剥離を患い、失明してやむを得ず退会しました。はつきり見えていた眼が見えなくなり暗闇の世界を体験しますと絶望の淵に叩き落される気持ちになるものです。

私は、ヘレンケラーが言った、眼が見えないのは不便であるが、不幸ではない、という言葉を何遍も何遍も繰り返して自分に言ってお聞かせたのですがなんの効果もなく人間嫌いになり悶々とした日々を永年送ることになったのです。

このような苦しい時期に、彼が属していたロータリークラブでの思い

出が明確に甦ったのです」と語り、要約すれば次の3つの話をされた。

「1つ目は、平沢ガバナーが主催された地区大会を、田辺ロータリークラブがホストした時のことであります。入会してまだ日の浅い私は選ばれて大会副幹事となり、若い情熱を傾けたのでありますが、当時の大会委員長、クラブ会長をはじめ地区の大先輩の方々が進んで箒を持って掃除し、机を並べ、雑巾掛けをしながら大会参加者の為に働いている。自分にとって雲の上の人々、常に尊敬している先輩たちが、あの広い白浜観光会館のすみずみにまで気を配っておられる。このような、先輩を人々の為に奉仕しようという気持ちに駆り立てるロータリーの偉大さ、眼に見えない素晴らしさを知ることができました、これは新しい発見でありました。

2つ目は

私がロータリークラブに在籍していた頃、何千回と歌ったロータリーソングを思い出したのです。今もいつも口ずさんでいますが、何気な

く歌っていたロータリーソングのもつ意味が全盲になってから深く味わえるようになりました。

ロータリーの理念、ロータリアンの心をはじめ明るく積極的に前進する奉仕の道というような素晴らしい言葉が、素晴らしいメロディーの胸に迫ってくるのです。

現在の私には、難しいロータリーの理論はわかりませんが、私が愛しているロータリーソングの中にその心が生きていると思うのです。

「奉仕の理想」「我等の生業」「それでこそロータリー」「限りなき道ロータリー」「手に手つないで」などなど、素晴らしい心に残る歌がたくさんあります、新しく入会された皆さんどうぞ心をこめてロータリーソングを歌って頂きたいのです。

そして歌の意味を肌で感じ 覚えるところから、ロータリーの心が新会員のなかに抵抗なく植えつけられると思うのです。

3 つ目は

私がかってロータリアンであった 有難さを身に沁みて感じています。

私が全盲となつて、くじけようとする自分に立ち上がる勇氣と意識をロータリーが与えてくれました。多くの会員と心温まる友情、一つの目標に向かつて共に力をあわせて奉仕した思い出、お互いの信賴観に結ばれた楽しく笑いのある例会など 自分にとってかけがいのない体験が私に力を与えていただいたのです。

私は今もロータリーソングを口ずさみながら、目の見えたときよりもロータリーの心が見える日々を送っています。新会員の皆さん 私の話を参考にして素晴らしいロータリーライフを送ってください」と結ばれた。

人間は、どんなに良い環境にいても永年の間にマンネリになりやすいものである。

私たちは、ロータリーが何であるかを見失うことが何回もあるだろうし、毎日の仕事が忙しくてロータリーどころではないということも多くあり、心揺れることがあるだろう。

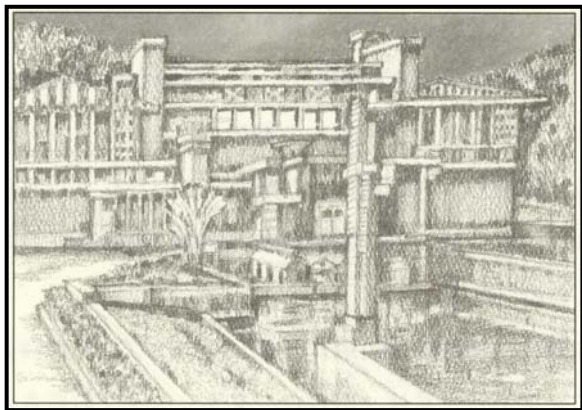
私は、全盲の身でありながらロータリーをこよなく愛している元ロー

タリアンの言葉を聴いたとき、ロータリーに対する自分の認識の甘さを強く感じたものである。私は、平沢ガバナーが「栄光に輝くロータリアンたるの幸福」を情熱をもって語られ、参加者に感動を与えられた白浜観光会館での地区大会の鮮明な記憶と、

その大会に副幹事として奉仕された中西力三郎さんが語った「このよ
うな尊敬する先輩を、人々のために奉仕しようという気持ちに駆り立て
るロータリーの偉大さと、眼に見えない素晴らしさを知ることができま
した」という中西さんの話に大いに触発された。そして、人の話を謙虚
に聞き、行動することの大切さを再認識したのである。

11

宇野さんの思い出 「青春の詩」など



昭和37〜8年ごろ私は十大紡績の大手―呉羽紡績と私の会社と共同出資して「呉羽紡績製品宣伝販売の店―アヤハストア―」を設立し、社長をつとめていた。

堺筋に面したビルの一階、大きいショーウィンドウのある店であるが、専門店の経営は難しいもので、呉羽紡績から宣伝費の変わりにフエンツ（繊維のハグレ）のマージンを出してもらうことで、やりくりしていた。毎月、どれだけの数量を出してただけか一つの鍵であった。若い私にとって ベテランの紡績マンとの話し合いは、頭の痛い交渉であった。

あるときから担当者が変わり、営業部次長が交渉相手になった。それが、旧制第三高等学校から東京帝大卒の超エリート宇宙野 収さんであった。

宇宙野さんとの話し合いは、今までとガラリと変わり「今月はいくら必要ですか」「わかりました」と言うように誠にさっぱりしたものであった。細かいことをつつくのではなく、大局的に物を判断される考え方に私

は大いに教えられ、啓発されたものである。

世間話でも、経営の話でも実に洗練された話術の主であり、出入りの業者の評判はたいへん高かった。その当時は 紡績の景気がよかった名残もあり「飲み食い打つ」の武勇伝に花を咲かせる人が多かった中で、宇野さんは人とのつながりを大切にしながら、仕事一筋を貫かれた方であった。「将来は大物になるだろう」と私の父も話していた。

私は毎月1〜2回フエンツの数量の件で、宇野さんとお会いし、話を聞くのが楽しみになっていた。

呉羽紡績は関西財界の雄として有名な伊藤忠兵衛さんが創立され、大阪ロータリークラブのチャーターメンバーとしてもロータリークラブ創立と発展に貢献された方であった。昭和33〜34年頃から忠兵衛さんの長男、恭一さんが呉羽紡績の社長をつとめておられたが、恭一さんはガバナ―として活躍され、後に²理事を勤められるなどロータリーに大きい足跡を残しておられる。

昭和40年代に入り紡績に不況の波が押しよせ、やがて恭一さんは東

洋紡積との合併に踏み切り、宇野さんも東洋紡に移籍、アヤハ・ストアは当社で引き受けることになった。それから宇野さんの消息を聞くこともなくなつた。

時も過ぎ、ほとんど噂もなくなつた頃、宇野さんが専務取締役就任されたことを新聞で知つた。「やはり！」と私は喜んだ。それから社長に就任され、間もなく関経連会長、日経連副会長に就かれ経済界最高のお役を務められることになった。「誰が見ても優れた人に評価は同じだ」の思いを強くした。

宇野さんは、大阪ロータリークラブのメンバーになっておられた。1999年の6月号の「ロータリーの友」に守口ロータリークラブがホストを務めたIMのテーマ「不況下におけるロータリー活動」の記事が掲載された。

このIMの基調講演を大阪ロータリークラブの宇野さんが受けておられる。

演題は「ロータリー活動と青春の詩」をいただいたが、宇野さんはわ

が国財界の長老である。経済危機の話になるものと思っていたホストクラブの会員たちはちよつと驚いた。宇野さんは幻の詩人といわれたサムエル・ウルマンの「青春の詩」の紹介者としても日本で有名な方である。三委員長の横尾氏は、不況の暗い話でなくてよかったと内心喜びながら、一方ではロータリー活動とウルマンの詩と、どのように結びつくか興味が沸いたそうである。

「青春の詩」は第2次世界大戦中、マッカーサー元帥が自室に掲げて座右の銘としていたといわれ、英文のリーダーズダイジェスト1945年12月号に掲載されてから、わが国にも流布された。ことに宇野さんらの紹介によって、戦後の財界人が好んで愛唱し、鼓吹したものである。日本語訳もいくつかあって、何れも格調高いものであるが、宇野さんの訳文の大意を味わってみたい。

「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方をいう。(中略)

青春とは人生の深い泉の新鮮さをいう。年を重ねるだけで人は老い

ない。

理想を失うとき はじめて老いる。

歳月は皮膚にしわを増すが、情熱を失えば心はしぼむ。(中略)

靈感が絶え、精神が皮肉の雪に覆われ、悲嘆の氷に閉ざされる時、

20歳であろうとも老いる。

頭を高くあげ希望の波をとらえる限り、80歳であろうと人は青春にて已む」

宇野さんによれば、戦後の日本のめざましい復興を助けた米国思想は、倫理面ではW・E・デミングの「QC運動」である、精神面ではウルマンの「青春の詩」の2つだそうである。ことに「青春の詩」は当時の経営者を鼓舞し、復興の原動力となった。宇野さんは今こそロータリアンだけでなく、経営者すべてが、この詩を高く掲げていきたいものであると強調された。

サムエル・ウルマンは決して事業の成功者でなかったが、アラバマ州

バーミンガムに移り住んでからも、荒物屋を営みながら社会運動のリーダーとして活躍した。また市の教育委員長、ユダヤ教エマニエル寺院の宗教指導者として社会への奉仕に尽くした。彼はロータリーアンではなかったが、彼の奉仕活動はロータリーの信条である「**He profits most who serves best**」[最も良く奉仕する者 最も多く報われる]を地でいった人である、と宇野さんは話されたそうである。

話は遡り1987年ごろだったか、私は、大阪西南ロータリークラブで「米山月間に因んで」の卓話をしたことがある。「米山梅吉翁が青少年の育成のために尽くされた事例や、奨学会がアジアの留学生に大きく貢献した数々の事例を話し、残った5分で『或る少年の話』をして卓話を終えた。

その会場に、宇野 収さんがメーカーキャップに来ておられた。諸事多忙な宇野さんは昼食を済まして退席しようと思っておられたそうである。

宇野さんは「今日の卓話者 パストガバナー 戸田 孝」とあるのを見て、『え！戸田孝君は若さ溢れる青年だ、年寄りのパストガバナーなんか

じゃない、それとも兄貴がいたのか、親父かな？』と思われたそうである。メンバーの多いクラブで、立ち上がったも顔が見えない「演題に上があれば分るな！」と、宇野さんは、野次馬根性、で残られたそうである。

食事が済んで卓話の時間、紹介されて演題に立ったのは、紛れもない戸田 孝くんであった。宇野さんは「どんな話か聞いて帰ろう」と思われたそうである。

30分の卓話を終えて降壇すると、後ろの席から背の高い宇野さんが手を上げて「やあ！御無沙汰」と近づいてくる。私も吃驚して「あ！宇野さん、お久しぶりでございます」

私は大阪西南ロータリークラブの会長への挨拶もそこそこに、宇野さんとリーガ・ロイヤルホテルの2階の回廊を話しながら、久しぶりの出会いに積もる話をしながら宇野さんの車までお送りした。私は、永年お世話になったお礼や、日本財界に大きく貢献され、日本人の精神的拠り所となっているウルマンの「青春の詩」のルーツを調べるために友人をアメリカに派遣され、永年かけて完成されたことへの感謝を申しあげた。

宇野さんは「若いのに大変なお役をされたんですね。今日の話の前半は公式なものでしたね、最後の話には感激しました。」と感想を話された。再会を約し、車が遠く離れるまで見送った。

宇野さんが最後に感動した話とは、随分以前に読んだ本の中から引用した話である。

「北陸での話。若い夫婦に男の子が生まれ、間もなく高熱を出して可愛そうに精神薄弱になってしまった。弟が生まれ、2歳になって口がきけるようになる、「兄ちゃんなんかバカじゃないか」と。母は弟を叱ろうと思ったが、親がいなくなった後、弟に兄ちゃんの面倒を見てもらわなくてはならない。弟が小さい間にお兄ちゃんをいたわる心を育ててやりたいと思った。その日から、お母さんは、弟が兄に言った言葉を毎日ノートに付け始めた。

1年2年たっても弟の口から出るのは「お兄ちゃんのバカ」母は諦めようかと思った。

弟が幼稚園に入園して数ヶ月経った七夕の日、親戚や近所の子供たち

が沢山集まった。

兄ちゃんは多くの人に興奮したのか、来た人びとをポンポンぶち始めたが、誰も「やめなさい」と言い出せなかった。その時、隣の部屋から弟がパツツととんできて、お兄ちゃんの体にすがって「お兄ちゃん、ぶつなら僕をぶって！僕は痛いっていわないから！」

それは、お母さんが永年待ち続けた言葉であつた。その晩、お母さんは、溢れる涙を抑えながらノートに「坊や有難う 有難う……」と書いた。有難うしかなかったのだ。感動とはこんなものである。

弟が小学生になった入学式の日、先生は机の座席順を次々と決めていった。

すると、弟の隣に左手が小児麻痺で不自由な子が座っているではないか。お母さんは愕然とした。家ではお兄ちゃん、学校へ来ても不自由な子の隣り、何という不運な子なのか、家に帰って両親は引越しを真剣に考えた。

最初の体育の時間、先生は不自由な子が、どのように体操着に着替え

るのか、ほっておいた。体育が始まって30分もして校庭にはずかしそうに出てきた。

次の体育の時間、先生がほっておいたのに、不自由な子がみんなと一緒に並んでいた。

先生は吃驚した、どのように着替えたのか。次の体育の時間、先生は柱の陰から教室の様子を見ていた、そこには驚くべき光景が見られた。

前の時間が終わり先生が出て行くと、あの弟がまず全速力で自分の着替えをすまし、それから隣の子の着替えを一生懸命手伝い始めたのである。弟は半袖の体操服に不自由な手を通してゐる。母親でも難しい仕事である。ベルが鳴って二人は手をつないで校庭に向かって走っていった。先生は弟を褒めてやろうと思ったが、褒めると、次から褒められるからやるんだということになり、弟の美しい心はいっぺんに汚されてしまう。先生は弟にたいする感謝の涙を我慢しながら体育を続けた。

偶然に七夕の日であった。初めて父母の会が開かれた。先生は教室に笹を飾り、短冊に子供たちの願いを書かせて笹につけた。父母が揃っ

た頃、先生は生徒の短冊を一枚一枚読み上げていった。「もっとおやつちようだい」「もっとこずかいちようだい」「おもちゃかって」…と読んでいったとき、先生は思わず目を凝らした「かみさま　となりの子のをてをなおしてあげて」、先生はこみあげるのを必死にこらえたが、こらえきれずに、体育の時間の話しをした。「弟が手の不自由な子のために一生懸命に体操服を着替えさせるのになつてゐる感動の様子を伝えた」手の不自由な子のお母さんは、後ろの方で教室内の様子を聞いていたが先生の話しを聞いて教室に飛び込み、床の上にべったり座り、弟の首をだいて涙を流しながら叫んだ「坊や、ありがとう、ありがとう、ありがとう・・・」その絶叫は学校中に響いたという。

人間を成長させる発想

私は、この弟がたとえ成績が悪くても、小さい頃からお兄ちゃんを思い、小学校では友達をいたわり、着替えを手伝う勇気をもつことで、心温かな素晴らしい人生を歩んでいることと思う。そして時間をかけて

優しいいたわりのある心を育ててきたお母さんと先生、これが本当の教育なのではないかと思う。

教えて育てるだけなら、犬でも馬でも芸当を覚える。人間の教育にとって大切なのは、教える方も教えられる方も、共に育っていくことなのではないか、教育は共生である。

一つは、弟が障害をもつお兄ちゃんに言った言葉を毎日ノートにつけて、弟がどのような心を発展させていくかを観察したお母さんの発想の素晴らしさである。先生が着替えを手伝っているのを見て、褒めてやるのをぐっとこらえて知らん顔するのも、すぐれた発想である。このお母さん、先生の心情をみると、教育とは何かについて考えさせられるところが大きい。

日本の社会が忙しすぎるために、発想もすぐに役立つものを求め、即効薬でなければ飲まないという考えが満ち溢れているのではないか。発想は、あなたが次に飛躍できるような人間の大きさをもっていなければ

ならないであろう。発想によってどれだけ金品の利益を受けるかわからないが、重要なのは、それによってあなたが人間的にどれほど成長したかが大切なのではないか。

その後、大阪ロータリークラブの創立75周年のレセプションなどで宇野さんにお会いして話す機会が何回かあった。いつも昔のままに眼鏡を鼻の中ほどにかけて上目づかいに優しい笑顔で話される宇野さんの姿を今も忘れることはできない。

財界のリーダーとなられてからも、若い頃 お世話になった頃そのままのお人柄で多くの人から尊敬され愛された方であった。思わぬ時、思わぬ処でお世話になった人や昔の友人に出会えるのもロータリーの素晴らしさではないか。

12

今田パストガバナー に学ぶ 「人間関係の十戒」



私が社会奉仕担当の諮問委員をしていたころ、大阪血液センター見学のプログラムに参加したことがあり、献血の社会的な役割の重要性を再認識することが出来た。見学のあと各クラブの社会奉仕委員長との討論会が開かれた。

会合の最後にきまつて「パストガバナー一言」と言われることを見越して、今田パストガバナーの「人間関係の十戒」を用意し、それに因んだ話をした。

散会后、の多くの参加者から「原稿を頂きたい」という要望があつて、沢山コピーして渡した、その時、あるクラブの委員長がやってきて「私は今田先生のお話を聞いて大変懐かしく嬉しく思いました。私は関西学院大学の卒業生で、今田先生は大学の理事長をしておられ尊敬を集められた方です。私と同期に今田先生の御息がおられ、現在関西学院大学の学長をしています。今日はとてもいいお話を聞かせていただき嬉しくうございました。学長とは親しい友人でしよちゆう会いますので、今日の話をしてあげたいと思います」と礼を言われたが、ロータリーには思

わぬところに人と人の繋がりがあって、この得がたい出会いがロータリー
の素晴らしさだと強く感じた。

1958〜59年度のガバナー・今田先生の「人間関係の十戒」がどのような経緯で私達に伝えられたかについて次のように記されている。

「今田先生はマニラで一人の医師と知り合う。その人、ガルシアさんはマニラロータリークラブのメンバーで熱心なプロテスタントの信者、メリー・ジョンストン・ホスピタルという大きい近代的な病院の院長で外科医であった。今田先生に是非合いたいと電話があつて病院へ行った。今手術中だということとで院長室で待たされることになる。デスクの上をおおうガラスの下に色々の小さい紙が並べてある。退屈なままに見ているとその一枚に「人間関係十戒」と書いてある。大変面白いと思つたので写されたそうである。

次に紹介する、

人間関係十戒

- 1、人に話しかけよ。
晴れやかな挨拶の言葉ほどうれしいものはない。
- 2、人に微笑みかけよ。
しかめ面には65の筋肉がある。微笑みには15でよい。
- 3、人の名前をよべ。
人の耳に最も気持ちよい音楽は、自分の名前の響きである。
- 4、親しみ助けよ。
友達がほしいと思えば友達になれる。
- 5、懇切であれ。
貴方のすることが皆心から喜んでしているように、話また行え。
- 6、他人に心から関心をもて。
なろうと思えば誰でも好きになれる。

7、惜しみなく褒め、批判はひかえよ。

8、他人の感情を察せよ、それはよろこばれる。

9、他人の意見をよく考えよ。論争には3つの側面がある。

あなたのもの、外の人のもの、それから正しいもの。

10、常に奉仕を心がけよ。人生において最も価値あることは、わ

れわれが他人のためにすることである。

とあった。

私は、この「人間関係十戒」はロータリークラブで毎週出会う多くの友人と信頼関係を築き、和やかでよきお付き合いをする基本を示していると感じたのだが、クラブ内だけでなく社会生活の中で大切にすべき対人関係円満の秘訣を教えていると感じた。

私のクラブに八尾市教育委員会市史編纂室長を勤めていた三上幸寿さんがおられた。彼が関西学院大学の出身かどうかは知らなかったが、今

から約17、8年前の、ロータリーの友に今田先生の「人間関係十戒」を原文で載せて、「素直な英文だから各自で翻訳されたい」と書いてあった。その時、私は拙い翻訳であっても、クラブ会員に紹介しようと思つたが、実行できなかつたことを思い出す。

今田先生は、「ロータリーは生活の原理であり、人生観につながるものであり、ロータリーの真髄は『己の欲するところを人に施せ』という黄金率につきる」。ロータリーを生かす道は二つある。

第一は、ロータリアン自身の生活態度、殊にその根底にある精神的な動機で、かつて「ロータリアンの中にもっとロータリーを」という標語があつたように、華やかな会合、楽しいプログラムの中にも、静かに力強く流れるこの精神がロータリーの生命だと思ふ。ただの昼飯会なら、こんなに世界に広がり、続くわけがないでしょう。この生命をロータリーの中に強めることが大切です。

第二は、四つの奉仕部門を通じてもっと現実的に社会につながり、クラブと社会が有機的な血の通いあうことが是非必要である。その町のク

ラブであってほしい。

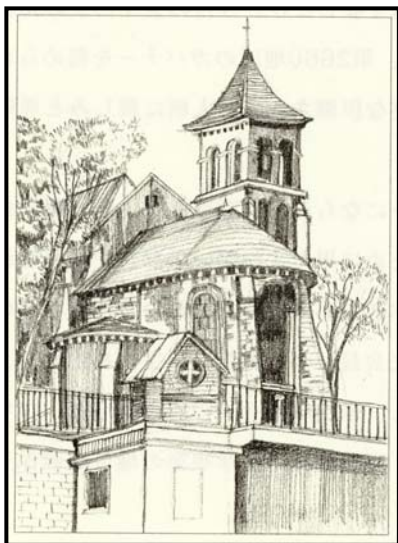
先業の尊い遺産を守り、更に一段の発展を遂げたいものだ。

私は、大阪血液センターの見学会で今田先生の「人間関係十戒」を紹介し、クラブを和やかにするにはお互いに対人関係を好くすることが基本であると伝えたことで、多くのロータリアンからコピーを頼まれ、出席者がクラブを楽しく信頼感あるロータリークラブにしたいという思いがあつたように思う。

互いに、機会あるごとにロータリーから学んだ素晴らしいことを伝えることが大切であると強く感じた。

13

大先輩伊瀬芳吉 パストガバナーに学ぶ 「前赤壁賦」



平成12年12月22日、多くの人に尊敬され親しまれた伊瀬パストガバナーが95歳の天寿をまっとうされた。伊瀬さんの微笑をたたえた優しい姿を懐かしむロータリアンは少なくないであろう。

明治、大正、昭和、平成を見事に生き抜かれた偉大な師であった。大正15年旧制大阪高等工業（現在の大阪大学・工学部）機械科卒業、昭和2年ダイハツ入社、43年社長、相談役、最高顧問と55年間ダイハツに尽くされた。

師は未来を見通す洞察力と、何事も成し遂げる信念をもって、トヨタ自動車との提携をなしとげ、今日のダイハツの発展を磐石なものとした。1979年、第2660地区のガバナーを務められ、公式訪問では飾り気の無い誠実な伊瀬さんのお人柄に親しみと尊敬を集めたものである。

パストガバナーになられた伊瀬さんは、米山奨学会がアジアの向学心ある留学生のために果たす役割の重要さを痛感され、会員からの寄付金を免税にすべきであるとの信念から、同窓の後輩、大平総理大臣、経団

連土光会長に米山奨学会の主旨を説明し、熱心な説得によって免税が実現し、米山奨学会への寄付が増加、毎年多くの留学生に奨学金を与え、民間最大の奨学事業の地位を確保し続けることができた。

伊瀬さんは、かつて高野山大學で仏教を学んだ米山学生ウイマラ・ビイマラ君が大阪を訪れた時にはホテルで昼食をとりながら歓談された、私も同席して伊瀬さんの心温まる話を聞いたものである。ビイマラ君はスリランカに帰国後「孤児の為の少年の家」を建設して恵まれない孤児に物心両面の支援を続けられた。伊瀬さんは高齢になられて、私に今後のことを託された。現在、私と八尾ロータリークラブでビイマラ君の支援にあたっている。

伊瀬さんのバイタリテイあふれる活躍の基礎にあったのは、旧制、三豊中学校（観音寺高校）の頃に培われたと拝察される。中学4年生の頃 赴任された漢文の細川敏太郎先生の薫陶にあったと私に話されたことがある。

伊瀬さんは理数系が得意で、国語、漢文は苦手であったが、細川先生の漢文の朗読の素晴らしさに引き込まれ、自分も一生懸命に朗読、暗記されたそうである。この暗記する努力の良き影響は、何事でもやれば成し遂げられるという自信を与えてくれたと話されたことを思い出す。伊瀬さんは、細川先生が力をこめて教えられた蘇軾の「前赤壁賦」の長文を諳にじるまでの努力をされたそうである。

私も中学時代に松隈先生から赤壁の名文を覚えるように、の言葉にそって覚えたことがある。それは「月明らかに星稀に、烏鵲南に飛ぶとは、此れ曹孟徳の詩に非づや。西のかた夏口を望み、東のかた武昌を望めば、山川相繆うて、鬱乎として蒼蒼たり。」とこれだけである。伊瀬さんの覚えられた全文と比べれば1/20にも当たらない。

伊瀬さんは中学4年生で覚えたこの名文を亡くなる日まで記憶の中に持ち続けられたのであろう。私は、特に親しくしていただいた関係もあって、よく赤壁を聞かせていただいた。最後に聞いたのは、確か91歳の時であったと思う。

この頃、ダイハツ、ダイハツデーゼルの元社長、私と秘書を阪急系の高級レストランに呼ばれ、食事をしながら自分の亡くなったあとの役割を依頼された。『根回しの伊瀬さんの面目躍如』たるものを感じた。

今もよく伊瀬さんのことを思い出すが、若き日、真剣に「前赤壁賦」を何度も何度も読み、暗記する大変な努力の成果は、90歳でもなお諳んじることができて、このような努力が英会話の練達を生み、ダイハツに外国人が訪れたときには社長を呼びにいった、という信じがたい言い伝えが残っているほどであった。

また、八尾飛行場で、飛行機の操縦練習通われ、免許を取られたとか、何にでも挑戦された資質は中学時代、細川先生から学んだ「前赤壁賦」の自信からではないだろうか。

ダイハツにとってトヨタ自動車との提携に大変な努力をされ、事業の繁栄の基を築かれたのも伊瀬さんのやりぬく信念からであったのだろう。私は、ロータリークラブに入会したことで、他では得られない素晴らしい多くの教えをいただいたとに感謝している。それには、常に人か

ら学ぶ姿勢を持って、人から受け取る謙虚さが大切だと思う、その意味でもロータリーは多くの人との交友を通じて学び、行動に移す意志を高める場であり、人としてなすべきことを知るための人生の道場であると思う。

年配になっても大いに語り、笑い、大いに楽しめるのもロータリークラブなのである。

14

自分流の速記術一 それが私の宝物



私が大阪大学の工学部に入学したのは昭和22年4月である。日本が第2次世界戦争で敗れたのは、昭和20年8月15日だから戦争が終わって1年8ヶ月後に入学することになる。

当時の大阪は爆弾や焼夷弾の攻撃を何度も受け壊滅状態であった。見渡す限りの焼け野原、親兄弟が離れ離れになり、家も金銭も失い、食べ物に困り、働く場もなく、ただ呆然としている状況が続く、遠方の農村に買出しに行く人の往来が頻繁で、闇市も賑わいを見せていた。

このような社会状況の中で、学び舎で勉強のできる自分の幸福をしみじみ感じたものである。大学も爆撃のために校舎に大きい被害があり、半年間は枚方市御殿山の元火薬庫の建物で、数学、材料力学、流体力学、などの講義を受けた。講義には教科書、参考書、文献などが必要であるが、何度も受けた爆撃で書店の本が灰となって消え失せ、参考資料は一切無かった。どうしても必要なものは、京都の丸太町の書店ま行って探したものである。

その頃の講義は、教授が黒板に書いた数式をノートに書き込み、説明

を速記する方法以外に道は無い。しかし、小さい声でボソボソと分りにくい説明、早口でついていけない先生、黒板に書いては直ぐに消してしまふ講義には困ったものである。理数系の講義はちよつと数式を間違えると意味をなさない。

大學の講義は、後日参考に残す為に、鉛筆ではなくペンで書くようにというジンクスめいた伝統があつて、毎日小さいインク瓶と、かぶらペンを持つて講義を聴いたものである。早いスピードの講義でも、ペンをインク瓶につけながら一生懸命に書いていく、インクが少なければかすれるし、インクを沢山つければポトーンとノートに落ちる、吸い取り紙で押さえても丸い型がつく。現在、ボールペンを使いながらこんな便利なものが大學生の当時にあつたなら、どれだけ助かつたかとの思いがする。

私の学友23名の殆どが講義の速記を諦めたのか、最初からギブアップしていたのか、講義の記録をしっかりと取っていたのは私と谷口君ぐらいであつたようだ。その谷口君が結核で長期欠席したので、頼りは私

一人のノートになった。2期制であったが、試験の2ヶ月ほど前になると、ノートを借りにくる。自然にノートの順番が決まっていたようで、試験前になってもなかなか返ってこない。誰が持っているのかと聞けば、恐らく〇〇君だろうとすまし顔。返ってきたのは試験直前、試験の結果は借りて勉強した方が私より上だった、という笑えぬ實際の話があった。

現在のコピー機があれば問題なかったのと思う。私は、参考書の無い大学生活の経験から現在も大いに役にたっている「自分流の速記術」を身につけたことを有り難く思っている。この速記術は、聞きもらさずに記録することで、何事にも関心が深まり、年配になっても少しは脳の鍛錬になっているようである、貧しい環境の中で訓練した「自分流の速記術」の功德であり、総代をつとめ教授をはじめ多くの学友と長く親しく付き合えたのは私の人生の華である。

ロータリークラブに入会して早速、会報委員をつとめることになった。会長、幹事の報告から卓話の速記まで「自分流の速記術」が威力を発揮したのである。その当時、卓話の記録は長く残るものということで原稿

のチェックをしていたく慣わしがあり、歌舞伎の批評や文芸関係の多忙な仕事をしておられた専門家の大鋸会員に見てもらおうことになった。

毎週の会報の原稿は、いつも赤鉛筆でチェックされて帰ってくるので、直された原稿を見ながら、はずかしい思いをしたそうであるが、私の場合にはチェックが少なかったので不思議がられたものである。やはり「自分流の速記術」の効果であったのだろうか。この冊子の原稿も書き溜めたものの中から取り出したものである。

2004年大阪ドームで開催された国際大会の本会議は、舞台を明るく、満席で膨れ上がった参加者席を暗くして始まったが、暗くて手元がほとんど見えない席でボールペンを走らせている私に、眼科を専攻した妻は「肩もこるし、眼も悪くなるのでやめてはどうですか！」と注意されたが、そんな忠告も聞かずに書いた。

大会前に開かれた国際研究会の「ロータリーの心」、大会本会議のグリーンE・エステスRI会長のスピーチ、緒方貞子元国連難民高等弁務官の

話などの原稿が残っている。後日、ロータリーの友に掲載されるもので書いてしまふ、これも因果な習慣といふべきであろうが、これが私の宝でもある。

最近では、3年前に習ったパソコンで卓話の原稿をつくり、速記メモでこれらと思うものを打ち込んでファイルしている。ファイルしていくことで色々な発見がある、仕事をしながら細かい時間を継ぎ合わせての記録づくりである。

私は、社会的常識でいえば、曾孫の世話をしながら生き甲斐を感じる年齢になったがロータリーのお陰で、仕事の合間をぬって卓話の原稿つくるなど、忙しく、前向きな意欲を掻き立ててくれるロータリーがある。こんな気持ちにさせる組織は他にあるまい。何もせずに年を重ねるのも人生であるが、少しでも人のお役にたち、やりがいのある毎日を迎え送るのも人生である。

積極的な気持ちを持ち続けることが元気の素であるとすれば、私の元気の素は毎週、ロータリークラブの例会に出て、楽しい話、大声で笑い、

菓子を食べながら駄弁り、時には人の相談に乗り、歌をうたい、バカ話に花を咲かせること、こんな元気の素はなかなか見つからないもので、厳しい日常生活の中で、素朴な喜びのなかに身をひたす、これもロータリーの素晴らしさではないか、

さあ！ 肩の力を抜いてみんな、ロータリーをエンジョイしようではないか。

15

一隅をてらすもので
私はありがたい



私のクラブに白井勇さんがおられた。東京大学法学部を卒業後、住友本社に入社された。戦時中、住友金属の和歌山製作所の取締役工場長をつとめられたが、戦争終結後ページにかかり住友を退社されたが、やがて柏原機械製作所の社長に復帰された。

会社が八尾ロータリークラブのテリトリイにあつたことから当クラブに入られた。古武士然とした風貌に会員たちは畏敬の念さえ覚えたものである。白井さんは私たちと一緒にクラブライフを大いに楽しまれ、俳句、茶の湯、小唄を始め親睦旅行にもよくご一緒したものである。

白井さんは、クラブ創立10周年に感想文を寄せておられる、「人間の生活は、職業とか出身校、その他何らかの系列を同じくする者が集まるのが普通であるが、ロータリーは職業、年齢、経歴の異なる選ばれた人達が、何の制約もない一つの集団をつくり奉仕の精神を具現するという素晴らしい集いであることに、私の人生行路の中で貴重な体験を頂いた。しかも私は和やかな雰囲気のなかで多くの「心の友」を得たのである。それは金銭では求め得ないもので、私の生涯を通じてほのぼのとした

春の光を与えていただいたことを、この上もなく感謝している」という一文と、自らの信条として、『一隅を照らす』を寄せられた。

私は白井さんがページという戦争の苦しみを体験をされたことで、いっそう人と人との温かく和やかなロータリークラブの交わりの中で、春の光のような人生の喜びを満喫されたことを昨日の事のように思い出す。激動と苦しみの半生から、クラブの会員になられて精神的な安らぎと満足を与られたロータリークラブの素晴らしさを、また一つ見出すことができた。

白井さんの話には続きがあつてクラブ創立15周年にも自らの信条を次の詩に託されている。

一隅を照らすもので私はありたい

私の受け持つ一隅が

どんなにちいさい みじめな はかないものであつても

悪びれず ひるまず ただほのかに照らしていきたい

この白井さんの信条は私の心に深く刻み込まれ、忘れえぬものとなったのである。後日、私は思わぬ時に、この詩と出会うことになる。昭和史に大きい足跡を残された安岡正篤氏に学んだ神渡良平さんは「安岡正篤の世界」を書かれたが、その中で見つけたのである。

この詩は住友グループの中興の祖といわれた田中良雄氏が作られたものであった。私はこの本を読みながら、今は亡き白井さんと再会したような懐かしい思いがした。

神渡さんの本は、読者の口コミで反響をよび、毎日多くの手紙が配達されるようになった。この中に、堺で豆腐屋さんを営んでおられる橋本さんからの手紙があった。橋本さんは神渡さんの「安岡正篤の世界」で田中良雄さんの詩「二隅を照らすもので私はありたい」に触れたときに、「そうだ、店が大きいとか小さいとか、そんなことで悪びれまい。それよりも自分がお客様にお渡しする商品のなかに、どれだけ真心が込められているか、素材を厳選し、いい大豆言を探し、ニガリも天然のもの

を仕入れ、懸命の努力で自分にできる最高の豆腐を届けようという気持ちになった、というのである。それから肩の荷がおりて、店を大きくしようとか、お得意様を広げようとか、そんなこと以上にお客に自分の真心のこもった商品を届けよう、その結果として取引が大きくなることもあるが、本末転倒してはならないという気持ちで仕事に励んでいます」という内容の手紙であった。

神渡さんは大変感ずるものがあり、大阪での仕事を終えたあと、堺まで足を伸ばした。橋本さんの店は、金岡ショッピングセンターの小さいお豆腐屋さんであった。神渡さんは長靴姿の橋本さんに話を聞くことが出来た。

橋本さんは「私は昔金沢である会社の工場長をしていました、270人ほど使って仕事をしていたのです。考えるところがありましたして会社を退職してこの地に移り、家内と二人で豆腐屋をはじめたのです。高校生になった長男は、どうして270人使っていた工場長から夫婦だけの町の豆腐屋に成り下がったのか、何故だろう」と不審を抱いたのでしよう。

息子はだんだん私の目を見なくなつた、話をしなくなつた。私にはそんな息子の気持ちの揺らぎが伝わってきたから何もできなかった。ある朝、息子がトイレに起きてきた時でしょうか、私が毎朝仕事に掛かる前に、田中良雄さんの詩「一隅を照らすもので私はありたい」を諷んじて仕事にかかつているのを見て「あ！おやじは、こんな姿勢で仕事をしていたのか、豆腐づくりをしていたのか」それから息子さんがおやじを見る眼が変わり、お父さんの仕事にかける姿勢を心安く思うようになったというんですね。

私ははその話を聞きながら目頭があつくなくて涙がとまらなかつた。商売をやっていると誰もが、会社の伸びが気になるものである。しかし橋本さんは伸びより商品の質の程度を問題にしようと考えていらつしやる。近年自分の利益を優先して他を顧みない風潮が蔓延しているなかであつて、この話は私たちに多くのことを教えているように思うのである。

事業を経営していると、どうしても利益を上げることには奔走して他を

顧みない状況に陥るものである。しかし、事業成功を成し遂げる

秘訣は、橋本さんの信条と同じ所にあるのではないか。

それは、丁度、ロータリーの職業奉仕の「相手の身になって考え、相手のお役にたつ行い」を永年にわたって続けることで、お客との間に精神的な信頼関係が深まり、これによって事業の永続と繁栄が築かれる。このように見ていくと橋本さんの豆腐屋さんは、今零細であっても仕事にかける心を持続していくことで客との信頼関係を深め、成功への道を歩むことになるのではないかと思うのである。

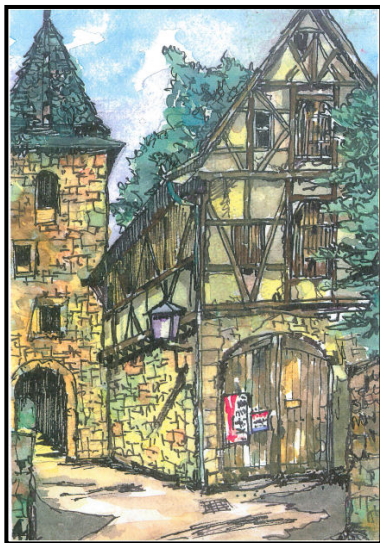
私は、白井勇さんの詩に触発され、白井さんは企業の実業の先輩田中良雄さんに学ばれ、橋本さんは神渡さんの書いた田中良雄さんの詩から影響をうけて自分の仕事にかける姿勢とし、息子さんの目を開く役割を果たしたことからみて、田中良雄さんの短い一遍の詩が多くの人たちに計り知れない素晴らしい影響を与えていることに驚きを覚えるのである。

ロータリーライフの中で常に注意深く観察すること、何事からも学ぶ気もちを持ち続けることで、思わぬ教訓や感動が得られるものである。

そのうえ、楽しみと友情と人のお役に立ち、優しい心を育むことが出来るとすれば、これほどありがたい場は他に見当たらない。私も白井さんのようにロータリーライフから、生涯を通じてほのぼのとした春の光を与えていただいたことに感謝し、44年の私のロータリーライフを更に延ばしていきたいと願っている。

16

現在の幸福論から、 幸せなロータリーライフ を考える



1992～93年度、ある地区大会のパネルディスカッションのパネリストに迎えられたことがある。この大会で、私が常々尊敬している草柳大蔵さんの講演があつて、演題は「現代の幸福論」であつた。その話からロータリーを考えてみた。

草柳さんの話、幸福論の本はさまざまなものが出版されているが、岩波文庫から出ているアランの「幸福論」などが非常に売れるときもあるが、一年半ほどしてスーッと売れなくなることがある。この現象は時代の背景と連動しているようで、世の中の価値観が狂つて生きていくのが重く鬱陶しい気分になつたときにアランの「幸福論」が売れ、世の中の調子がよく元気になつてくると売れないという現象があらわれている。

今年度、ダクターマンRI会長はロータリーのテーマとして「**Real Happiness is Helping Others**」[誠の幸福は人助けから]と素晴らしいテーマを掲げておられるが、それが、どうも現在の幸福論を整理させる一つの条件といえるであろう。

これは「他人のために働いた時に感ずる喜びと幸せ感」というもので、

今の日本には「他人のために働く」という人間としての重要な要素が少なくなっているのではないか気になるところである。

「幸福」の定義は沢山あるが、現在経済学の新しい定式に、欲求と所得の関係があつて、次のように表されている。

幸福Ⅱ 所得／欲望

人間にとって欲望は際限なく大きくなるものである、「あれも欲しい、これも欲しい」ということで、一定の所得しか得られない場合には心の平安は訪れないし、幸福感が満たされないことになる。

幸福を、欲望と所得の定式で表せば定量的で使いやすいものとなり、所得が欲望以上に大きくなれば幸福になり、世の中のギスギスしたものがなくなるようになるだろう。

例えば、日本の労働運動をみると、ゼネストとかストライキを打って世の中が混乱した時代があり、その過程を経て給料は世界一の水準になり、国民すべて中流と言われるようになった。所得水準が上がれば労働

運動が下火になったという事実からみれば、「幸福＝所得／欲望」という定式は正しいといえるであろう。

しかし、沖縄では、東京の所得の62%しかなく、所得／欲望からみれば幸福度がうんと低いことになるが、実はそうではないのだ。東京や大阪の若者が沖縄に行くと、みんな涙ぐんで帰ってくる。「どうしてあんなに心優しいのだろう。一回しか会っていないのに、どうしてあんなに人なつこいのだろう、5年も6年も沖縄に住んでいるように私を扱ってくれた。もう一度行くなら沖縄だ」といって日本の観光地の中でリピーターが一番多いのが沖縄である。

その一つにメロディーがある、東京にも20以上あるディスコの数箇所に琉歌ロック専門の店がある。それは12ビートで表現したもので、リズムはロックだが、メロディーは琉歌、沖縄の歌である。その店に入ると髭を生やした若者や、スケバンの番長みたいな女の子もうっとりしている。

「どうしてそんなにいいのだ？」と聞くと「私達の世代はもう12ビ

ートでなければ、感覺的についていけないのよ」という。

琉歌ロックが沖繩に若者を引きつける魅力の一つがこれである。

二つ目は「どうして人々がそんなに優しいのだろうか」で、その背景にコミュニティの問題がある。

沖繩には結（ゆい）があつて、どんなに小さい村にも5つか6つの結がある。同じ血縁で結ばれたものや、同じ職業の連中、大工さんなら大工さんの結があるし、屋根を葺く人の結、漁師なら漁師の結もある。これらの結が社会の土台になっている。

冠婚葬祭は勿論、ニューヨークから誰かの甥が帰ってきたとか、いろんな理由をつけて集会を開き、豚肉を持ってくる人、魚を持ってくる人、採りたての野菜を持ってくる人、酒を持ってくる人、それぞれに応じた物を持ちよつて、アワモリで酒盛りが始まる。

みんなが飲み、飲んだところで琉歌が始まり、やがて琉舞が始まるが、歌も舞いも昔からのものではなく、全部アドリブなのである。誰と誰が婚約したとか、子供が生まれたとか、いろいろなことをテーマにしてパ

1ツと歌を作ってしまう。歌ができると蛇皮線が新しい曲を追っていく、すると、おばあちゃんが立ち上がって踊りだし、みんなが手拍子であとから、あとから踊りの輪の中に入っていく、あれほど創造的な空間は見当たらない。所得が東京の62%にもかかわらず、沖縄の人々の心はいつも春風だ。

しかし沖縄にも高齢の波がおしよせ、一人暮らしの老人が5年前に比べて2倍に増え孤独になって、以前に比べて結いも少なくなったということである。

ところで、日本の大和言葉で「幸福」のことを「幸せ」という。

この意味は「することを合わせる」—get together「一緒にやろう」という意味で、一つの目標に向かってみんなが力を併せて汗を流しているとき、「ああ幸せだ、俺には一緒にやってくれる人がいる」こんなところに、仕合せがある。

この話からロータリーを考えた。「生きていくことは、必然的に困難や苦しみが多いものであるが、この有限、無常の世の中であればこそ、日々

の小さい喜びを見出し、積み重ね、思わぬことに感動するというのも亦この世なのである」こんなことを知るために、ロータリアン一人一人が力を合わせてやっていくと、分らないことが次第にわかってくる。

ロータリークラブは、人と人との親睦と信頼関係を築きながら調和のとれた自分の成長を目指す場であり、人と人との関りの中から自分を創る場なのである。会員一人一人が人のために尽くす奉仕の道を歩み実践していくことで、仕合せな自分を見出すとともに、自分自身を高めることにもなるという、人間関係の妙味を自然に身につけることができる場なのである。

ロータリアンそれぞれが事業経営の熟達の手であり、多くの経験と苦難を乗り越えてきた人々である。それらの会員は毎週開かれる例会に集い、みんなが同じ立場にたって気兼ねなく親しめる場でもある。

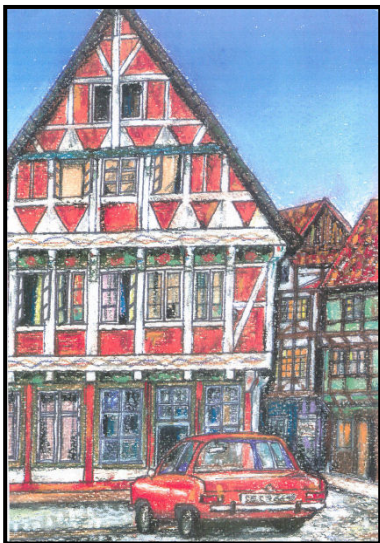
このように考えると、ロータリークラブは一つの「結」ではないか。持ち寄るものは肉や魚といった物ではなく、一人一人の手柄であり、職業上の経験であり、思いやりの心助け合いの心である。地域社会や世界

のどこかに必要とされるものがあれば進んでお役に立とうと力を合わせて行動する仲間が集う場である、そこにはいつも温かい笑いがあり、そこには、いつも春風が吹いている。

しかし、沖縄にも高齢化が進んでいるように、ロータリーにも会員の減少傾向が現れている。ロータリーという結が、長く続いて会員自身のためになり、地域社会、世界社会に役立つ善意の世界組織として存在するために、新しい仲間を迎えて楽しい雰囲気の中で共に育っていくために全会員が力をあわせて取り組まねばならない。新しい仲間を迎えることは、先人が築き残してくれた他に例のない思想、組織を次の世代に繋いでいく為に、絶対に欠かすことの出来ない重要で大切な問題なのである。

17

指導者道 ・・・愛はおしみになく



私がロータリークラブへ入会した当時、誰もがそうであるように、「ロータリーが何であるか」いっこうに分らなかった。

創立一年目で会員数の少ないクラブにとって新米の私でも使い勝手がよかったのか、入会2年目から副幹事2年、幹事2年と続き、一年おいて42歳のとき副会長に指名された。丁度その年、1968～69年度の地区ガバナーに、私の生涯の恩師・原田秀雄先生が勤められたのである。

原田先生は、小学校5年で中学校に合格、5年制中学の4年から最難関の旧制第1高等学校へ進まれるという秀才コースを経て、東京大学・工学部・船舶工学科に入学され、当時、日本海軍の艦船設計の頭脳といわれた同科で、後に総長になられた平賀 譲教授の薫陶を受けられた。

先生は、2段飛びの秀才コースを進まれた逸材であったが、気難しい秀才とは違い心温かい気配りと、ユーモアのある紳士で先生の講義は、しばしノートをとるのも忘れるほどの名講義であった。私がロータリークラブに入ってから先生にお目にかかる機会が多くなった。お会いする

といつも「やあ、元気そうだね・・・」と学生性時代と同じように声をかけてくださった。

さて、原田ガバナーは、福井、滋賀、京都、奈良、大阪、和歌山の広範囲に存在するロータリークラブを訪問しなければならない、遠隔地への訪問は泊りがけというハードなスケジュールであったようである。

10月のある日、八尾ロータリークラブの公式訪問にこられた。小柄でスリムな体型とベージュの中折帽子は大学時代の教授そのままの格好であった。3時からクラブ協議会が旧都ホテルで開催された、原田ガバナーは委員長の報告に耳を傾けられ、質問には適切に答えられて、参加者全員は適切な指導と爽やかなスピーチに感銘をおぼえたものである。

5時30分協議会が終了し、ガバナーへの感謝の言葉は例年通り副会長が述べることになっていた。いよいよ私の出番である。

私は覚悟をきめて「原田ガバナーは、私の大学時代の最も尊敬する生涯の恩師であります。不肖の弟子の私をはじめ、八尾ロータリークラブの会員に数えきれきれないほどの御教導を頂きました、ロータリークラ

ブの果たす役割をはじめ、多くの質問に分りやすくお教えを頂きまして真に有難うございました。本日いただきましたお教えを胸に会員それぞれが気持ちを新たに活動して参りたく存じております、本日は長時間の御指導有難うございました」というような謝辞を述べたが、恩師の前では冷汗ものであった。

原田先生は工学部長などを歴任され、国際ロータリーの理事をつとめられ、多くので弟子や、多くのロータリアンに慕われて、輝かしい人生を送られたのである。

原田先生が私達に感動を与えられた話は今では思い出すことはできなかったが、最近ロータリー文庫に依頼した資料の中に、原田先生と同期のガバナーをつとめられた塩釜ロータリークラブの佐々木統一郎・パストガバナーの「指導者道・愛はおしみなく」を読むことができた。

資料の後段に、レイクプラシッドの国際協議会において、国際ロータリー副会長の「J・ハリー・トンプソン氏の「指導者としての任務」と題する講演があり、リーダーシップとは、誠意であり、上も下もない一視

同仁の信頼と愛情に始まる。と指導されて、印象に残る二つの挿話があった。

トンプソン氏の話「何年前、私はある大臣の晩餐会に招かれた時のことです。会場に入ると、ホストの大臣が招待客に挨拶をするたびに、赤い服に白い手袋の秘書が、何々卿、なにに伯爵と大声で会場に紹介していました。やがて私の番になったとき、私に、あなた様は、と聞くので、ミスター・トンプソン、と答えると、けげんな顔をして、トンプソンさんとおっしゃいましたか、と聞きなおし、そうだと答えると、彼は低い声で、ミスター・トンプソン、と紹介しました。

私は大臣の前に進み出ましたが、彼は何々卿と話し続けていました。私はかまわず彼の前に出ると、彼は右手を差し出したので私も彼の手を握りました。しかしそのあいだ、彼はなにに卿と話し続けたまま遂に私の顔を見もしませんでした。とに角、私に対する大臣の態度はこんな具合でした。

彼は私から何の印象も受けなかったことは明瞭ですが、それはお互

い様で、私も大臣からなんの感銘も受けませんでした。

この話は、指導的立場にある人が、人を遇するに一視同人の誠意と礼儀をわきまえない適例であります。

これとは反対に心温まる話を紹介します。

或る日曜日の夜、一人の若い婦人が始めて礼拝にきました。礼拝式が終わった後、牧師は長老たちと立ち話をしていましたが、見慣れぬ婦人に気づき「よく来てくださった。どうぞ次の礼拝にも来てください」と温かく握手して彼女の名前を尋ねました。

牧師の温かい態度に感謝した婦人はそれ以来、教会の常連信者になり、2、3年後に牧師となって、この教会からウガンダに派遣され病院の保育主任になりました。

そのうち彼女の両親が現地を訪れ、彼女の立派な仕事を見て感心し、他になすべき仕事が多くあることを知って帰国しました。

たまたま、この父親がロータリアンであったので、この話を例会で紹介したところ、会員たちも感激して直ちにその病院に酸素器具を寄贈し

たのです。これを聞きつけた近隣クラブも共同事業として救急車一台を贈り、さらにこのニュースが拡がると、毛布などを送ろうという夫人が続々と現れました。

これら一連の美しい話が、中央事務局の知るところとなり、その年度の国際協議会で紹介されると、感銘を受けた数地区のガバナーエレクト達が地区へ帰ってこの感動の事例を紹介し、たちまち6000ドルの募金が集まり、ウガンダのカンプラロータリークラブを通じてその病院に水力発電機が設置されたのです。

この素晴らしい連鎖反応は、元を正せばあの日曜日の夜、牧師が差し伸べた暖かい握手と、僅か一言二言の親切な言葉から生まれたものです。私が敢えてこの2つの相反する話を紹介したのは、ロータリーにおけるリーダーシップの基本的な問題を示し、考えていただきかったからなのです。

皆さんもこの話に感銘を受けられたと思います。私どもの周囲には、やろうとすればできる問題が満ち溢れています。これに対してリーダー

シップは、ささやかな努力に過ぎないでしょうが、トンプソンさんの紹介した一回の握手や、二言三言の温かい言葉もまた、ささやかで何と小さいものでしょうか。また、人の心を満足させ、失われた喜びを取り戻してあげようとする一人一人の努力も、また何とささやかなものでしょうか。

しかし、皆さん、ちっぽけな小鳥でさえ、春の訪れを私達に伝えてくれるではありませんか。一本のローソクの火でさえ、それを暗夜に点火すれば、闇を貫いてあたり一面を赤々と照らすではありませんか。

リーダーシップとは、一にも二にも誠意、そして上も下もない一視同人の親愛の情にはじまるのだ、と申し上げて話を終わりたいと思います。

原田ガバナーも国際協議会でこのような講演を聞かれ、1968〜69年度の公式訪問に生かされて、多くのロータリアンに感銘を与えられたのである。

先生の生きる姿勢は、大学時代に教鞭をとられた時代から、ロータリーの指導者として活躍された時代を通じ、生涯一貫して守ってこられた

のは、正に「指導者道……愛は惜しみなく」であったと思う。

原田先生は「平沢さんの後のガバナーを受けて大変だったよ、何しろあのお人柄だからね、」と漏らされたことがあった。あの優しく思いやりのある原田先生にそう言わせた平沢先生の偉大さと、原田先生の謙虚な言葉を大切にしなければならぬ。

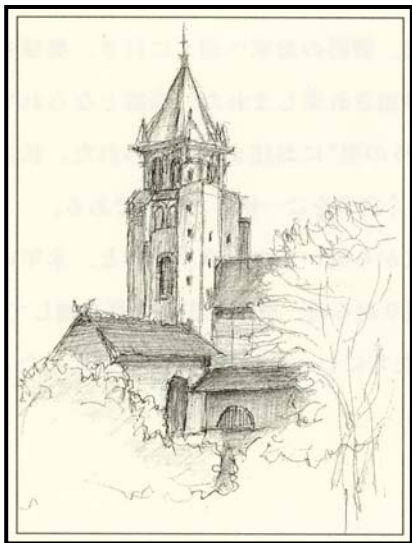
私がガバナーをつとめ、パストガバナーになってからも、先生から変わりになくいろいろアドバイスを頂いたものである。先生も私も宝塚ゴルフクラブの会員であったので、クラブの周年記念の催にはよく一緒に一緒にしたものだ。御影のお家へ迎えに行き奥様も一緒にゴルフ場のイベントに参加され楽しまれた。高齢となられて敏子奥様と一緒に神戸の、ゆうゆうの里にお住まいになられた。私は折を見てはお見舞いに参上し、よく食事を一緒にしたものである。

思えば学生時代から続いてロータリーへと、永年にわたる御指導いただいたことを振り返る時、原田先生は生涯を通じて「指導者道……愛はおしみなく」を私たちにしっかりと教えていただいたことを懐かしく思い

出すのである。

18

釈尊の言葉 「自分が一番愛しい」 から



(1)ロータリークラブは人生のオアシス

100年の歴史を刻んできたロータリーは、世界に約32,000あるロータリークラブの連合体です。各ロータリークラブは「楽しい雰囲気の中で、信頼関係を築き、それを基礎に、世のため人のために役立つ奉仕の心を育て、家庭に、事業に、地域社会に実践し、ロータリーの世界的な組織を通じて困っている人に手を差し伸べよう」という人材を樂しみの中から育てようとしているのです。

そのために「会員みんなで楽しいクラブにすることが第一です。それにはまず「和顔 愛語」が大切です。怒ったような顔をしていれば、親しくなりにくい。穏やかな顔が人を和ませます。次に愛語ですが、優しい言葉遣いで心の扉を開いて人に接することで、やわらかい笑、温かみのあるRCになるのです。

みんなが力を合わせてお互いに思いやりの心で毎週の楽しいクラブライフを送ることは、厳しい砂漠のような社会の中に出現したオアシスに

なるのです。

クラブでお互いに親睦を深めることが、『人のために尽くそうという奉仕の心が醸成されます』。ロータリーは孤独になりやすい人生に多くの親しい友人と毎週の出会いを重ねることで、充実した喜びを見出す場であるとと言えるでしょう。

②「自分を愛する如く 人を愛せよ」

昔、一人の王がお后をつれて城の高殿に登り、王はお后に「実は私はこの世で自分がいちばん愛しい。おまえには自分自身より愛しいものがあるか」と尋ねた。

お后はしばらく考えて「いいえ、やはり私にも自分より愛しいものはありません」とこたえました。そこで二人は互いに「この世でいちばん愛しいものは自分だ」ということに気づきあいます。二人は率直に告白したが、「いったい、これでよいのだろうか」と思い、かねて信仰している釈尊の所に聞きに行きます。

釈尊は祇園精舎に二人を迎え、話を聞くと「そう、それでよいのだ」と深くうなずき「詩句」を与えた。そこに釈尊の教えが書かれ「人の思はいはいずこに赴くこともできるのであるが、何れに赴こうとも、人は自己より愛しいものを見出すことはできない。それと同じように、他の人にとつても自己はこの上もなく愛しい。そのことを知るものは、人を傷つけてはならない。」とあり、「この世で誰よりも自分がかわいい」が、これは「他人についてもいえることだろう。だから他人の気持ちを大切ににしてあげねばならない。」と教えられた。

キリスト教が渡来した当初、聖書の中の「愛」を、「天草切支丹」では「お大切に」と翻訳されたのです。

ロータリーでは、全ての会員の共通の理念である「奉仕の理想」で結ばれています。奉仕の理想とは「他人に対する思いやりの心、助け合いの心」であり、これは、キリストの「愛」、孔子の「慈悲」と相通じるものなのです。

釈尊の前段の教えは、ロータリーの「奉仕の理想」の説明にも通じ 口

「ターリーの基本的な理念は「他人の立場にたって考え、人のお役に立つとうとする心」なのです。

(3) アブラハム・マズローの実験から

マズローの観察の中に、多くの雛を飼った場合、ある鶏は他の鶏に比べてきわだって大きくなる。どんな鶏が大きくなるかと観察すると、餌の食べ方が他の鶏より合理的な鶏であることが分かりました。ここで、大きくなる鶏が食べているものを綿密に調べて、それと同じもの他の鶏に食べさせると大きくなるという結果が出たのです。

これは、極めて示唆に富む観察で、手本がよくて、それをまねると、鶏でも大きさが変わるぐらいの影響を受けるということを現しています。ところで、そんな良い手本は何処にあるのか？ よい手本は、選ばれた人材が沢山いるロータリークラブにあるといえましょう、しかも 毎週出会うのですから、こんなよい手本はざらにはないだろう。

みんなは、「奉仕の理想」という共通の心で結ばれているのです。

奉仕の理想とは、「他人に対する思いやりの心をもって人のお役にたとうとする心」で、この心は イエス・キリストの愛、孔子の慈悲の心と同じ意味をもっています。人間が等しく生きる規範とするべきものなのです。ロータリーは、会員と会員とを結びつけるのが この「奉仕の理想」なのです。

よき師、よき友人は人生の宝です。

我々の人柄をつくりだすには、自分が誰を模範にするかによって決まるといわれます。また、人柄は、周囲の人間の性格や態度、習慣や考え方などによって無意識のうちに形づくられるといわれます。実際の行動を通じた知恵が含まれています。よき友との付き合いは必ず良い感化を受ける。良い交際は素晴らしい恩恵を与えてくれる。

立派な人柄は、人生の最も大切な宝であります。

私が以前読んだ森繁久弥氏の「人師は逢い難し」の中に、彼が母校北野高校で講演した話が載っています。「私にとって母校での思いでは、勉

強ばかりで暗い青春だった。それに、落第の不始末などを話して、ようやく緊張が薄れた頃、「聞くところによると、諸君の中で死に急ぐものがあるそうだが、」と前置きして「諸君、死ぬ前に一つ頼みがある」と切り出し「仮に諸君を15歳としよう。お母さんが受胎して産み落とし、幼稚園から小学校、中学校に入れて15年、其れまでの間に一体どれくらいの間が君一人のために動員されたか知っているか。まず君たちの両親、兄弟にはじまり、助産婦、看護婦さんたち。それから米、麦、ミルクなどを船で運んでくれた船長さんたち。浜で貝殻を拾ってきた人、それを丸く削って穴をあけてボタンをつくってくれた人。勿論君の友達、君を教えてくれる先生。このように勘定していくときりがないが、推定二百万人の人がたった君一人のために何らかの力を寄せてくださった為に十五歳を迎えることができたのです。

君たちはこの二百万人の人に何らかの感謝の挨拶をしてからでなければ、勝手に命を断つことは許されないのだ。それが、出来たなら勝手に思い通りにするがよい。」と話しています。

ここで、思いつくのは、私たちも同じよう何百万人のお世話になって今日があることを認識しなければなりません。だから、私達は多くのお世話になった人たちに報いるために「人の身になって考え、ひとのお役に立つ」所謂「奉仕の理想」の心で人のために尽くすことが望まれるのです。ロータリーは、これを可能にする場であります。

ロータリーはロータリアンとして自分が戴いた多くの恩恵に報いることのできる集いと言えるでしょう。今まで戴いた数えきれない恩恵に報いる「報恩」の心が人間として大切な思いであり、ロータリーはその一端をになっっているのです。

(4)ロータリーは事業の永続と繁栄を築く基本を学ぶところ

ロータリーが他の団体と異なる最大の特徴は、職業奉仕であります。

アーサー・F・シエルドンは、「商売は儲けなければ成立しない、経営者が利益を獲得する為に真剣になるのは当然のことである。しかし、一体どうすれば利益が得られるのか？ それは、取引にあたって、常にお得

意さんの身になって考え、お得意さんのお役に立つ、所謂サービスの心を取引に適用して取引を続けることで、徐々に客との間に信頼関係が生まれ、そのような心がけて永年にわたり取引を続ける内に信用という精神的なものが築かれ、これによつて事業の繁栄と永続が齎される。」即ち「事業の永続的な繁栄はサービスによつて得られるのである」「最もよくサービスするもの、最も多く報われる」という実践倫理の原理に基づくもので、職業奉仕の原点であります。

職業奉仕なくして、商売繁盛は得にくく、商売繁盛なくしてロータリアンになれないでしょう、ロータリーの原点はこの点にあると言えましょう。

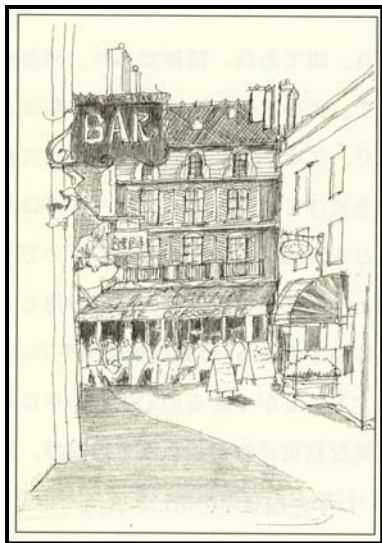
しかし、ロータリアンは地域社会への貢献を目的に掲げていることから、自己の事業の繁栄に留まらず、「事業の成功は、常にサービスの心を取引に適用することで得られることを、事例を示して同業者に伝えることで、業界の倫理を高めることがロータリアンの役割である」が最終の目的といえるでしょう。

ロータリアン個人個人が職業倫理をベースに、家族、従業員、取引に関する人々に「奉仕の理想」を適用することでより良い事業経営が実現するでしょう。

19

Motion は Emotion を生む

(行動は情感を生み、感動を生む)



2005年6月8日、元イスラエル国連大使アシェル・ナウム氏のユーマーを交えた素晴らしい卓話を聞き、著書「子供が伸びるユダヤ式教育」を読んだ。

アジアの始まりがイスラエルで、東の終点が日本です。ユダヤは世界人口の0.3%に過ぎないのですが、ノーベル賞は世界の20%を占めています。アジアでノーベル賞を取っているのは、東の端の日本と、西の果てのイスラエルだけでその中間の大きい地域では取っていません。その理由は、共に教育と躰が行き届いていることと、勤勉な人々が多いからでしょう。

人間は、体であれ、頭であれ、精神であれ、何事も使えば使うほど鍛えられ進歩します。仕事も打ち込めば打ち込むほど面白くなるものです。人は、仕事なり、スポーツ、芸術、などに毎日欠かさず、真剣に練習という行動を続けていくことで徐々に、ではあるが着実に成果が上がっていくことを実感することができるものです。この達成感は現実的な習熟に加え、心に情感が湧き、感動を得ることにつながるのです。このよう

な体験の中から「行動は情感を生み、感動を生む」というサイクルを認識することができるとは、永年にわたって勉強という行動を続け、困難な検定に合格したときの喜び、感動は一人であり、そこから、また新しい行動への意欲が湧いてくるものです。

(a) 人間には2種類の賢さがある

(Intelligence Quotient & Emotional Quotient)

IQ (知能指数) は、遺伝的に個々の人間に備わったもので、人生の経験によって変わるものではありません。私の学校時代、成績が上がらず大いに悩んだものでした。また、IQの高い仲間を超えられなくて、羨ましく思ったものです。

しかし、今になって考えますとIQの高い人が「人生の成功」「幸福な人生」「富や権力」「社会的地位」などの成功者になっているとは限りません。むしろ「**と**」は、また別の賢さがあるのではないかと考えられる

ようになりました。

それがEQです。Emotional Quotient（情動指数、心の指数）です。

EQは、『他人が望んでいることや、他人の感情を思いやる心であり、人と上手に付き合い、人を説得し、人を引っ張っていく社会的な知恵のことなのです。』EQ（心の知能指数）が成功を齎し、幸福な人生を導いてくれるのです。

（b）EQは集中力に影響する

IQとEQの両方に恵まれた人も沢山います。またどちらにも恵まれない人もいます。茲で、EQがIQやその他の要因にどんな影響を与えるか、ということなのです。例えば、怒りやストレスを上手く対処する能力が集中力に影響を与えます。逆にストレスと上手に付き合う能力を伸ばせば、あなたは集中力や知性を最大限に働かせて理性的に考える力にプラスの影響を与えることができるでしょう。IQとEQは互いに

補い合って働いています。

EQは、それぞれの感性、性格、道徳的傾向、及び生活する上での基本的な倫理観（善悪の判断）などの能力がどのように絡み合っているかによって決まります。衝動を抑える能力は、人格の基本となるものです。共感、自分の感情を抑え、相手が何を望んでいるかを感じ取る能力です。

最も重要なのは、自制心と同情心です。

(c) EQは訓練によって育つ

人は訓練によって衝動を抑え、他人の心の奥底にある感情を読み取れるようになり、人とうまくやっけていけるようになるのです。

気質は生まれつきのものでなく、訓練によって変えられるのであり、つまり人の感情をコントロールする方法を学ぶことが出来るのです。

① 自分の感情を知ること

② 心配は不安の表れ、心を別のことに向けることで不安を取り除く
（11）。

③ 感情をコントロールし、心を鎮め不安を心から追い払う

④ 自分で意欲を高めること、つまり自分自身を動機づけすること。

⑤ 感情や共感、社会的な知恵について理解するために、人とのつきあひ方、チームの中でうまく適応し、誰とでも仲良く行動し、誰からも好かれる人になることで、良き友人、良き家族人となります。

⑥ 人との関係を上手に扱えること、現代ではチームを組んで仕事をすることが多く、EQの重要性が高まる。

⑦ 感情の乱れは、健康に悪影響を及ぼす。

⑧ 楽天的な考え方には、「癒しの効果」があります。

(d) ロータリーライフは会員のEQを高める幸福への階段

「人は人の中でこそ人になる」という諺があります。人間は、親 兄

弟 先生友人をはじめ、多くの人の中でこそ人になっていくのです。成長の段階にそって、付き合う人の層も変わってくるでしょう、それは、成長につれて欠かすことのできない大切なことです。

私たちが社会人になり多くの人と付き合う必要に迫られます。

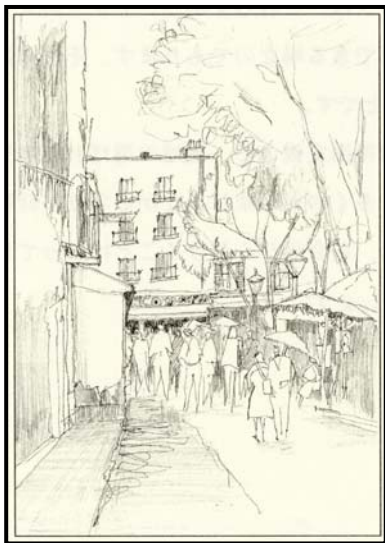
「人づき合いの技術」は経験によって身に付くものです。人付き合いの技術は、「思いやりの心、助け合いの心」を自分のものとし、この心で付き合っていけば、相手から信頼を得て良い人間関係を築くことができるのです。

ロータリークラブは、これらを学び、トレーニングし、人柄を高め、楽しみながら修練できる場なのであります。それには、常に心がけ、たのしみ、励むことです。

社会に出て、損得勘定抜きで、地域の選ばれた実業人と週1回の出会いを長く続け、多くの人と楽しみながら学び、経験を積み重ねるロータリークラブは、各会員が心がけることによって、**自己**を高める又とない場といえるでしょう。

20

新会員研修セミナー余話 「ある出会い」



2002年4月20日に地区協議会が開催された。プログラムの中に新会員のためのセミナーが生まれ、過去4年間に入会した約400人の新会員が参加することになった。研修時間は1時間30分、講師は私が受け持ち1時間10分の話と20分の質疑応答というスケジュールで始まった。

新会員研修の場合には、講師が一方的に喋るだけでは殆ど効果を挙げることとはできないことを過去の経験からよく知っていたので、事前に新会員のテキストにもなる「ROTCARYってなんですか？」56ページの冊子を用意した。

セミナー当日、新会員に私が指定したページを開かせ、説明箇所には赤ボールペンで印を付けてもらい、私が読んで新会員が同じ文章を眼で読む。この方式は、眼で見て耳で聞くことでロータリーへの理解度を高めることができる。以前に私が読んだ本の中で解説されたもので「なるほど！」と感心した方法をセミナーに採用したのである。当日、私が指定した20項目のロータリーの話項目毎にゆっくり丁寧に説明して時

間内に説明を終え、幾つかの質問に答えてセミナーを終えた。

セミナー終了後新会員の何人かが「初めてロータリーの話聞かせていただいたように思います。有難うございました。」と礼を言われたいへん嬉しい思いをした。

これには後日談があつて、セミナーの2日後の4月22日、吹田西ロータリークラブの依頼で「2004年の大阪国際大会について」の卓話をする事になっていた。

当日の卓話を終えて親しいメンバーの皆さんと雑談を交わしているところへ、新会員3人が先日のセミナーのお礼に来てくれた。

その中に江坂東急インの取締役総支配人の大谷敏治さんがいて「先日のセミナーありがとうございます。お話しの中に平沢先生の素晴らしい言葉を聴くことができて大変懐かしく思いました。実は私が小さい頃、祖父に連れられて神楽岡の平沢先生のお宅へ何度もお伺いしたことを憶えています。頭を撫でていただいたり、抱いていただいたり、今も先生の優しい姿を思い出します。今日にお話のようにロータリーには

思いもかけない出会いがあるものですね」と言って1枚の写真を見せていただいた。「この中央に写っているのが平沢先生、右は私の祖父足立丈太郎で平沢先生と同じ医学者です、左は私の叔父の井上靖です」

彼は、私が卓話に来るのを週報で知って押入れの中から古い写真を探し出して持ってきてくれたそうである。私は大谷さんの温かい心に感謝し、思わぬところで若い平沢先生とお会いすることができ、思わぬ回り合わせを喜んだ。

大谷さんの祖父足立先生は平沢先生の恩師であり、京都大学の解剖学教授として多くの弟子を育てられた。足立先生の明快な講義とユーモア―あふれるお人柄は有名で、学問にかける情熱はすさまじく、解剖学、特に柔部人類学の提唱者として世界に誇る医学者との評価高く、部外者の私でも存じ上げるほど高名な医学者で、多くの人から尊敬された方であつた。

左に写っていた井上靖さんは、誰もが知っている大文学者である。旧制第4高等学校の理科在学中柔道の名選手として活躍、京都大学の哲学

科に入学し7年かけて勉学を続けている頃 足立先生のお嬢さんと結婚したが、足立先生は井上さんに「勉強しなさい」なんて一言もいわず「君は必ず日本一になる、君はそういう男だ」と言い続けられたというのである。

足立先生は井上さんの素晴らしいところを見出し、褒めて勇気を与えられた：そのあたりに人を育てる秘訣があるのではないかと思うのである。井上文学はやがて大輪の花を開花させる。ある文学評論に「井上文学には井上靖の作家精神があふれていた、それは彼の心意気から、平素より丹念に積み上げられたメモがぎっしりと綴られ、それを基礎に築きあげられたものなのである」の論評とメモの写真を見たとき、この大文学者にして、この弛まざる努力、と感動をおぼえたことを思い出す。

井上さんは「自分の限界を超える努力こそ人間の道である」と常に語り、芥川賞、芸術院会員、文化勲章を受章され、敦煌、後白河院、額田女王、鬪牛、孔子などなどの歴史に残る大仕事を完成された。

私は、新会員研修セミナーという、どの地区でも行われているロータ

リーの集いの中にも想像もできない出会があることに驚かされた。人生は出会いであると言われるが、ロータリーにはいろいろ新しい出会いがあり、出会いの重なりともいうべき毎週の例会出席があり、多くの親しいメンバーと交わす会話や触れ合いの中から悩みや苦しみから解放され、新しい発見や喜びがあり、友情と楽しみと信頼感に裏打ちされた温もりの中から生まれる善意が、自分を変えていく原動力になるのではないか。

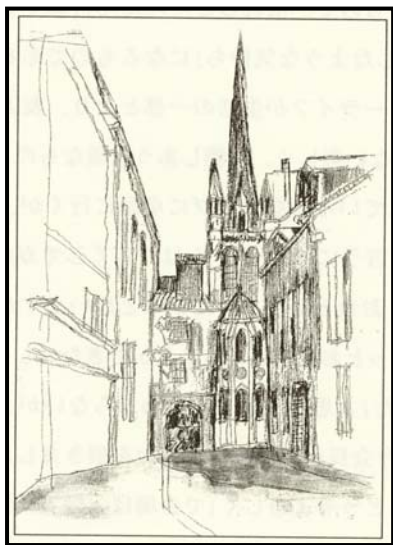
さらに、ロータリーには、楽しみと学びあう中から人間性を磨き合うという特性があることを思うとき、私の44年間の例会をはじめ多くの会合への出席は、到底金銭で贖うことのできない貴重なものであるとの思いを強くしている。

私が入会初期に思った「ロータリーって何だろう」「ロータリーに何ができるのだろうか」という疑問をもっていても多いだろうが、私の経験から「毎週の例会に出席して、心を開いて誰とでも話しをすること、大いに語り大いに笑うことで親しみがふくらんでくる。ロータリークラブの交友は、人と人のお付き合いを身につけるのに最適の場であり、相手

の身になって考える訓練は、事業経営を成功に導くために大切であり、家族の和やかな雰囲気をもたらすのも、相手の身になって考える、ことによるものである。私がロータリークラブ入会を打診され、相談したとき父が私に言った言葉「選ばれた人のお付き合いで、人付き合いと、社会勉強をさせていたただきなさい」を懐かしく思い出す。

21

ロータリー 私の歩んだ幸せの道



私が八尾ロータリークラブへ入会したのは、1962年1月 36才のときである。早いものでもう44年半経った。1982〜83年度のガバナーだから、ロータリー歴の半分以上、ガバナー・パストガバナーを務めたことになる。そのおかげで、多くの人々と親しいお付き合いができ、多くのことを学ぶことができたことに感謝している。

ロータリークラブへ入ったときには、皆さんも同じと思うが、偉い人が沢山いて堅ぐるしく「大変な所へ入ったな、しかも、毎週出席しなければならぬ、こりゃ長続きせんな」が正直な感想であった。しかし、習慣とは恐ろしいもので慣れるとだんだん苦痛でなくなり、出席しないと「忘れ物をしたような気持ち」になるものである。このようにして徐々にロータリーライフが生活の一部となり、友人との毎週の出会いが他では得られない楽しく、信頼しあう貴重なものとなってきた。

私はよく頼まれていろんなクラブに卓話にいくが、あるクラブの会長が私を紹介して言うには「戸田さんは、若くしてガバナーをつとめられました、おそらくお金と暇があったからと思います、ガバナーなどし

なかったら、もっとお金を儲けることができたでしょう」

会長は「しまった」と思ったかどうかわからないが、私は苦笑しながら演壇に立って「今会長から温かいご紹介を頂きました金も暇もない戸田でございます、どうぞよろしく」で会場は大爆笑　楽しい話が出来たことを思い出す。

この時の卓話のように最初に笑いがおこると、居眠り雑談が少なくなるという効果があるようだが、なにをしても居眠りする人もいる、そのような人には「どうぞ安らかにお休みください」ということしかないようである。

①ロータリーのモットーについて

① 最も良く奉仕する者、最も多く報いられる

私たちが探し求めている幸せは、「人を幸せにする時、一緒についてくる」それは、「幸せは香水のようなもので、人に振り掛けようとする時、自分にも2〜3滴ふりかかり、自分も良い香りにつつまれる」という言

い伝えと、ロータリーの「人のために尽くすことが、期せずして自分のためにもなる」と同じような意味で、ロータリーの第2のモットー「最も良く奉仕するもの、最も多く報われる」〔They Profits Most Who Serves Best〕は、日本古来の諺「情けは人のためならず」「人に情けをかけることは、回りまわって自分にも良いことが廻ってくるのだ」と同じような意味であると考えれば理解し易いのではないか。このモットーは、人が常に心得え実行すべき人の道であり重要な実践倫理なのである。

第2のモットーは規定審議会毎に廃止しようとの意見が強く、これに賛成する意見が多くであるが、廃止の理由は「Profits」が単なる金銭的、物質的利得を意味するものであり、ロータリーのモットーとしてふさわしくない、との理由からである。

しかし profits は単なる利得であろうか？ この疑問について、シェルドンは著書「philosophy of service」『奉仕の哲学』の中で Profits について説明がしている。

その解説は「Profits には3つの要素がある。profits の第一の要素

は、人の為にサービスした時に得られる 周りの人々からの尊敬または愛情、(love of fellow men) である。 Profits の第二の要素は、人の為にサービスした時に得られる 自分自身の「良心」(conscience) または自尊心 (self-respect) と言ひ換えてもよい。 porofits の第三の要素は、物質的利得である。

如何なる職業においても、他人からの尊敬や良心を犠牲にしての物質的な利得は真の意味での利益を得たことにならない。そのような人は、一時的に物質的利得を手に入れたとしても、長期的に確保することはできないであろう。

取引相手からのご愛顧を頂き、自分の自尊心が自然に伴ってくる取引でなければならぬのである。

事実、次々と利益を上げ得るためには、取引相手からのご愛顧を頂き、自分の自尊心が自然に伴ってくる取引でなければならぬ。 次から次へのご愛顧を頂き、利益を上げていくためには、個人の行いに自尊心をもち、人々から尊敬されるという二つの要素を併せ持つものでなければ

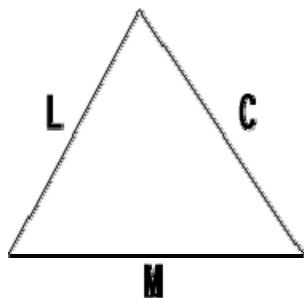
ならないのだ。

人間の努力によって次から次へ取引を広げ、利益を上げ得るご愛顧をしつかりと確保する唯一の道は、その顧客が何度も何度も取引が続くように自然に希望し、その結果、ご愛顧の永続性が保証されることになるのである。

利己主義は、どんな形であつても破壊的であり、周りの人々への奉仕は建設的で「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」というモットーに用いられている利益の概念は、一辺が、多くの人々からの尊敬または愛情 (respect or love of others)、他の辺が、自尊心 (self respect or conscience)、そして底辺が物質的利得 (material gain) という、正三角形によって象徴することができるのである。

L 周りの人々からの尊敬または愛情
(respect or love of Others)

C 自尊心または良心



(self respect or conscience)

M 物質的利得 (material gain)

利益の三要素のどれを取ってみても、その一つに通じる道は無い。しかし、幸いにも、三つの全ての要素に通じる一本の小道があり、その小道の名は「奉仕」なのである。周りの人々に

対して貴方からなされる奉仕であり、周りの人々やその愛顧を惹きつける奉仕なのである。

もう一つの原理は「Service above self」で、「超我の奉仕」であるが、日本のロータリーを築かれた米山梅吉さんは、ポール・ハリスが著した『This Rotarian Age』を翻訳された中で Service above self を「サービス第一、自己第二」と訳された。

これにあてはまる事例に、大丸を創設された下村彦右衛門氏は「商業道でまず志すべきことは、富の集積にあらず、利権の獲得にあらず、た

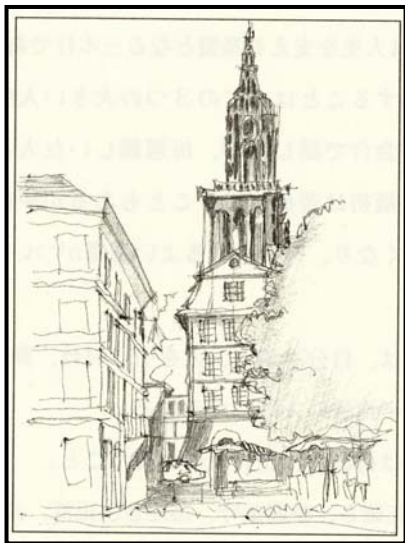
だ、取引の誠実と、顧客へのサービスである。繁栄はこれに伴って後から付いて来るものだ」をモットーとして、今日の繁栄を築いた、これは「サービスを第一に 自己は後に」を実践されたことによるものであり、この標語は事業の成功の鍵を教えている。

私たちは、自分の事業の成功への道を見つけるのに試行錯誤と苦労を重ね、まだ青い鳥を見つけ出すことができない、ロータリーに入会しても何も分らず永年過ぎしてきたがシェルドンの profits の理論から、それは「お客から受ける信頼と、自分の中にある良心が profits を生む基盤であることを認識することができた。

自分を見つめ直す場としてのロータリーを見出すことができた思いであり、ロータリー・私の歩んだ幸せの道、を強く感じる今日この頃である。

22

ロータリークラブは 自分を磨くところ



(A)ロータリークラブへ入って何のメリットがあるのだろうか？

最初は誰もがそのように思うのではないか。古い会員に聞けば「ロータリー？出席している内にわかるよ」と教えられた。

ある日、腹痛のために欠席しようと思ったが我慢して出席した、昼御飯が食べられずに残念だったが、多くの会員は美味しそうに会食を楽しんでいる。

そこで「ロータリーに皆出席を続けるには健康第一だな」と思った。そして「ロータリーに出席するための条件は、健康であること、仕事が順調であること、家庭が円満であること、この3つが大切であり、しかも、この3つは人生を支える基盤となる三本柱であることを思えば、ロータリーに出席することは、この3つの大きい人生目標達成に繋がると思う」とある会合で話したが、毎週親しい友人と語り合う楽しみを見出すことで、最初は苦痛に思うこともあるが、やがて抵抗なく出席することができ楽しくなってくるものであり、時間を守るよい習慣がついてく

る。

(B) 人間的魅力は、自分を鍛え、人を引き付け、動かす力である

- ① 常識に明るく、辛抱強い人間になること。
- ② 人生の勝負の鍵は持続力、良い習慣を養うこと。
- ③ 勤勉、注意力、正確さ、時間厳守、迅速さ、正直、公正、誠実、品性。
- ④ よき出会い、よき師、よき友は人生の宝。
- ⑤ 人格こそ生涯通用する宝である。
- ⑥ 現実を理想に重ねあわせる努力、行動も思考も反復こそが力となる。
- ⑦ 礼儀は生活を潤す、本当の勇氣は優しさと共にある。
- ⑧ 人間の価値を決める「弱者への思いやり」。
- ⑨ 人を動かす話し方を身につける、人の話から学びメモをとる習慣を。

⑩ Service の S はスマイル (Smile) の S。微笑みが人間関係を温かくする。

以上の 10 項目は、私たちが人生を送る上で大切な徳性であることを認識しているが、日々の忙しい仕事に追われてなかなか身につかないものである。

自分自身、毎日努力しながら得られるものもあるが、その他の多くは沢山の選ばれた人の中にいて永年の間に自分が学び行動する中で得られるものである。昔の学友との出会いは年とともに疎遠に、尊敬する先生もこの世にいない。だが、私たちにはロータリークラブがある。毎週、決まった場所で、決まった時間に、多くの友人が待っていてくれる。

互いに心を開いて、微笑み、親しみロータリークラブに馴染もうではないか。

「人は人の中で人となる」、茲にロータリークラブの素晴らしさがあるのだ。

〔C〕長寿の心得「笑いが病を追放する」―ある医師の話から

東京のある医科大学で行われた有名な実験がある。

大勢を収容している老人保健施設で、大広間に何十人ものお年寄りに集まっていた。有名な落語家の話を聞かせた、老人たちは久しぶりに、大いに笑ったようだ。そして落語を聞かせる前と、その後にお年寄りの血液を採取し、血液中のNK細胞（ナチュラルキラー細胞）を測定した結果、落語を聞いたあとのNK細胞が増加したというのである。

我々人間の周りには、細胞やウイルスが沢山いて、虎視眈々と肉体への攻撃のチャンスを覗っている。しかし人間はそれらの外敵を跳ね返す力を備えていて、これが免疫力である。

NK細胞は癌細胞も呑み込み害のない状態にしてくれると、数年前、ある学術集会で見せられた映像を忘れることが出来ない。それは、NK細胞が寄ってたかってがん細胞を食い荒らし、NK細胞のなかに呑み込んでしまう様子を電子顕微鏡で撮影した高速度写真であった。

癌にならない人は自分の免疫によって癌細胞を消滅させているが、残念ながら癌を発症した人は、癌細胞が少なく、免疫力が不足していることが原因の一つとなったようである。ここで、癌を発症させない手段の一つに自分の癌細胞を増やせばよいという考え方が成り立つであろう。免疫研究を重ねるにつれて分ってきたことは、日常、笑いの少ない人にはNK細胞が少ないことが判明した。老人ばかり収容している施設を訪問すれば、普段明るい笑い声は少なく、ただ無気力に日々を送っている老人が多いようだ。

このような高齢者でも、お腹の底から大きい声で笑うことができればNK細胞が増えるのではないかと予測して実験を行った結果、予想の通りとなった。

まさに「笑う門には福きたる」の諺通りである。

笑顔と笑い声に包まれる処では人間関係もスムーズで、仕事もうまく運び、幸せが満ち満ちている、というのがこの諺の真意であろうが、誰もが、健康こそ最大の幸せであることは言うまでもないが、「毎日笑顔で

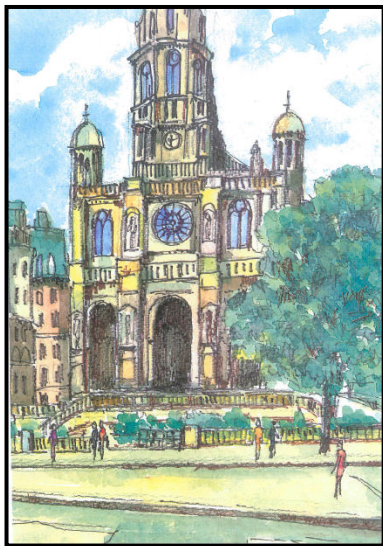
暮らせば、病魔も寄ってこないし、いつも憂鬱な日々を送っていると、罹らなくてもよい病気に罹ってしまう。病気にならないためには、明るく楽しく暮らすこと」である。

ロータリークラブは、毎週、多くの友人と親しく、楽しみ、笑いのあ
る集いであり、日ごろの厳しい事業経営から一時開放されて、心から安
らぐ場でもある。

例会前の30分、例会後の30分は、多では味あうことのできない、
笑いと、ジョークが飛び交う心安らかなオアシスである。このような雰
囲気で身に付けた「積極的で明るく、笑いのある快活な性格」は、日々
健康で事業経営を活性化する土台になると思う。ロータリーで得た性格
は、家庭円満、事業繁栄、健康増進に役立つ。このような良い循環をも
のにするには、心を開いて人の意見を謙虚に受け入れることを心がける
ことであろう。

23

ロータリーと 教育を考える



私のクラブに、クラブ創立時のキーメンとして活躍され、チャーターメンバーとして現在もクラブを指導していただいている平野大太郎さんがおられる。京都大学の法科を卒業され、司法試験に合格、司法修習生の頃に病を得て実業の道を歩まれた方で、今も御健在でいろんな面でアドバイスを頂いている。平野さんは90歳を迎えられた今も、毎月数冊の本を読まれ、読後の感想や自分の明快な意見を文章で綴りパソコン日記を続けておられる。私は毎月頂くことを楽しみにしている。

先日、平野先輩から頂いたパソコン日記8月号の教育雑感を読みながら、私も同じ思いが頭をよぎった。その1つは、第2次世界大戦で敗れた後、ドイツは領土が東西に分割されも守りとおした教育制度があり、それに対し、日本は国土が分割される代わりに教育制度の根本的改革が行われたことである。

改革以前、中学校は義務教育ではなかった。勉強しなければ上へ進むことも卒業することも出来なかった。この時期、多感な青少年時代に誰もが経験した生涯忘れえぬ多くの、学びの苦しみと、達成感と友情の尊

さを知ることができた。

私は、大學の大先輩、パストガバナーでダイハツの社長などを務められ実業界に貢献され、95歳の生涯を全うされた心優しく頭脳明晰な伊瀬芳吉さんの中学時代の話しを思い出したのである。

伊瀬さんは香川県の旧三豊中学校に学ばれた。4年生のとき漢文の細川先生の教えを受ける。伊瀬さんは理数系が得意であったが、細川先生の情熱あふれる漢文の講義は伊瀬さんの心を虜にし、朗々と吟ずる多くの漢詩を覚えられたそうである。

そして遂に蘇軾の「前赤壁賦」の長文を暗礁することになった。

伊瀬さんは細川先生から多くのことを学ばれた、それは長文を覚えることが、自分自身にやればできるといふ自信をつけることになり、それが更に新しいものへの挑戦する力となって、無気力になりがちな自分を変えるエネルギーになってくることを教えられたそうである、伊瀬さんは「自分の原点は細川先生にある」と私に話されたことがあった。

すべての面で積極的になった伊瀬さんは自動車は勿論、航空機操縦の

免許をとり、何時の間にか英会話をマスターされたそうで、ダイハツに外国の訪問者があれば通訳に社長が呼びだされたという話が残っている
そうである。

私は、大學の後輩という以上に可愛がっていたのだが、伊瀬さんが
87歳の頃に聞かせていただいた「赤壁」は、淡々と淀みなく諳んじる
姿に人間の限界を超えるものであったように感じた。

私も中学時代、漢文の時間に松隈先生に「前赤壁賦」を習った。そし
て次の名文を覚えようと言われて今も記憶に残る一節がある。「月明
らかに星稀に、鳥じゃく南に飛ぶとは、此れ曹孟徳の詩に非ずや。西のか
た夏口を望み、東のかた武昌を望めば、山川相まとうて鬱乎として蒼蒼
たり。」とこれだけだが65年経った現在でも覚えている。伊瀬さんは私
の記憶の文章の約20〜30倍の長文を95歳で亡くなられる時まで8
0年間憶えておられたのである。

人間の記憶力は、年とともに衰えるのは生理的現象と誰もが納得する
ところだが、若い頃に先生が情熱をもって生徒と一つになって、教えら

れたものは生涯忘れることのない記憶に刻まれるものであることを伊瀬さんに教えていただいた。

当時の中学は現在の高校にあたるであろうが、現在の教育とあわせて考えさせられる関心事ではないか。

京都大学教授をしておられた会田雄次さんは将来への不安として、中学教育の現状を上げておられる「中学卒業の能力がぜんぜんなくても卒業証書を全員に与えている。こんなことはおかしいではないか、これらの生徒の多くが高校へ進む、基礎が出来ていない人が、ただ卒業証書を貰うために学校へ行くようでは日本の将来はどうなるのか」高校を出れば多くが大学へ行く、日本の大学は900とも1000とも言われ国民総大卒になる勢いで、国力が揚がるともいわれるが、いかがなものなのか。ヨーロッパでは人口5000万人の国に10校程度の大学が存在すると聞く。戦前の日本ではヨーロッパのようなエリートがいなかった、そこで、都会、田舎を問わず秀才を集めてエリートを育てるために、旧制高等学校、士官学校、海軍兵学校で教育して優れた人材を育て、

社会のリーダーとしての教育を目指したのである。この時代に良き交友を通じてお互いの資質を高め、書を読み幅広い勉学に励み、人生について考え、一緒に生活することで心の同士が生まれる。

このようにして国を守り、文化を高め世界の国に伍して進む人材を育ててきたのである。日本は着々と築いてきた優れた人材育成の道を手放したのである。

現在の制度の中で、「人間性を高め、学生に意欲をもって進むような教育」をしてほしいものである。伊瀬さんが心酔した細川先生のような情熱、使命感のある先生が多く輩出することが大切で、そのような先生を教育する組織と人材が重要となろう。

教育の問題は一朝一夕には叶えられないであろうが、全力をあげて達成しなければならぬ。これぞ国家百年の大計である。

30年も前に読んだ司馬遼太郎と12人の対談集「日本を考える」の中に、京都大学の今西錦司教授との対談がある。

司馬　ところで先生は数年前までお弟子さんを殴っておられたそうですね

今西　そんなことはせえへんで

司馬　あつははは。それはともかく、先生には不思議にいいお弟子さんが育っていますね。何かコツがあるんですか。

今西　育てたつもりはないんやけどな。

司馬　日本でいいグループ教育をした人は、例えば吉田松陰とか緒方洪庵とか正岡子規がありますが、あとは今西先生ですな。

今西　エへへへ、僕は意識して教育しようと思ったことはありません。門下生がいつも家へやってきて、酒飲んで、歌うたって

ここで話されたように門下生が今西教授の家にやってきて、飲んで歌って先輩や友人に接することで自然にお互いが磨かれ、将来の指導者が育っていったのではないか。ロータリーは卒業のない総合大学といわ

れるが、むしろ先輩に学び、友人と磨き合う塾のように思えてならない。ロータリークラブの会員であることに疑問をもつ人にはそんな風の説明もあるのではないか。

私が尊敬する東京東ロータリークラブの佐藤千寿。パストガバナーは「選ばれたる人」の中で、佐藤さんが学ばれた仙台の第二高等学校で徹底的にエリート根性を叩き込まれたのは「お前たちは社会の木鐸として献身奉仕せよ」という人間形成であった、と話しておられる。社会になつてから、それに代わるのが正にロータリーであった。

ロータリーは本来エリートの組織である。Eliteとは「選り抜きの人々」「社会の中核」という意味であるが、ロータリーは、職業分類の原則に基づいて推薦され、選考委員会において「人格、職業上及び社会的地位ならびに一般的な適性を調査された上で、更に全会員に通知し、意義申し立てのない場合に入会が許可される……これだけの手続きを経たものがエリートでないはずはないのだ。

その代わりにエリートには、其れに伴う *Noblesse oblige*——高貴の義

務—がついていることを認識しなければならない。

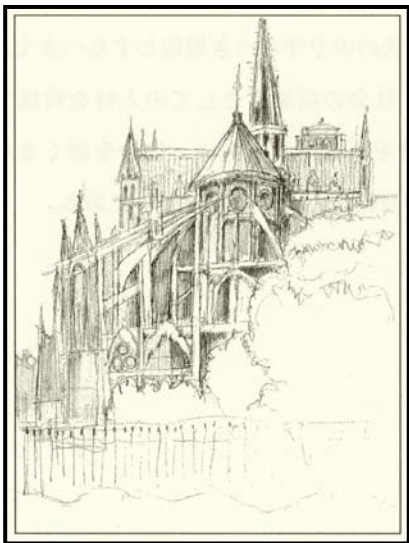
台湾の元総統を務められた李登輝さんが書いた「武士道解題」に「ノーブレス・オブリージュとは」と副題をつけて書いておられるように、武士という階級はエリートであり、それゆえに常人を超えた厳しい倫理・滅私奉公を義務とされた。

同様にロータリアンは選り抜かれたエリートだからこそ『Service above self』が生活の中で守るべき規範とするべきであろう。

ロータリーは、社会の指導者としての人材を育成する場であり、会員それぞれが友情を育み、学びあい、自分を磨くまたとない集いであることをお互いが認識し大切にしたいものである。

24

良い習慣をつける 「自分を鍛える」 ジョン・トッド



(1) 日々を充実させるよい習慣をつける

ある種の習慣は、時間の使い方や仕事の仕方、考え方や感情に、ある種のパターンが生ずるようになり、やがて第二の天性となる。

できるだけ若いうちに、良い習慣をつけたいものだ。

仕事上では、毎日同じ仕事を、毎日同じ時間に繰り返すようにすれば、それは楽にこなせるようになる。

私達は勤勉という代償を払うことで大きい成果が得られ、良い仕事を成し遂げられるものである。習慣の大切さは人生をも変えるといわれる。

(2) 時間厳守の習慣を養う

時間をきっちり守ることは難しいものである。何をするにも、少しばかり遅れるほうがはるかに簡単だからである。

時間をきちんと守る性格を身につけるのは容易なことではない。しかし、時間をきちんと守る性格は、あなたにとっても、また、世の中に

とつても、すこぶる重要である。時間を守る人は、そうでない人の2倍のことを、しかも2倍も楽に行うことが出来、自分に、また他人にも、2倍の満足を与えることが出来る。誰しも生まれつき、習慣的に大変不精になっているので、きちんと時間を守る人に出会うと、なんと幸せだな！と感激する。そういう人物を頼りにしたくなる。どんな代償を払ってもスタツプとして迎えたくなるものである。

即ち、時間を守る人は、他人から「信頼される」人なのである。

ロータリーは、時間を守ることから始めて、時間どおりに終わる。毎週、決まった曜日の、決まった時間に例会が開かれる。会員の70％75%の人びとと笑いのある楽しい出会い、信頼と親しみのある時間を共有する。

ロータリークラブに永く席をおき、毎週の出会いの中で自分以外の困っている人々の為に役立つ奉仕についての知識や、奉仕の実践についての教えを受け、自分の恵まれている今を知ることが出来る。

(3) 「人は、人と共に生きてこそ一人前になれる」

人間は良い習慣、他人に対する礼儀などが自分の幸福につながり、左右される部分が大きいの。人はこの世の中でたった一人ではなく、大勢の中の一員として生きている。その一人一人が自分なりの価値観を持っていて、それぞれが主張を持っていることを認識しなければならぬ。例えば挨拶の仕方、

世間的礼儀など個人的な価値観に差があるものである。こんな面倒な付き合いよりも、自分自身が孤独に暮らし、世間から身を引いたり、自分本位だけで生きるよりも、「人間は世間と交わることで、必ず道理の分かった賢くて、思いやりのある人間になれるし、楽しみも教訓も沢山得られる。愚かな話にも我慢して聞き、誤りを許し、欠点に目をつぶらなくては、社会生活の喜びや利点を味わうことは出来ない」のである。「人は人と共に生きてこそ一人前になれる」のである。

ロータリークラブは「人は人と共に生きて一人前になれる」場である。

しかし、ただ何もしなくてというのではなく、親しい仲にも「人を引きつける態度や、親切で謙虚 相手に対する思いやりの気持ち」を心がけることで良い人間関係を築くと共に、自分の品性が築かれるのである。

これらのことは、単に自分を磨くだけに留まらず、事業経営に役立つのである。

『お得意の経営者との信頼関係は、時間を守り、礼儀正しく、温かみをもつて、自然に人を引き付ける品性、常に相手の身になって考える』
というようなロータリーで身についた「人柄」が家庭に、社会に、事業に良い効果を齎し、幸せになるのではないか。

(4) スピーチ上達になるにはロータリアンになること

八尾ロータリークラブが創立された1961年、ガバナー特別代表の浅田敏章さん（大坂スタジアム社長）は、大変話の上手な方であった、いつも聞きほれていたものです。

浅田さんは、ロータリークラブでは回りもちで話をする機会が多く、積

極的に話すことで話上手になります、と言われた。

スピーチの神様といわれた D、カーネギーの「自身がつくー話し方教室」の中に『3、チャンスをつかまえては人前で話す。』のなかに人前で話す機会を自ら求めてください、まずスピーチが行われるようなクラブに入ることです。それも、積極的に参加し何かの役員を務めることです。そうすれば地域社会の話上手な人に会って話す機会もありますし、紹介のスピーチも頼まれます。

20〜30分くらいのスピーチが出来るようになることです。

浅田さんもロカーネギーさんも、ロータリークラブへ入って積極的に話すことで話がうまくなる。こんな良いことあるのかな？ と思うでしょう。

A、ニューヨーク・ロータリークラブでの話

ある例会でのこと、その日の卓話者は、ある有名な政府の役人で、会員たちは彼の官庁の話を聞こうと待ち構えていた。

ところが、彼が用意していないことがすぐ分かった。彼は即席でスピーチしようと思ったが失敗すると、ポケットからメモを取り出したが雑然としていて、まごついて、震える手でコップでからからになった口を水で湿した。

それは、準備不足から徹底的に上がってしまった惨めな姿であった。ダニエル・ウエブスター氏は、「聴衆を前に原稿を半分しか持たずに出て行くより、半分裸で出て行く方がましだ」と言っている。

努力に優る才能はない。

備えあれば憂いなし

自身を持ってスピーチできるのは、用意の行き届いた人だけである。時間に応じ、要点を箇条書きにする。

原稿をきっちり書き、与えられた時間内で収まるかどうかを検討し、調整する。

スピーチの中に実例や例え話を盛り込む

説得力は、誠実さと信念から生まれる

肯定的な気分にする

相手に伝わるような熱意を込めて話す

これ等を成し遂げるのは、自分が努力して作った原稿を、人が聞きやすいスピードで声を出して話してみる。変更し、付け加え、人の前で話せる原稿を完成させる。

10分、20分、30分与えられた時間できっちり収まる話をするには、声を出して5〜10回練習する。朝30分早く起きて、机に向かって話す、5回目ぐらいから原稿を見ないでやってみる。出来るといふ達成感が生まれる。

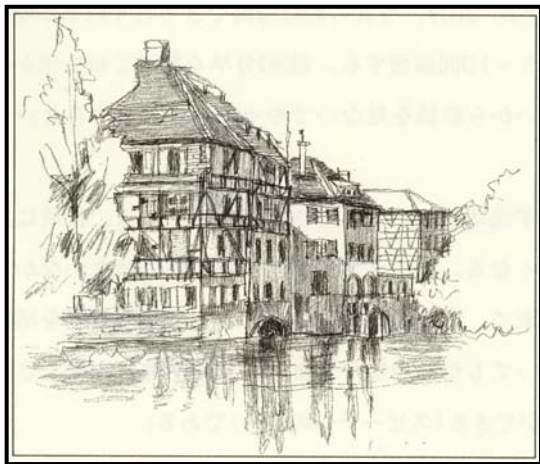
卓話は必ず成功する。人と話しする自信が付き、社員に講話するのも上手くなる。

ロータリークラブでは、こんな他ではし難い練習が出来て、自分に大きい自信が付き、少しの時間を活用することで、年配になっても遣り甲

妻が生まれ、脳の活性化が果たされ、ボケないで長生きができる。「スピ
ーチの奨め」である。

25

若々しく老いる



「不老長寿」という人類の夢が

新しい意味をもってきている（抄録）

クリストファ・ハロウエル

1、先入観を捨てよう

年をとると頭の働きがにぶくなり、社会から疎外され、病気や経済力、体力の衰えなどをすべて回避できるわけではないが、苦痛や暮らしへの影響を軽くすることは可能である。われわれが考えていたよりもはるかに大幅に老いを管理できるようになっている。

魅力的な年のとり方——いや優雅な老いというものすらあるのを認識し始めている。身が軽く、頭が切れ、眼がキラキラと輝いている老人、人間への共感と英知と独立心と魅力と愛情を感じる老人たちだ。

今日優雅に老いている人たちは、若いときにそのために努力をした人たちであり、また、人生は経験と実験の連続と考えている人たちなので

ある。よりよく老いたいという願望にもっとも弾みをつけているのは、模範になる人達が多くいるという事実である。ロナルド・レーガン大統領が2期目に入った時は72歳であった、レーガンはいまなお元気で活躍しているし、ロータリークラブには、そのような模範になる人が沢山いるから素晴らしいのだ、といえるだろう。

2、くよくよしないのが長寿の秘訣

アルキメデスが鏡を発明したのは75歳のときであった。ゲーテは83歳にして「ファウスト」の第2部を完成している。しかも当時の平均寿命が40歳に満たない時代に生きた人たちなのである。この現象は人間の寿命が長くなったからではなく、老年学者たちがずっと以前から人間の寿命は110歳から115歳だと考えていたが、日本の泉重千代翁ですら120歳まで生きたのだ。

ギネスブックによれば彼は、長寿の秘訣は「心配せずに」すべてを「神と太陽と仏」にお任せすることだと言っていたという。平均余命が延び

たのは、医療技術、予防薬、衛生施設が進歩したことと、食事がよくなったおかげであり、規則正しく運動をするからであるともいわれている。

3、何事にも関心をもとう

うまく年をとるのに大きく影響するのは生理学的要因だけでなく、人間の心理も大きく関与している。心理学者は、ストレスと病気の間に関係があるという証拠を発表している。細胞の働き、ホルモンの流れ、脳の機能は極めて微妙で人間がコントロールすることはできない。しかし、自分が考えることや考え方に自律的な影響を与えることができるのだから、われわれは自分を幸福にしたり不幸にしたりする力が備わっているのである。引退、病気、連れ合いや友人の死、体力の低下、頭脳の衰え、孤独がもたらす悪影響に対抗できるのは、我々の考え方だけなのである。老齢期に入っても幸せで、比較的健康な人たちを対称に多くの研究が行われてきたが、結論は常に同じである——老いに対する準備をしておけ！だ。

考えて見ると人間は、老い以外のすべての人生で起こることへの準備をしている。

子供は大人から独立するためのしつけを受ける。学校は成人以後の人生で必要な技能を教える。スポーツは協力者と競争の精神を養成する。しかし、老いについてだけは自分で準備するしかない。

「準備」という言葉は、自覚を強調しすぎているかもしれない。老いるのに成功するキーワードは、「関心」であろう。

うまく老いる人は様々なことに関心をもつ。人との付き合い、好奇心を働かせ、柔軟な考え方をする。生まれながらにこういう資質を持っている人もいるが、努力すれば身につくものである。

中高年者は自分の職業以外のことに関心を持つべきだし、孤立しないよう努力すべきだ。

男はえてして孤立しやすく、女性よりも平均寿命が短い原因はここにあるのかもしれない。好奇心をもち、想像を楽しみ・体操をして運動能力を高めるべきだ。

年をとるのは避けられないことだが、我々が想像していたよりはるかに、その結果を管理できる持続的なプロセスがあることが判明しつつある。

私はロータリーの友のこの記事を読みながら、大いに勇気づけられた。年を重ねることを憂うのではなく、模範になるロータリアンに学び、心配せずに、考え方をしっかりして、来るべき将来にむけて準備し、関心をもつことの大切さを知ることができた。

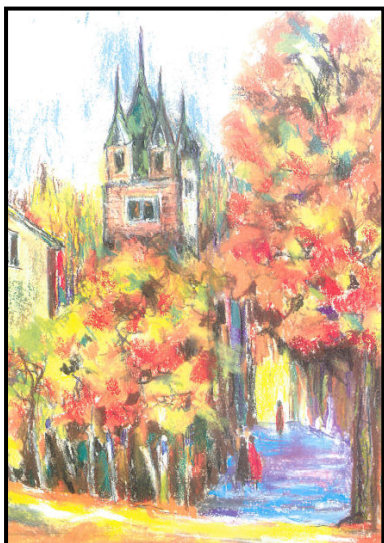
ロータリーの友には、心が洗われる素晴らしい記事や、ロータリアンの経験などから人生の指針となるものも多い。世界の選ばれた人達の提言のなかには他で知ることができないような貴重な記事があつて学ぶところが多い。

「読まれざるミリオンセラー」などと悪口を叩かれたロータリーの友には、実は読めば新しい発見が多くあり、私はこれと思う記事をコピーして保存することになっているが、たいへん参考になる記事が多い。この「若々しく老いる」も17年前にファイルした優れた教えであつたので、

引用させていただいた。

26

米山奨学会、2つの話



1、ある米山奨学生の謝辞

1991年3月、終了米山奨学生の歓送会が南海ホテルで行われた。

3地区22名の米山奨学生を中心に、指導にあたっていただいた大学教授、ガバナー、パストガバナー、地区委員長、委員、クラブのカウンセラー、ロータリアンなど約110名が集まり、ささやかながら、楽しく盛大な会合となった。

異国、日本で苦難を乗り越え、成果を挙げた学生諸君の晴れやかな顔や、世話を終えたロータリアンの成し遂げた充実感、別れの淋しさがただよう会であった。

ある指導教官が、終了米山奨学生に激励の言葉を贈り、言葉をついで「皆さんは、米山奨学会が多くの留学生の勉学と生活にどれほど大きく貢献しているか、また各ロータリークラブの会員が日本で勉強する留学生にどれだけ温かい支援をして下さったかを、決して忘れてはなりません。皆さんが今後どのような活躍をされても、若い日 多くの善意を頂

いて日本で学んだことを胸に刻み、健闘していただくことを祈っています」と留学生諸君に激励の言葉を贈られた。参加したロータリー関係者は、米山奨学会が永年にわたって果たした留学生への価値ある奉仕事業に誇を感じた。

続いて 修了者一人一人のスピーチがあり、それぞれが「米山奨学会への感謝、将来への明るい希望、ロータリアンに教えられた無償の行為の尊さ」などを見事な日本語で話した。

最後のスピーチに立ったシンガポールのテエイ・ケイハン君は、カウンセラーとしてお世話になった大阪柏原ロータリークラブの林 芳繁さんに、心からお礼を述べ、次のように話した「私はシンガポールから日本へ私費留学生として来日して永い年月がたちました。同志社大学へ入学できたのは幸いでしたが、経済的に苦しくアルバイトばかりの明け暮れでした。私は母国でクラリネット奏者として音楽活動をしていました。私には、勉強しながら音楽への強い執念を持っていました。私は、ある音楽会で、林 先生に出会ってクラリネットについて話しあい、多くの

ことを教えていただきました。その後も大変お世話になりました。

あるとき、林 先生が訪ねてこられて、アルバイトばかりで真面目に勉強をしていない私に忠告していただきました。『どんなに苦しくて

も自分の目指す勉強はしなくてはいけない』と励まされ、先生が若いころ東京芸大を出て、パリに音楽の勉強に行かれたときの、苦しいなかで学んだ体験を話してくれました。『食べるものも食わず、底の破れた靴を履いたまま、凍りつくパリの寒空で、手袋の先を切ってクラリネットを吹き続けたこと』など私の胸に響く体験の数々の話でした。

そして私に、学費を援助してくれる米山奨学会の試験にトライすることを勧められたのです。とても、私など合格する見込みはなかったのですが、先生は、熱意をもって当たれば神も味方してくれるものだ、と励ましを頂き、受験したのです。私にはとても無理だと思っていた試験に合格することができて、どんなに嬉しかったか！

林先生も自分のことのように喜んでくださいました。

それから2年間アルバイトをすることなく勉強とクラリネット演奏を

学び、卒業することができたのです。

思えば、私が米山奨学会の試験に合格して天にも昇る気持のとき、林先生の車である神社にお参りに連れて行ってくださいました。

神社の境内には、満開の桜が雪のように散っていました、私はこの時の光景を生涯忘れることはできません。

私は明日、青春の思い出深い日本をあとにしてシンガポールに帰ります。

私が本当にお世話になった林先生はじめ多くのロータリアンに心からお礼申し上げます。しかし私には、将来にわたって何のご恩返しもできないと思いますが、私が日本で学んだ「人のために尽くす」という行いを次の時代の私のような苦学生に分けてあげたいと心に誓っています、それがせめてもの恩返しになると思うのです。あの神社の境内の桜はまだ蕾でしょうが、2年前の満開の桜吹雪がもうすぐに見られるでしょう、お世話になった皆様有難うございました。」

私はテイ・ケイハン君の話聞きながら、こんなに流暢で正確な日

本語でお礼の言葉を話す外国人に出会ったことがなかった。

聞けば「大学へ通うのにもある社員食堂で働き、片道15キロを超える道を電車に乗らず自転車に通っていたというのである。時には自転車がパンクして、背中に担いで帰ったこともあるということだ」こんな苦勞をしながらも学び、懸命に生きようとする若者の姿は今の日本ではお目にかかれないであろう。

私は、たいへんな苦勞をしながらも、懸命に学ぼうとする留学生にとって、米山奨学制度はかけがいの無い素晴らしいものであることをケイハン君から学ぶことができた。

歓送会の4〜5日後 林さんに出会った、私はケイハン君のあの言葉は「日本の学生からは聞けない心の籠もったものでしたね。沢山のロータリアンが話を聞きながら涙ぐんでいましたね」と、お世話をいただいた礼を言うと、林さんは「彼は伊藤忠商事の現地社員に採用されたそうです。明るい希望を抱きクラリネットを吹いている彼に祝福を送りたいものです」と、嬉しそうに話してくれた、私にとって実に爽やかな感動

の体験であった。

2、金 美麗さんに聞く米山奨学会

2001～2年、第2660地区大会のプログラムに「21世紀 日本
のアイデンティティー」という題のシンポジウムがあり、女性4人の
シンポジストによる有意義な討論が行われ、その中の一人にテレビなど
で有名な金美麗さんがおられた。

金さんは討論の最後に「私は、皆さんにお礼を申し上げたいことがあ
ります。

私のつれあいは東京大学のドクターコースに在学中に、ずっと米山奨
学会から奨学金を頂いていました。彼は台湾大學を出て、国費留学生と
して日本に留学し修士課程を終えましたが、理科系の忙しい研究、実験
の毎日でアルバイトもできないという大変ハードな日々を送っていまし
た。幸いにも米山奨学生に選ばれてドクターコースは何の心配もなく勉
強することができ、学位を頂くことができました、そして東京理科大学

に奉職することができたのです。日本にはロータリー精神に基づき黙々と奉仕に献身している人が沢山いますし、米山奨学会は素晴らしい奨学事業なんです。日本一の奨学会、言うならば世界一の奨学会なのです。

ただ日本ではあまり知られていない、残念なことですがロータリークラブの会員が米山奨学会に善意の寄付をすることで、留学生がどれほどの恩恵にあずかっているか知らない人がいっぱいいます。これが日本人の奥ゆかしいところでもあるのでしょうか、ロータリークラブは自己宣伝することは、美意識に反すると思っていらっしゃるのでしょうか。でも、これからは発信する世紀なのです。

「男は黙ってサツポロビール」じゃあないんです。「沈黙は金なり」でもないんです。グローバルな世界では発信することがとっても大切なんですね、大いに伝えようではありませんか」と話された。

私は何時ものようにボールペンを走らせながら、米山奨学会についての金美麗さん話に感動したことを今も思い出す。時間内で簡潔に米山奨学会の素晴らしさと、今後この価値ある奨学事業を発展させていくには

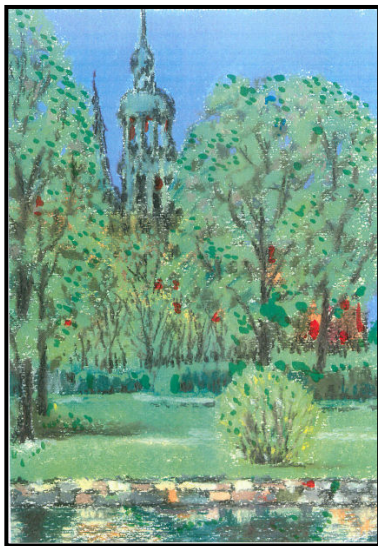
どのようなすべきかを語られたように思う。

重要な問題の一つに、米山奨学会といえど、「ああ寄付か」という認識しか持っていないロータリアンが多いのではないか、それにはテイ・ケイハン君が米山奨学会の歓送会で話した「生まれて今まで多くの人々から受けたご恩を返すには『私のような苦学生に分けてあげたいと心に誓った』という共生の気持ちを持つことではないか」と思う。誰も大きいことは言えないが「高級クラブで飲むのを、リーズナブルなバーで飲む」というような僅かな心がけで、アジアの将来を担うリーダーを育成することができるのである。奨学会を会員に周知させるにはこのような事例を話しながら有意義な事業を支えている価値を認識させることが大切であり、これを知らせることがクラブの役割なのであろう。

私は、1987年頃から、米山奨学会の広報委員長、学友委員長、財務、監事、未来委員などを務め、個人として多くの学生の面倒を見られた米山梅吉翁の故事に思いを馳せ、翁の壮大な意志を伝える米山奨学会の発展に大きい期待をもっている。

27

ポリオプラスに 命をかけたロータリアン 山田ツネさんに学ぶ



20年の年月をかけ、ロータリーにとって、初めての地球的規模の財団プログラムが全世界のロータリアンの協力を得て終結しようとしているとき、命をかけてこの計画の推進に献身された奉仕の軌跡を振り返って見るのが大切であろう。

国際ロータリーは、1978年の東京国際大会において3Hプログラム（保健、飢餓追放、人間性回復）を発表し、1983年～88年にポリオ・プラスプログラムに発展、創立100年にあたる2005年までに、世界の多くの子供を、死か、障害を持って生きねばならない、ポリオを地球上から撲滅する計画を決定した。

ポリオの撲滅は、全世界の幼い子供を持つ親たちの強い念願であったのです。

1915年ニューヨーク市でポリオが大流行し、7000人の幼い命を奪い、27,000人を麻痺させ、鉄の肺に入らねばならない子供の将来を打ち砕いた。

日本でも、1960年北海道、夕張から始まり、瞬く間に北海道全土

に広がり、幼い子供を持つ親たちの心配、苦しみは筆舌に尽くせないものであった。

ポリオ撲滅という壮大な計画を発足させるきっかけを作ったのは日本人である。

ロータリー財団管理委員長カルロス・カンセコ氏は、正式の文章の中で次のように述べている「私はボランティアたちによる一つの奉仕プロジェクトから、また新しい奉仕プロジェクトが生まれたことを実際に見ています。東京麹町ロータリークラブの山田ツネさんは、1981年からハシカの免疫プロジェクトを監督するために、ボランティアとしてインドに行きました。その経験を生かしこのボランティアズはポリオ免疫プロジェクトを発足させてきたのです。」と。

私と山田さんの出会いは1986年、に続き87年の国際協議会にグループリーダーとして参加した時である。この年度の協議会は特別のものであった。「長期間の準備を終えて、この年度からポリオ計画の募金活動が始まったのである。朝9時から5時までの部門別のセッションを終

え、夕食後 7時から11時まで日本語グループでのポリオ計画の説明が2回にわたって行われた。説明者はインターナショナル・コーでネーターの山田ツネ氏で、彼の経験に基づき 詳しい説明と具体的な募金方法、質疑応答などが行はれ 参加者全員が始めて耳にする壮大な計画に、果たして成功するかどうか誰もが不安を覚えたものだ。

山田さんがポリオ免疫プロジェクトを始めることになった動機を次のように話している。「私が仕事でインドへ行ったときのことです。夜遅くまで続いた会合の帰り、ギョツとして立ち止まった。ガサガサと音がしたのです。犬か猫が餌をあさっているのかと、音の方向を凝視した時、月の明かりで私が見たものは、芝生の上をやせ細った少年が手と肘を使って這っている姿でした。それは、今思い出しても胸が締め付けられるような痛々しい光景でした。多分幼い頃にポリオにかかり、足が麻痺してしまったのでしょうか。この少年の姿を見たとき、私は、南インドの子供たちを日本人の手でポリオから救いたいとの思いが生まれたのです。」

山田さんは、1981年からボランティアとしてインドのハシカ免疫

プロジェクトに4週間の奉仕活動に従事し、その経験を生かして翌年、南インドのポリオ免疫プロジェクトを推進、近隣13クラブの共同奉仕として活動の中を広げ、更に東京地区の100以上のクラブの協賛を得て、奉仕の中がさらに大きくなり、効果も上がってきた。

国際ロータリーはこの活動の成果を検証し、ロータリー創立100周年の事業に意義ある事業として引き継がれることになったのである。

毎年50万人の子供がポリオにかかり、大変な問題になっていたが今や20億の子供にワクチンを投与して最終段階に入っている。

天然痘の撲滅は200年かけて成し遂げたが、それより更に難しいといわれるポリオを、WHO、ユニセフ、主要各国と協力して、ポリオプラス・プロジェクトを20年で達成しようとの計画が、全世界のロータリアンの力強い協力によって成し遂げられることを考えれば、ロータリーの偉大な力に驚嘆するばかりである。

山田さんは講演の最後に「世界は急速に変わっています。人間が月へ旅行できること、他人の臓器で生命を救うこと、生活水準の向上など、

しかし世界の子供たちはみんな健康で幸福に育っているでしょうか？日本や先進国は恵まれています。然し、発展途上国では想像もつかないほど悲惨な状態が続いています。

どうか、皆さんの手で発展途上国の子供を救ってあげてください！お願いいたします。」と眼に一つパイ涙をためて、深々と頭を下げて話は終わるのである。

参加者の拍手はいつまでも鳴り止まなかった。

山田さんと私の出会いは、国際協議会の2週間、稚内の地区大会、利尻礼文島のエクスカーションで肩を組んで知床旅情を唄い、浜松の地区大会で水割りを飲みながら 時間を忘れて話し合ったなど、短時日であったが密度の濃い交友は、私の人生に宝石のような輝きを心の奥底に刻み込んでいる。

私より2歳上の山田さんは東京大学を卒業、富士ゼロクス東南アジア地域支配人をつとめ、1987〜88年度の東京麹町ロータリークラブの会長をつとめられた。

浜松の地区大会で別れる時、彼は「今から松江の地区大会に行きます、来年4月の大阪城ホールでの貴方の地区の大会でお会いすることを楽しみにしています。お元気で」と固い握手をして別れたのが最後になりました。「検査入院しているようですよ」と風の便りに聞いてまもなく計報が入った。

7月12日 山田 ツネ氏死去 享年64歳

その直前のフィラデルフィアの国際大会で、ポリオプラス計画についてのアナウンスがあり、全世界のロータリアンの善意の寄付金がワクチン購入予算の2倍に達したことが感動的に報告され、大成功が報じられたのである。

ツネさんは、この報告を病床で聞いたであろうか、知るよしもない。私は、ちよつと前かがみ、背に高い、美しいグレーの髪、優しい眼で、はにかみながら 熱をこめて話す山田ツネさんの姿を忘れることはできない。

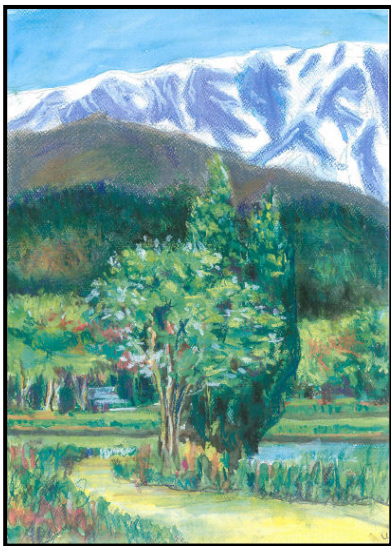
「自分のことを後回しにして、人の為に尽くす人々のことを、決して忘れてはならないと思うのである。」

今日本では、「会員増強の難しさに直面している、しかし、周知を集め楽しいクラブ、お互いが磨きあい 信頼しあい 助けあい 温かいクラブにするために、みんなが努力することで 新しい会員を迎えることができことを信じている。

山田ツネさんが、身命を賭してポリオプラス計画の端緒を開かれたことを考える時、そのような志の一端を受け継いでくれる新しい仲間を迎えることの大切さは誰もが認識できるであろう、お互いに力をあわせて会員増強に全力を投入しようではないか。

28

リンカーンに学ぶ、 希望を失わない生き方



人生には希望もあるが、失望も絶望もある。望み、勇気、自信喪失の経験は誰にもある、しかし人生には可能性がいっぱいある。可能性がある限り、希望はあるのだ。幸せに暮らしている人でも、自分に能力がある人でも自分自身を疑った時期があるようだが、彼らは希望を持ち続ける能力だけは投げ出すことはなかった。

誰でも知っているあのリンカーンも例外でなかった。

彼は事業に2度失敗した。州議会の議員に2度とも落選した。また、上院議員選挙に2度敗れた。アメリカ副大統領になろうとしたが、失敗した。愛する女性を若くして亡くし神経衰弱になったが、彼はこのような経験を通じて自分がどんな人間であるかを知り、不幸を乗り越える力をつけ、努力を続けて大統領になった。

こんな話は人を力づける。なにかがうまくいかないからといって、あなたの人生が終わりになるわけではない。むしろ、そのときには勇気を奮い起こして戦い、自分のなかに眠っている力を呼び覚ますことが必要ではないか。

本当にいきづまると、方向転換は出来ないと感じるだろうが、どんな問題にも解決の糸口はあるものだ。リンカーンは、「人間は幸せになろうと思うだけで幸せになれる」と言っているように、人生がつまらないものと思うなら、楽しいことが見つかるまで探すことだ。世の中には、私たちの心を奪う不思議なことが沢山ある。もし寂しいと思うなら、人が来てくれるのを待ってはいけない：自分から出向いていくのだ。「食べるエネルギーさえあれば、飢えることもない」ように、出向いていくエネルギーと気持ちがあれば、人との温かい付き合いができ寂しさも解消できるのだ。

リンカーンが失敗を繰り返し、ついにアメリカ合衆国の大統領になったことと同じような話は枚挙に暇ないのである。

子を持つ親に学校の成績に一喜一憂せず長い目で見てもらいたいものだ。3〜4年で見ると差があっても、10年単位で見るとほとんど差がなくなっているか、立場が逆転している場合も珍しくない。

発明王エジソンは小学生のころ、教師から「お前の頭は腐っている」

と罵倒されたが、後に電信機、電話機、電灯、蓄音機、無線電信、など人間生活に欠かすことのできない偉大な発明と普及に努めた功績は万人の知るところである。

アインシュタインは、1905年特殊及び一般相対性理論を発表し近代物理学の発展に偉大の貢献を成し遂げた理論物理学者でノーベル受賞者であるが、実は12才までは知恵遅れの子供と思われていたという。

企業を例にとれば、松下電産、ホンダ技研、ソニーも一昔前はちっぽけな町工場だった、いわゆる良い人材は集まらなかったはずなのに、どうして世界的企業に成長したのか、集まった人の中にある素晴らしい才能を発見し、発掘し、育て上げたためであることは誰もが知っている。

長い目で見て、人間の潜在能力をしっかりと把握し、愛情のあるきびしさで鍛え上げてゆくのがリーダーの役割である。人間は年月と共に変化し、成長するものである。

中にはダメになる者もいるが、大部分は必ず成長する。それが人間の本性だからである。人間が生まれながらに向上心を持っている以上、指

導さえよろしきを得れば必ず成長するはずだという信念こそリーダーの哲学でなければならぬ。

賞賛には能力を育てる力がある

人間はいくつになっても、他人に認めてもらいたい、褒められたいと思うものである。

成功者が自分の財産で社会的建物を建て、自分の名を冠して、人々から感謝されたい、讃えられたいと願うものである。東大の安田講堂やカーネギーホール、ロックフェラーセンターなど枚挙に暇が無い。

このような大人物でもそうだから、凡人はなおさらのこと、心から賞賛を求めているのである。

子供も、ダメだ、バカだとばかり、マイナス暗示をしていると、本当にバカになってしまう。それと反対に、よい所をみつけて、褒め、励まし、伸びるためにこそ鍛えるのだというプラス暗示を掛けると、ぐんぐん成長してゆくものである。

職場でも同じことで、できるだけプラス暗示を多くすると、いつの間

にか成長し、チームワークもよくなり、業績も大いにあがる。

褒め上手な会社は、盛り上がり発展する。逆にケチばかりつけると、ケチをつけた人も、つけられた人もケチな人間になってしまう。

優れたリーダーは褒めるのも間接的に褒める「彼は思った以上に伸びたな！感心なやつだ、やはり人間は努力だね」とさりげない会話の中で、その場にいないメンバーを褒めると、聞いた人から次々に広がって、本人の耳に届く。その間、増幅作用もあり、褒められた人間は、直接聞くより感激する。

「喜びは人に聞かれることにより倍加する」という法則のためである。勿論叱るべきところは叱るのは当然だが、賞賛のウェイトを高くするべきである。

リーダーの言葉には人を育てる力がある。自尊心に訴え、自信づけをする魔力がある。どんなに叱つても人格を傷つけてるような言葉は決して吐かないことである。

リーダーの自己啓発

先輩から知恵を学び、後輩からは感覚を汲むがよい

人間が学ぶべき最大の対象は人間である。先輩が貴重な体験を経て得た知恵を、辞を低くして教えを乞うことである。お知恵拝借こそ、最高の知恵である。

しかし、聞く側もよく勉強し、急所について教えを乞うことが大切である。

反対に若い人、後輩から学ぶべきものは、感覚、センス、などである。

若さとはバイタリテイであり、フィーリングでありセンスなのである、つまり新しさのことである。

先輩から知恵を学び、後輩からセンスとバイタリテイを学び自己を啓発し、成長を続けるリーダーとならねばならない。

百になるまでは十代

人間は百になるまで二桁の十代である。いつもティーン・エイジャーのような若々しい気持ちでいたいものだという諺である。

年齢と共に肉体は老いていくことは避けられない。しかし、精神年齢は、本人の心が次第でいくつになっても若々しく活動していられるところが人間の素晴らしい特徴なのである。

その精神的若さというのは、いくつになっても成長中であり、努力することで保たれるのである。

若さとはいつも夢と希望を持ち続け、努力すれば人間も社会も必ず成長発展すると信じていることである。

リーダーはその年齢のいかんを問わず、まさに十代の気持ちをもって先頭に立ってすすむべきである。

若さとはまた好奇心である。新しいことにはつねに関心をもつことと、常に探究心をもって知ろうという意欲を持ち続けることである。

リーダーが、いつも指導してやろうというのではなく、時には学び、教わり、若い人のもつフィーリングやセンスを吸収することが、リーダーが万年青年の心を持ち続ける秘訣といえよう。

指導とは、ともに希望を語り合うことである

危機を叫ぶ経営者やリーダーは多いが総力を結集して乗り越えた暁には、どんな希望や夢があるかを明確に自信をもって語りかける指導者は少ない。

不確定・不透明の時代といわれ久しいが、力強く希望のたいまつを掲げ導いてくれる指導者がせつに求められている。

悲観論や危機を説くのはやさしいし、それが外れても非難されない。

本田宗一郎は浜松の町工場のころから、世界一のオートバイ・メーカーになるうと社員に語り続けたという。はじめは頭が狂ったのではないかと疑った社員も、やがてその熱意に感染し、努力すればひよつとすればなれるかもしれないと思うようになった。

本田は、初めてのオートバイにドリム号と名づけた。

この志が本田技研を日本一から、ついに世界一のメーカーにした原動力となったのである。まことに希望の力は絶大なものである。

ゼロックスと複写機で世界で覇を争ったリコーは、一時 無配会社となり、倒産の危機を噂されたことがあった。この時、経営のリーダーは「私たちの輝ける未来」なる再建計画を作り、誰にでも分かるパンフレットにして全社員に配った。

この希望が、再建をわずか二年で達成し、再び優良会社に復帰させる原動力になったのである。

豊かに生きる知恵を自分のものになろう

バーナード・ショーは、「私にとっては、人生ははかない蠟燭の光ではない。それは、私がしばらくの間手にもった明るい炎のようなものである。私は、そのたいまつを、自分が持っている間、出来る限り明るく燃やし続けたい。そして、それを順送りに次の世代へ手渡していきたく

い」 私たちは、よりよい未来をつくるために、燃え盛りたいまつを手渡していきたいものだ。

教育を通じて伝えていくものは大切であるが、多くのカリキュラムから学ぶことの大切さと共に、人生を生きる上で大切な「いかに他の人とうまく関わっていくか、信仰や心の落ち着きについて、愛や人生を楽しむことについて、勇気や不安の克服について、心の安らぎを得るには、自信や自負心を持つこと、未来に希望を持つこと」等について教えることが必要なのではないか。「知的な人間とは・・・といった定義のどのあたりに噛み合ってくるのだろうか、」これらの項目は教育の範疇ではないが、どのように、それぞれがそれぞれの方法で、時どきに応じて自然に身につけていくものだろうか。

今、本当に教育を受けた者とはどのような人なのか、良く分からない。学校教育では真の教育ができない。もし、生きていく手立てを知らず、人間としての尊厳や、自負心や、人生に対する感謝や、愛し愛されることを知らず、人生という限られた時間を賢明に使うことをせず、自分達

の力で世界を改善していこうとしないなら、いくら学業に優れた人であっても半分しか教育を受けていないのと同じといえよう。(レオ・パスカリア)

人間は笑うから幸せだ

ウイリアム・ジェイムスは「人間は笑うから幸せなのだ、幸せだから笑うのではない」と書いている。微笑むことが無かったならば人との付き合いの幅が狭くなるだろう。

微笑が人間関係を作る上で不可欠であると立証してきた。

先進文明国でも、未開文明国でも一貫して理解されるのは、「笑顔の写真」である。

私たちは微笑みという幸せの素を沢山持っているのである。

日本人のあなたにも「顔施」という大資本がある。仏さまは、知恵も無ければお金も無い、食べ物も衣料もない、何も施すものが無ければ、温かい笑顔を施したらどうだろう。アメリカ人のレストランチェーンで

成功した成功者に「顔施」の概念を伝えたところ、「君はサービス (Service) と言う英語が なぜ、Sで始まっているか知っているかね」と質問され「知らない」と答えると彼はニッコリ笑って言った。

「あのSはスマイル (Smile 微笑) のSなんだよ。私の店では、ウエイトレスに、全米一の笑顔を作れ、と命じている。更衣室に大きな鏡を置いて、暇さえあれば、美しい笑顔のレッスンをさせているんだよ。」

彼は「顔施」があるって、日本人は無宗教と聞いていたけど、嘘だね」と首をかしげていた。

「顔施」は（我を張って他と争わず）微笑をもって人の心に温かさを。ということまで敵を作らない秘訣といえるだろう。

安積得也氏の詩集「一人のために」の中に『平均を上げる人間』という詩がある。

あの人に来てから

職場が明るい

あの人に来てから

職場に出るのが楽しみだ

あの人に来てから

驚くほど職場の平均が上がってきた

一人残らず

平均をあげる人になれ

「自分への応援歌」『一人のために』（安積得也氏作）

自分の中には

自分の知らない

自分がある

みんなの中には

みんなの知らない

みんながある

みんなえらい

みんな貴い

みんなみんな

天の秘蔵っ子

「一本の腰紐」(吉川英治作)

吉川英治さんが母のもとを離れて、町工場につとめたときの話である。年かさの工員から、夜遊び、に誘われる。吉川さんは一生懸命に断る。母が賃仕事をしながらお金をためて、キザミタバコを送ってくれる。

その小包の紐に自分の腰紐を使っている。「お母さんだと思っておくれ」と、手紙がはさんである。吉川さんは、工場では、その腰紐をベルト代わりに使って働く。

周囲の工員から「女の腰紐をしめていやがる」とからかわれるが、吉川さんは赤くなって我慢している。こんな随筆であった。

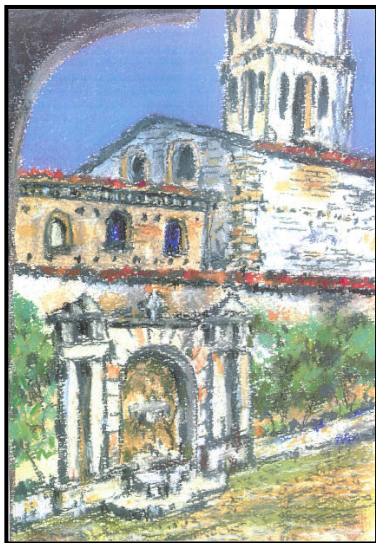
母の腰紐のぬくもりまで伝わってきそうな感じもするが、それよりも「お母さんだと思っておくれ」という母親の「志」が読み取れるではないか。

現在、経済的に発展を遂げ物質的に豊かな時代となり、何自由のない生活の中で、忘れ去られた大切なものに気付くであろう、「お母さんだと

思っておくれ」と賃仕事をしながら息子への思いを綴ったこの短い話にかつての日本の母の姿を見る思いがする。

29

ロータリーが 個人を向上させるには



1985〜86年度会長エド・カドマン氏はテーマとして“You are the Key”「あなたが鍵です」を掲げられた。そして「誰もが、この世を変えようとしてロータリークラブへ入ったのではありません、大部分の人は仲間が広がる機会を求めて入会したのです。ロータリーの深い影響はゆつくりとやってきました、私たちは、ゆつくりその精神に身をひたしていったのです。」「ロータリーの精神は一口で表現しにくいけれども、友情、地域社会への努力、あらゆる人の職業の理解、仲間への友情を含むものであります。入会は派手なものではなく平々凡々としたものでしたが、徐々に変化が起こり、単なる人であることからロータリアンへの変身が始まりました。

当たり前の酔生夢死の生涯から、意義ある運動を援助する方法を見つけ出した生涯へと移っていったのです。超我の奉仕について学び、信じるときに、善の網に取り込まれました。ロータリアンは生まれるものでなく、かくして作られるものなのです。ロータリアンに変身していくゆつくりした過程そのものに、大きな価値があるのです」と教え、「ロータ

リーに注ぐところが大きければ、そこから得られるところも大きい」と、また「ロータリアンとして歳月を重ねると、そこから受ける人間的温かさや愛情、これはロータリーに尽くし得ることより圧倒的に大きいものであることがわかってまいります」と述べ、温かい人柄になれることが一番大きい、と、長年の経験からロータリーの本質を語っておられる。要するにロータリーは仲間を愛する人間になるための場所で、だから、毎週の例会で多くの仲間との出会いが大切なのだ」と例会の大切さを教えておられる。

(A) 孔子の理想主義とロータリー

(森。パストガバナー「私のロータリー」参照)

孔子は自分の性格を「楽しみ以って憂いを忘れ、老いのまさに至らんとするを知らず」と語り、世の中は憂いの種も楽しみの種も両方あるのだから、これはどうしようもできない。憂いの種をなくしようとして

も無理であるから、むしろ楽しみの種を大いに拾い集めて憂いを忘れてしまひ、年のとるのも忘れるほどだ」と論語の中で語っている。ロータリーも同じで、人生を肯定し、人の善意を信じ、汚れた世であっても理想を捨てず、積極的に生きていこう、という理想主義で貫かれている。

私なども楽しいロータリーライフを送っているうちに、たいへんな年になるまで気がつかない有様で、これも「論語」とロータリーの共通した心のありようと言えるのではないか。

(B) 心を開いて友人をつくり、活力ある社会を

(1986年、地区大会・東大教授 木村尚三郎氏 より)

① 心を開いて友達をつくらう

さまざまな集会に参加する意義は、友達ができること。いろんな問題が出れば、相談しよう、研究会をやらう、それには広い人脈を持つことが世の中を切り開いていくために非常に大事な時代になってい

ます。

修道院でいちばん大切な場所の一つは食堂です。修道士が一堂に会して食事をすれば、たとえ沈黙の時間でも、お互いに心が開け兄弟である実感が湧いてきます。

② 知恵は暇から生まれる

私たちの暇とは、忙しい時間の中で、毎週1〜2時間をさいて、自分自身の時間を持つことでしょう。ロータリークラブでよく開かれるシンポジウムは、ともに酒を酌み交わすことなのです。

シンは「ともに」ポーシスは「飲む」でギリシヤ人は酒を酌み交わし、学問、芸術、スポーツなどあらゆることを話し合いながら知恵を出してきたのです。

スクール、スカラーは、ギリシヤ語のスコールからきていて、暇のことです。

暇を作り、心を楽しませながら会話し、食べたり飲んだりするこ

とで、本当の知恵が生まれる。ギリシャ、ローマ以来、優れた学問や芸術を生んできたのは、暇のある人たちでした。

リッチという言葉も、単にお金持ちというのではなく、自分なりの時間をもって絵を楽しむ、スポーツに励む、自分を磨く、ロータリーで活躍する。

自由な時間をもち、知恵を大切に、ということが今後を生きる上で大切なことでありましょう。

この論説を読みながら、ロータリークラブの中にある要素：友情、自己研鑽、人のために尽くす、知恵を出し合う、相談しながら良い方向を目指す、学ぶ、伝える、笑う、共に行動する、などなどは、私たちの人生にロータリーが大きい役割を果たしていることを強く感じるのである。

(C) ロータリーへの私の道 (My road to Rotary)

1945年 ポール・ハリスが亡くなる2年前に書いた「ロータリー

への私の道」の副題として「ある少年の物語―バーモントの田舎―そしてロータリー」という自叙伝がある。イングランドを脱出したピュリタン（清教徒）たちが住み着いたニューイングランドと呼ばれた地方は、ポールが育ったところなのである。

ポールは、農村の生活、山や川、汽車、緑の丘、いつも友達と泳いだ懐かしい池、温かい村人たちを回想し、けがれを知らない心、寛大な心、人種や宗教で差別しない心、なにごととも良いほうへ解釈する心、友情に敏感な心、これらが少年時代の心であった、と書いている。

行き交う人ごとに「やあ」と声をかけ、家に帰れば祖父母との真面目な暮らしが営まれている。ポール・ハリスは弁護士になり大都市のシカゴにやってくる、そこには人、人、人の暮らしがあったが、互いの心は砂漠のようだったと書かれている。1905年、ポール・ハリスは人情を求めている人たちを仲間にして創ったのがロータリーのスタートであった。ロータリーは急速に広がり、大きくなったのは、心のオアシスを求める人が多かったからであると記されている。

クラブが成長するにつれて何か世の中の為にいいことをしようと考え、行動したのが社会奉仕のはじまりであった。ロータリークラブはフロシップ、友達と仲の良い関係を結びたいという気持ちが必要で、仲間を呼び合う心は田舎時代の少年の心であった。

ロータリアン共通の理念「奉仕の理想」の、理想とは、天空に輝く星、というより、むしろ胸中に宿って、私どもを行動に駆り立てる志であるといえるのではないか。ポール・ハリスが語る少年 a boy は、そのような性格であったのであろう。人はより善く、より高くという気持ちを抱き、魚が流れに逆らって上がろうと絶えず鰭を動かしているのと同じように、人も絶えることなく善意に向かって鰭を動かしているであらう。

『善意をもって 人の為に尽くす奉仕の道はいろいろあるが、何れにせよ私たちの世界は明るい希望にむかって歩んでいる』そういう「少年の心」が大切なのである。

ポール・ハリスは、「ロータリーが個人を向上させる方法の一つは、彼

の中に童心を保存せしめることである。およそ善良な人の胸底をさぐれば、そこには必ず常に童心がある。年の移り行くと共に童心は影をひそめる。しかし、その頭脳に弾力をとどむる間、他の友情に応えうる心を持つ間、人は決して老い朽ちぬであろう。人を発展せしめ、長く童心を生かさんとするもの、これロータリーである」と記している。

司馬遼太郎さんは、私の旧制中学の一年上の先輩である。

司馬さんは、風塵抄の中に「高貴なコドモ」なる一節を書いておられる。

「菜の花の沖」の主人公は、江戸時代の航海者にして商人の高田屋嘉兵衛で、12歳で隣村の商家に奉公した。通常は世間に早く出すぎると、『自分の子供の部分が干からびてしまふ』しかし、人間は幾つになつてもコドモの部分の胎蔵していなければならない。「人間は終生その精神の中にコドモを持ち続けている。ただし、よほど大切に育てないと、年配になつて消えてしまふ」

嘉兵衛は、一念発起して商家をやめ、自分で商売を始めるべく、操船

技術を真剣に学び、気象や潮流にも熟達し、激流渦巻くクナシリ、エトロフ間の水道を航行できる特別の航行法を着想したのは、嘉兵衛の豊かなコドモの部分であったということである。創造力と想像力はオトナの部分でなくコドモの部分の働きであるが、嘉兵衛の偉大さは12歳で世に出ながら、コドモをみずみずしく保ち続けたことである。いい音楽を聴いて感動するのはコドモの部分であり、小学生の誰もが担任の先生を尊敬するように、他者の偉大さを感じるのもコドモの部分である。

ポール・ハリスが、個人を向上せしめるには長く童心を保つこと、と記されたことと、司馬遼太郎さんが、精神の中に豊かなコドモを胎藏させること、とは共に人を発展向上させるために最も重要な要素であることを示しているのである。

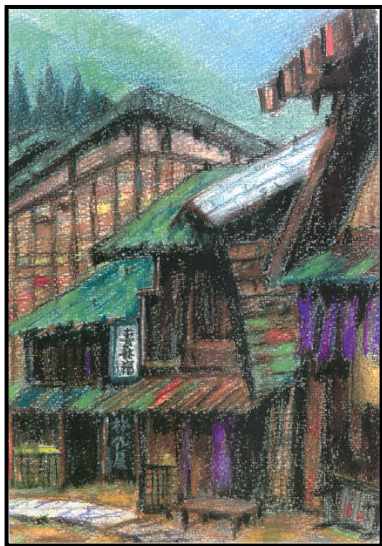
毎週のロータリークラブ例会に出席して、親しい友人と心を開いて語り、他愛のない話に大口をあけて笑い、人のために尽くす道を考え、一つに目標に向かって力を併せて行動する。これはオトナの部分でなくコドモの部分であり、ロータリーが良き人を育てる基本がここに存在する

と思うのである、ロータリーが個人を向上させる道は、親しい友人と楽しく信頼感あふれるロータリークラブの中にあるのだ。

ロータリーが私達に何をしてくれたか？の疑問に対する一つの答えなのではないか。

30

ロータリーあれこれ



1、人それぞれに、幸福の中身が違う

幸福はお金第一という人、お金が出来たら名誉、力だという。子供はチョコレート、女性はダイヤモンド、とそれぞれ違う。

南の太平洋に夢のような島があったそうだ。アメリカのビジネスマンが一儲けしようとしてやってきた。ホテルに泊まり、朝食を済まし、海岸へ出ると、筋骨隆々とした若者たちが、椰子の木陰で朝の昼眠をしていた、ビジネスマンは「おい！元氣な若者、立ち上がってバリバリ働きたまえ」、若者は「旦那、働いたらどうなりますか」「働いたら賃金がもらえるじゃあないか」「お金貰えばどうなりますか」「お金貰ったら金持ちになれるじゃあないか」「お金持ちになつたらどうなりますか」「金持ちになつたら、この辺りで別荘でも買えるだろう」「別荘買ってどうするんですか」「そうだな、うまい空気を吸って朝から昼眠でもできるだろう」「旦那そんな回りくどいことしなくても、今此処でこうして昼寝しているじゃありませんか」

2、利己心（セルフ）に始まり、

フェローシップ（自他共存）の社会へ

人間は最初、森の中で狩をして食べ物をとっている内に、人間同士がぶつかって殺し合いをしていた。つまり、自分が生きる為には相手をやっつけねばならない、そんな時代であった。

時代が移り、平地に定着して、農業や牧畜をやりだすと、殺し合いとしてはお互いに幸福になれないということに気が付いた。つまり仲良くしようという時代に移ってきたのだ。しかし、「動物の生態」という本にあるように、猿はボスの下に、いくつかのグループに分かれて、違ったグループに会えば、決して相手の顔を見ない、相手もソツポを向く。顔を合わすとろくなことはない、不快な思いをするか、喧嘩になる。彼らはそれをちゃんと知っていて無関心を装うのである。人間でも同じことをする者が沢山いる。「やい眼を付けやがったな！」と絡まれる。これは、

まだ猿の時代を脱していない証である。

3、フェローシップからサービス（利他）の社会へ

お互いに仲良くしていくことは大変良いことだが、これだけでは進歩がない。

幸福は保たれるが、積極的に進歩するためには、他人の為も多少は考えなければ世の中は良くならないと考えついた。たとえば、交通の頻繁なところで、自分だけ勝手に突っ走ろうとしてもそうはいかないし、自動車などと衝突する。だから、いくら急いでも必ず信号を守って止まらねばならない。多少は自分の利益を犠牲にしなければならぬ、これがロータリーのサービスの精神の根底だ。

4、どうしてロータリーが生まれたのか

ロータリーが創られた1905年ごろは、セルフからフェローシップに移っていく過程の中で生まれた初期の単純なロータリークラブであっ

た。

当時のシカゴの社会情勢、経済事情は、利己心まるだし、邪魔者がいとピストルで撃ち殺し、自分だけがうまい目にあうという時代で、有名なアル・カポネが暗躍しているころであった。しかし、これでは余りにも情けない、お互いに仲良くしよう、心にゆとりを持つてではないかということ、ロータリークラブが生まれた。しかし、仲良くするフェローシップだけではロータリーの存在価値は小さい、「もつと人のためを考え、人のお役に立とうという精神を取り入れない限り、ロータリーの発展はありえない」との認識が生まれ、この精神が今日のロータリーの進歩を齎した原因であり、サービスを主とするロータリー時代に入ってきたのである。

5、利己心（セルフ）と利他心（サービス）

の葛藤は人類永遠のテーマ

人の本心は、やはりわが身だけが可愛い、人のことなんかかまって

おれないというのが本音だね、人間は自分の野心を伸ばしたいという利己心と、人の為に尽くそう、という高潔な利他心とが何時も心の中で葛藤しているものである。

ロータリーは人の心に常に存在しているこの葛藤に対して「ロータリーは利己と利他の調和を目的とする人生哲学である」と決議23-34で表明し、人間が物事に処する正しい考え方を示すに至った。

15世紀から16世紀にかけて、マルチン・ルターによって準備されたプロテスタントの思想が起り近代ヨーロッパに展開しはじめる、この思想はイングランドに広がり、これを信じるスコットランドの人々の多くが、アメリカのニューイングランド地方に移住してプロテスタントが拡大し始める。ルターは「人は罪深い存在であるが、神の恩恵によって救われる」と説き、職業は神が与えたもうた使命、即ち天職を意味し、プロテスタントの国ぐにはこのような職業に対する思想が定着することになる。そして「人が欲するものを安く提供することは、神の御心にそうと共に、隣人愛の実践である」を信奉し、このルターの「職業使命

説」がロータリーの職業奉仕の源流をなすものであるといわれる。

ドイツのマックス・ウエーバーは「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の中で、正常な資本主義は「片手でソロバン勘定をすれば、片手にバイブルという倫理的抑制がなければならぬ」と教え「利益追求の中にも利他の心がなければならぬ」という正しい職業のあり方を示している。

ロータリーの創始者ポール・ハリスは、 ∞ 歳からニューイングランド地方に住む祖父母に育てられた。ポール・ハリスは、敬虔なプロテスタントの信者であった祖父をはじめ多くの隣人から影響をうけて過ごしたニューイングランド地方での15年間に「人の為に尽くすことが、実は自分も幸せになる道である」の考えと、寛容、忍耐、善意を身につけ、後年、孤独が渦巻き、混乱したシカゴの町に心温まる人間関係を築きたいとの思いからロータリーを思いついたと語っている。

話はガラリと変わるが、アメリカ大統領をはじめ、第一級の指導者の規準らしきものにWASPがあるようである。ホワイト、アングロサクソン、

プロテスタント、即ち「アングロサクソン系白人、スコットランド系、プロテスタント」の人が多いようである。このような話から考えると、第一級の指導者として相応しい人は、プロテスタントの倫理観を信奉する人びとであると信じられているようである。

ポール・ハリスは「寛容という一般性の高い精神が、努力の末に得られる唯一の不変の成果であると証明されるとしたら、それだけでもロータリーの存在価値があるだろう」と語っているように企業の指導者となる資質を磨く場がロータリークラブであるといえるのではないか。

6、1908年、ミシガン大学で経済学を学び、シカゴで「セールスマン教育」の学校を経営していたアーサー・F・シエルドンは、シカゴの混乱した商業道徳の中にあっても例外として正しい考えを持つビジネス商家が成功している実情を調査した結果、「成功に至る道は一つしかなく、それはサービスの道である」と教えている。そして事業成功の秘訣について次のように語っている。

「商売は儲けなければ成り立たない、経営者が利益獲得に真剣になるのは当然である。しかし、一体どうすれば利益が得られるのか、それは、社会のニーズを調査し、新しいアイディアを事業経営に導入するなどの努力は当然であるが、最も大切なことは、お客の立場に立つてものを考え、お客のお役に立つ、所謂サービスの心を適用して取引を続けることで、客との間に次第に信頼関係が深まってくる、このような取引を更に長く続けることで永年の間に、信用、という精神的なものが築かれ、これによつて事業の成功と永続が実現されるのである」即ち「事業の成功と繁栄はサービスによつて齎される」そして「最もよく奉仕する者、最も多く報われる」(He Profits Most Who Serves Best) よこつう実践倫理よ、
「超我の奉仕」(サービスを第一に、自「我」を第二に) (Service above Self) とが企業繁盛の原則であることを示している。この「二つの標語」はロータリアンの商業道德の高揚と、ロータリーの進展に大きい役割を果たしてきたのである。

「職業奉仕なくして、事業繁栄は難しく、事業の成功なくしてロータ

リアンになれないであろう」即ち、ロータリーと、ロータリアンの事業の成功とは切っても切れない関係にあり、「職業奉仕」がロータリーの根幹であるといわれる所以だ。

7、ロータリークラブの会員である喜び

私がロータリーに入会したのは1962年2月で、もう44年余になった。人生の半分以上である。何より有り難いことは、多くの立派な師、数え切れない友人に出会えたことである。学生時代の友人は沢山いたが、年を取ると同窓会に出る人が少なく、出会っても顔も名前も分からない、聞くのも失礼と思いい知ったふりして話していると、ああ、あいつか。分かった時にはもう、さようなら、しかも年一回。今では、同窓会の世話役がいなくなりお呼びもかからない。

それに引き換え、ロータリークラブは毎週決まった曜日の決まった時間に多く仲間がやってくる。ご苦労頂いている会長、副会長、幹事、理

事の皆さんは毎年入れ替わり、みんな同じ立場で話し合える。何より良いのは若いメンバーが次々と入会し、年寄りと分け隔てなく付き合うことができて、若返った思がする。

毎週の出会いは「今日の例会は、これからも続くであろうが、今日の出会いは再び回ってこない、だからこの時間を大切にしよう、生きて出会える喜びを分かちあおう」の思いは有り難いものである。

私が八尾ロータリークラブに楽しく44年間在籍して感じたのは

① 親しいメンバーと一緒にいると、安心して話しができ、心が和む、ユーモア溢れるバカ話も自然に出てくる、この基本にあるのは相手の人柄、個性を認め合っているからである、こんなお付き合い今まで経験したことのないものだ。

② 多くの会員から沢山学ぶことができた、毎週出会うのだから付き合い合う密度の濃いものである。ロータリーは卒業のない人生の大学といわれるが、松下村塾のような塾 人と人の密接な楽しみ、共感、学びの場ではないかと思う。

そこには共通の志がある、それが、親しみの中で磨かれて、知らぬ間に自分を作っていく。そこには相手に対する謙虚さが大切なのではないか。

8、ロータリアンの価値ある共通の理念

ロータリアンは共通の理念「The ideal of service」「奉仕の理想」で結ばれている。その意味は「常に思いやりの心をもって、他人のお役に立とうとする心」である。

奉仕の理想は、イエス・キリストの「汝他人より与えられんと欲することは、何事も人のために与えよ」「あなたが他人からして欲しいと望むことは、なにごとく人も人にもして差し上げましょう」という黄金律や、孔子の「それ恕か」「己の欲せざるを他に施すなかれ」「あなたが他人からして欲しくないことは、人にしないようにしましょう」という心と同じ意味である。

「奉仕の理想」は私たち人間が、古来より持つべき最高の倫理であり、この理念を日常生活に生かすことで、「お客から信頼され、人から信用され、家族に親しまれ家庭円満」に繋がり、良き人生を生きるための基本の心である。このような素晴らしい特性を身に付けることができるロータリークラブの一員と考えれば、これほど有り難い場は他に見当たらない。

9、吉川英治氏の、一本の腰紐――草柳大蔵氏「水は深く掘れ」から

吉川さんが母の許を離れて、町工場に勤めたているときの話である。仕事が終わると年かさの工員から、夜遊び、に誘われる。吉川さんは一生懸命ことわる。母が賃仕事をしながらお金をためて、キザミタバコを送ってくれる。その小包に母の腰紐を使っている。「お母さんだと思っておくれ」と手紙が挟んである。吉川さんは、工場ではベルトの代わりに母の腰紐を使って働く。周囲の工員から「女の腰紐をしめてやる」とからかわれるが、吉川さんは赤くなって我慢している。

こんな随筆であったが、「お母さんだと思っておくれ」という母の志が読み取れるのではないか。今、親も子も日本人が持ち続けてきた「志」が失われているのではないか、ロータリアンは、少なくとも自分の周囲の人々に「人間の持つべき志」を伝えていかねばならない。

10、あらん日のために、同上

第2次世界大戦は日本の若い人びとに大変な苦しい体験を与えた。

私のクラブにも、私の友人も大戦に駆り出された人が何人もいる。

今の贅沢な時代に生きている人には、別世界のような時代であった。

文化系の大学生は学業半ばで戦場へ赴いた、此処に大正11年生まれの原透さんが家族にあてた葉書がある。

「昭和19年8月21日、返信不要。諺にいう、去るものは日々に疎し、とか、月日は百代の過客にして、行き交う年もまた旅人なり云々、という芭蕉の奥の細道の冒頭の一文がなんとなく思い出されます。し

かし小生にとって幸せなことは、去るものは日々に疎くはなかつた。楽しい家族と嬉しい親友をもつことができました。行き交う年は旅人という感じは甚だ深い。年というものを旅人として送り迎えましょう。無念無想でこの旅人を送り迎えんとするのが現在の小生の心境です。

だが、すべてのものを あらん日々のために心の糧にしようとする精進をも小生一生忘れはしません。小生も今、我々の国のあらん日々のためにささやかな一命を捧げて出発するのです。そして心の糧を蓄えることができれば、小生は生もよし、また死もよしといえるのです。

お父さん、お母さん、もし先に死んだといっても泣かないで下さい。私はあらん日々のために一命を捧げたのですから。のおお君、きくえ、みんな元気で。みんなによろしく。小生、意気軒昂。」

思えば、今日私たちは、「将来あるであろう日の為に」という指標を持たずに過ごしているのではないか。ロータリーもこの指標を持つことが大切であると思う。原透さんは、中国に渡る途中、乗っていた輸送船が潜水艦のために撃沈された。この直前に書かれた葉書であった。

彼は私より3才年上である。この当時 日本を憂い、父母兄弟と別れて命をかけて「日本の将来、あるであろう日のために」若い命を捧げたのである。

今、人々は、多くの若者は、このような願いを込めて祖国のために散っていったことを知っているだろうか、また、戦時中若者が命をかけて日本の将来を思い散った志に値する日本になっているだろうか、現在の若者がそれに応えるだけの人材に育ちつつあるだろうか。

年を重ねるばかりの自分自身を振り返りながら無力感を感じることしきりである。幸い、われわれにはロータリーがある、自分自身を磨いて人間性を高め、職業の倫理観高揚を志し、地域社会、祖国、世界のために尽くすことができるのである。日本、世界のあらん日々のためを考え、実践する場に席をおいているのである、みんな力を合わせて頑張ろうではないか。

11、エリートとして心に秘めた誇りを持つとう

佐藤千寿氏「選ばれたる人」より

私が入会した当時、立派な会員が多くおられた、若く頼りない私は小さくなっていったように思う。だが先輩は偉そうな顔もせず親切に指導して下さったものである。

いつだったか、ロータリアンは「エリート根性を持つてはいけない」と言われたことがある、それは「威張つてはいけない」「思い上がてはいけない」という戒めからだと思つたのである。

エリートとは「選り抜きの人々」「精鋭」「社会の中核」という意味で、ロータリークラブの会員は、職業分類の原則に基づいて推薦され、選考委員会において「その人格、職業上及び社会的地位並びに一般的な適性を徹底的に調査された上で、更に現在の会員全員に通知し、異議申し立てのない場合に、初めて入会が許可される・・・」これだけの手

続きを経た人が、どうしてエリートではないのか。

エリート意識を持つな、などということは間違いである。

その代わりにエリートには当然、*Noblesse oblige*—「高い身分には、それに伴う道徳上の義務が伴うこと」が付いてくる。

ロータリアンは選り抜かれたエリートだからこそ、「*The Ideal of Service*」(奉仕の理想)を自分の事業に、社会生活に、家庭生活に生かすことで多くの人々に繁栄と、潤いと、幸せを齎す。これがロータリアンの一番の願いなのである。

私たちロータリアンは、このような心を身につけて、より良い人生を歩もうではないか。「エリートとして、心に秘めた誇りを持つとう」を合言葉にしたものである。

92才で豊饒として後進を導いてこられた東京東RCの佐藤千寿さんは、以上のような言葉を贈ってくださいました。

さらに、昔の日本は、国の将来を担う青年にエリート教育を施してきた。

今ではもう無くなつたが、旧制高等学校 陸軍士官学校 海軍兵学校 など、優れた学生を集め「将来、国の、社会の指導者として献身する為の使命感と誇りを与える教育制度」を充実したのである。

長岡実氏（元東京証券取引所理事長）は「第一高等学校の寮生活は思ひ出の宝庫だ。日本中から集まつてきた若者が寝食をともにし、同じ釜の飯を食う。あるいは文学や哲学に、スポーツに、青春の血を燃やしながらか切磋琢磨する。それぞれの人格形成の基礎を築きあげ、生涯の友がたくさん出来たのも寮生活のおかげだ。」と書いておられ。

佐藤パストガバナーは、「旧制高等学校で徹底的に叩き込まれたエリートたる人間形成は、社会人になってから、それに代わるものが、正にロータリーであつた。ロータリアンとしての矜持がそこにあるのだ。」と語っておられるように、日本の教育の頂点である旧制高等学校―帝国大学で人間を磨き、学問に真剣に取り組み、国、社会の指導者として日本の発展の礎を築いてきた「理想的教育」が、社会にあつてはロータリーが担つたのである。

私たちは、その誇りを持ち続け、それに相応しいロータリアンにならなければならぬ。それを可能にするのは一人一人の会員の自覚が大切なのだ。

31

ガイ・ガンディカー氏の 「ロータリーに入ると いいことがある」より



長崎南ロータリークラブ「ロータリーチャンネル」より

1923～24年度RI会長 ガイ・ガンデイカー氏の「A talking Knowledge of Rotary」が小堀憲助さんの翻訳によって「ロータリー通解」と題し発行され、1989年の改訂版を手に入れることが出来た。

ロータリーの初期に「ロータリーとは何か」を教えるために書かれた読本であり、特に第2次世界戦争後の素晴らしい発展を遂げた日本のロータリーは会員数の増加に伴う質の向上という問題に取り組まねばならない。そのためには 正しいロータリー情報の普及が大切である、今ままでロータリーからあまり生きがいを見出せなかった人々に学ぶ機会を与え、ロータリーの「職業奉仕」が会員それぞれの自己改善の出発点を提示し、それが、引いては職場に夢と潤いを与え、各自が正当な利潤と幸福とを得て、やがて職場の潤いが社会全体の潤いとなるものと信じ、翻訳されたそうで、初期ロータリー精神の解明に大きい手がかりとなるものであつて、日本ロータリーの一つの重要な理論的原点となるべきであ

ろう。と前書きに記されている。

しかし、本書の解説は膨大なものであることから、先日 長崎南口ロータリークラブが編集されたガイ・ガンデイカー氏の「ロータリーに入る」といいうことがある」を披露する。

- ① 人生で、是非とも持たねばならない知己が得られる。
- ② 純粹で健全な親睦というものがどんなに良いものかを知ることができる。
- ③ どうすれば仕事が成功し、問題解決が出来るかについて、啓発を受けることが出来る。
- ④ 効率の高い経営方法とは何かについて、知らず知らずのうちに教育が受けられる。
- ⑤ 多くの自分の知らない情報が得られ、先見の明を授けられることが出来る。
- ⑥ 自己の思考の限界を自覚し、もって転機を得ることが出来る。

⑦ 知己を広め、自分を他に理解してもらおう機会が与えられ、そのことが自分の企業に対する信頼を呼ぶことにつながり、その結果として企業上の利益となる。

⑧ 各自が社会の指導者となるだけの訓練がうけられる。

⑨ 自分を人間的に磨くことができる。

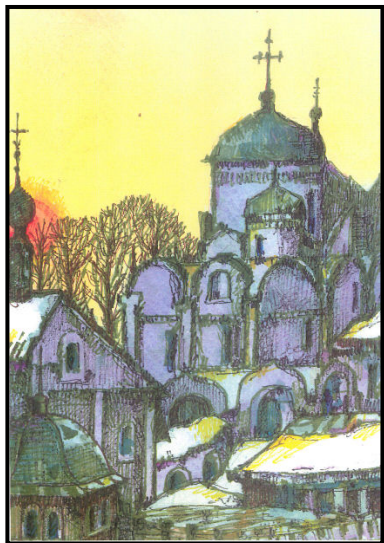
こんなに良いことがあるロータリークラブの例会を欠席することは、千載一遇のチャンスをのがすようなものである。

さすが、R I会長ガイ・ガンディカー氏のロータリー観である。これを知れば例会の出席の意味がはつきりするのではないか。

ちなみに、「ロータリー通解」に示された「自己研鑽」と「親睦と奉仕の歯車をガッチリと噛み合わせる」として「ロータリーにあつては、先ず親睦の歯車を回転させ、この動力を奉仕の歯車に伝えねばならない」と記されている。

32

近代日本の企業倫理と、 企業経営に見る職業奉仕



日本には、わが国の風土によって育まれた生来の倫理観があった。

それは、近代日本をつくった渋沢栄一や新渡戸稲造の思想にもあらわれている。

しかし、それ以前、江戸時代にもしっかりした倫理観に立って「商売とは何か」を考えていた学者がいた。それが、石田梅岩である。石田梅岩は、十一歳で京都府亀岡市から京都の商家へ丁稚奉公に出たが、15歳で郷里へ帰り、23歳で京都の別の商家に奉公している。忙しく奉公しながら独学で、神道、仏教、儒教の思想を学び、35歳で師・小栗了雲に出会い学問を深めた。

梅岩は社会性に富み、自分が得た知識と思想を多くの人に伝えたいと、45歳で奉公を辞し京都車屋町の自宅に、聴講自由の講席を開いた。彼の実践的「哲学」は評判を呼び、商家の主人や番頭と膝を交えて、商人の社会的役割と商業の意義を説いた。梅岩は「武士道」に対し「商人道」を説き、武士が君主の為に一命を捧げるように、商人は勤勉、儉約、正直をもってお得意の生活を支えることが肝要、と説いた。

① 梅岩は「商人の仕事の原点に遡って説いた」・商人が世の中に役立っていることの意味は？

商人の存在がなかった原始生活に遡って考えよう。原始生活の時代、人は身の回りのものを自給自足する生活であったが、商人の介在で地域社会にはない貴重な珍しい生活物資が商人の手で供給され、土地の人から喜ばれることができた。そこに商人の社会的存在価値が生まれる、これが商売の原点である。このことは、ロータリーにおける「有益なる事業」に合致し、職業の尊さを表している。

② 誠実な企業づくり

梅岩は「商人の売り上げによる利益は、武士の禄と同じである」と明確に定義づけた。

お互いに所有関係、貸借関係、権利関係を明確にする。その点におい

て、フェアでオープンにすることではないか、これが正直であり、そのような正直によって取引が行われるなら、取引はフェアで、事実をありのままのオープンにすることではないか。それが正直で、正直によって取引が行われるならば世間全体に信頼が広がり、お互いに和合するような社会をつくることを理想と考えた。

③ お客さま満足・・富の主は天下の人々

富の主は天下の人々である。その心は商人と同じであるから、お金を出す時一銭でも、もつたいないと思うであろう。しかし商品の良さを認めれば、是非買いたいと思うことになるに違いない。

お客様を大切に、真実を旨として仕事に励めばお客の心に適うであろう。富の主は天下の多くの人々である、常に良い品を安く提供するという心がけで努力することが大切である。

お客様の満足の度合いを、商品の品質、性能、サービス、コスト別に

分けて働く人の労働によって、富の生まれる過程をとらえ、自分の商売の実践の積み重ねと、奉公の体験から考えを纏めた実践理論から説いている。

④ 得意先、仕入先、ともに繁盛する

梅岩の唱えた「商人道」には、天地自然の理、正直、節約、法の遵守があり、梅岩はさらに「先も立ち、我もたつ」という「共生」を唱えた。お客の為に商品の質を競い、価格を競うのは良いことで、経済人として当然である。得意先への忠誠は当然であるが、仕入先いじめはどこでも見られるが、しかし、仕入先の協力なくしては商品の質を確保することは難しい。

自分の事業が長く繁栄するためには、「得意先、仕入先、」共に繁栄することが大切である。

ロータリーの職業奉仕では、「取引に関するすべての人に満足を与える商

取引を心がけること」が大切であると教えている。「お得意さんには満足
を、仕入先には正当な取引を、従業員には温情ある待遇を」と、各自の
職業に「他人に対する思いやりの心、助け合いの心」即ちサービスの心
を適用することで、取引に関するすべての人に満足を与えることが出来
ると教えている。

「取引に関する人に満足を与えることが、それらの人の信頼と後押しで、
事業発展が齎されるのである」という「お客の信頼、仕入先と従業員の
後押し、企業の努力」というトライアングルが、事業の永続的な繁栄を
可能にするのである。

⑤ 「心の安楽」のための勤勉―梅岩、ウエーバー、フランクリン共通の 倫理

梅岩は、「心を知る」のが学問のはじめとしたが、心を知るだけでは駄
目で、そこで会得したことを実際の行動で示すことが大切だと教えてい
る。ここで彼は、農家の例を上げて説明している。

朝は未明に家を出て、夕べは星を仰いで帰る。1年365日働き詰めの生活をする。それが行動である。「何に楽しみを求めめるのか」 梅岩は、そんな中にも心の「安楽」を見出している。

「身は苦勞すといえども、邪なきゆえに心は安楽なり」というように、肉体的には苦勞するが、人の道に従って生活しているので、「心は安楽」だというのである。

梅岩はこの心の「安楽」を何よりも大切なものと考えた。

イトーヨーカ堂の創業者 伊藤雅俊氏は、「商いの心」で「お客様あつての商売が厳しいものであることは言うまでもありません。しかし、お客様さまに誠心誠意を尽くして、認めていただければ、何の後ろ盾がなくても、食べていけるのです。母と兄が身を持って示してくれたのは、商売の厳しさと同時に、商売の素晴らしさでした。「働きづめの生活の中にある、精神的に自立した自由人の生き方だと思えます」このような、心の「安楽」を得るためには、大前提として「勤勉に働く」ことがあり、時間を惜しまず、精一杯働くことによって、僅かでも「余裕」をつくる。

茲で、「勤勉」は絶対に必要であるが、勤勉だけでは足りない。それを補う為に必要なのが「儉約」である。「勤勉と儉約とが組み合わされ」て、ようやく僅かな「余裕」ができる。これが「富」である。「勤勉と儉約」で生み出した「富」に加えて必要なものが、「人の道」の会得であり、「道徳心」であった。その3者が揃った時に、初めて「安楽」が成立する。

⑥ マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理」と通じ合う「石門心学」

ウェーバーは、ベンジャミン・フランクリンがプロテスタントの倫理を持つ資本主義精神の持ち主として大いに評価した。フランクリンはアメリカ独立宣言の起草者の一人として、思想家、実業家として企業を見事に成功させた人であった。だから、ウェーバーにとって、プロテスタントの倫理を資本主義精神に結晶させた貴重な生き証人と評価した。フ

ランクリンは自伝の中で、13の徳を上げている。また「若い商人に与える忠告」の著書の中で「勤勉と儉約」を上げ、「要するに富裕にいたる道は、勤勉と儉約、この二つにかかっている。つまり、時間と貨幣を浪費せずに、活用したまえ、勤勉と儉約がなければ何事も駄目であり、それがあれば総てがうまくいくだろう。正直にして得られるものは、残らず手に入れ、手に入れたものは残らず節約する人間は、必ず富裕となるであろう」

西欧の近代資本主義創設期に、その文明を築いた「精神」のバックボーンにプロテスタントの倫理があったというマックス・ウェーバーの指摘は、画期的な学説であり、今日に与える影響は大きい。

その資本主義の倫理の中で最も重要なものが「勤勉」と「儉約」である、日本の資本主義創設期、石田梅岩は「勤勉」「儉約」「人の道」のフランスを説き、学問の基本とした。

この日本の資本主義と、ウェーバーの西欧の資本主義とは見事に対応しているではないか。

ウエーバーの学説の画期的なところは、資本主義の根底にプロテスタントイデオロギの倫理をおいていることであり、これは梅岩の説く「心学」と合い通じるものである。

⑦ ロータリーの職業奉仕と資本主義の精神

ロータリーの創始者ポール・ハリスはミシガン湖に面したラシーンで、父ジョージ、母コーネリアの次男として生まれた。雑貨店を営む父が事業に失敗したために、ポール・ハリスが3才の時、ニューイングランド地方、バーモント州の寒村ウオーリングフォードに住む祖父母に預け育てられることになる。スコットランド系の祖父ハワードは、敬虔なプロテスタント信奉の人であった。

ポールが3才から15年間過ごしたウオーリングフォードの生活の中で、祖父母や多くの隣人から学んだ価値観を基礎にロータリーを思いついたと述懐している。「ロータリーは、私の少年時代にニューイングランドの

人々の特性であった寛容と善意と奉仕の精神から生まれたもので、私は、その精神のうち、自分の中にあるものを、すべて自分なりに他の人に伝えようとしてきました。」と語っている。ポール・ハリスは15年間、祖父母や多くの隣人から学んでプロテスタンティズムの倫理を身につけ、生活の中から体験した倫理観をもとに、シカゴの地でロータリーとして開花させることになる。ポール・ハリスは、アイオア州立大学の法科を卒業、祖父が望んでいた弁護士の資格を得る。

1893年シカゴで万国博覧会が開催され、活気に満ち大いに賑わうが、博覧会終了後シカゴ市が大量の資金をつぎ込んだために大不況が襲う。詐欺、横領、カツパライが横行し、商業道徳は地に落ち、ギャングが巾をきかす様相を呈した。1896年ポール・ハリスはシカゴで弁護士事務所を開設、破産法が施行されて毎日法律相談に訪れる人達で忙しい日々を送っていた。

しかし、心を許し合える友人は誰もいなかった。彼の頭に、自分の育てられたニュートンランドの村の人々を思い出しながら、ある考えが

浮かびあがった。

孤独の中で過ごしている何万人という人の中から、いろいろ異なった職業から1人ずつ集める会を創ったらどうだろう。各人の意見を寛

容の心で認め合う会にすれば、懐かしい村で経験した助け合いや友情が、混乱したシカゴの街に甦るのではないか。1905年2月23日、石炭商のシルベスター・シール、鋼山技師ガスターバス・ローア、洋服商ハイルム・ショーレと相談してロータリークラブは船出する。例会に集まった会員たち、大学教授と八百屋さん、デパートの社長とお医者さん、弁護士さんにパン屋さん、など職業の違う会員たちは気分が開放的になって、何でも打ち明けることができる。お互いに違った業種の人とは心から融け合うことができて、会員たちは例会の入り口で肩をたたき、笑顔で語り合いながら、みんな少年時代に帰ったのである。

1908年1月、ミシガン大学の経営学部を優秀な成績で卒業した38歳のアーサー・F・シエルドンが入会し、ロータリー発展に貢献することになる。

職業奉仕の源流を辿れば、シエルドンが事業経営の本質について語っているところまで遡ることになる。

i・アーサー・F・シエルドンの理論

シエルドンは「職業は自分の糧を得る為のみあるのではない。職業は世の中の人の役に立つ為にあるのだ。利潤は必要であるが、利潤が企業の目的ではない。世の中に役立ってこそ自ずから利潤は得られるのである。」また「思いやりの心で、常に相手の身になって仕事に励むことこそ、繁栄の道なのである。」と論説。ロータリーにサービスの概念を導入し、ロータリーの思想形成に力を尽くした。シエルドンは、また「商売は利益を上げなければ成立しない。経営者が利益を獲得するのに真剣になるのは当然のことである。しかし、一体、利益はどうすれば得られるのか、それには、社会的なニーズを調査し、アイディアを大切にすること、どの経営努力に加え、特に大切なことは、常にお客の身になって考え、お客のお役に立つ、サービスの心を取引に適用し、取引を続けることで

客との間に信頼感がだんだん深くなっていく。このような商取引を永年続けることで世代を越えて信用という精神的なものが築かれ、これによって事業の永續と繁栄が築かれるのである。即ち利益はサービスによって齎されるのである」 「優れたサービスが、優れた報酬に値することは、あたかも火と熱の関係と同じである。小さい火には小さい熱が、大きい火には大きい熱が与えられるように、サービスが大きく良質であれば、報いも大きくなる」 (He profits most who serves best)

更に具体的に示せば、利益を追求する企業にあって、取引に関する関係者に満足を与えるよう配慮することが、企業の繁栄に繋がるのである。

a) お客様には正直、親切に b) 従業員には公平な待遇を、 c) 同業者には信義と友情を、 d) 仕入先には誠実な取引を、というように、みんなに喜ばれる企業運営が発展、繁栄に繋がるのである。

企業の利益だけでなく、取引に関するすべてに利他心(サービス)を持って当たることによって永續的發展という報いがあるということを教えている。このように企業経営に奉仕の理想を適用することで、職業倫理

を高め、企業の道徳的水準を高めることに繋がるのであり、自己の判断基準として「4つのテスト」があるのだ。

このようにしてロータリアンの企業が繁栄するだけでよいだろうか？
ロータリーは地域社会への貢献を目指していることから、でき得れば「職業倫理向上が企業永続の道であることを、友人、同業者、などに伝え、分かち合うことで業界の道徳的水準の高揚が得られるのではないか。伝える場として、商工会議所、同業組合などが考えられる。

ロータリークラブに入ってよかった！

素晴らしい出会い

よき師、よき友は人生の宝

あとがき

仕事の合間をさいて整理した文章が200を越えました。今回お届けする32編が少しでもご参考になれば幸いです。

「ロータリークラブに入ってよかった！素晴らしい出逢いーよき師、よき友は人生の宝」なんて気取った題をつけて気恥ずかしかったのですが、ずば！と思うとおりの気持ちを表しました。

ロータリーは100年の歴史を刻み更に世の中に訴え続け、少しでもよい世界、よい地域社会、よい家庭、よい人材を目指していることに誇りをもちたいものです。すぐに達成できるものではありませんが、一人一人がその気をもって進んでいけば、少しずつでもよくなるものと思

ます。

平沢先生は「無関心の罪を犯していませんか？」と問いかけられました。ロータリーではよく「奉仕の心」を使いますが、こんな話を思い出します。

3人の娘さんをもつ母親がしまして、長女が身体障害者で知能指数も遅れていました。いつも2人の妹からバカにされていました「バカ、アホウ」という言葉が姉に浴びせられていたのです。この長女が大きい手術を受けるために入院しました。手術が終わって、術後の苦しみの中でベッドに付き添っていた母の手を握りしめて「お母ちゃん、私だけでよかったね」と言ったそうであります。つまり術後の痛みが自分だけでとまってよかったね。妹たちにふりかからなくてよかったね、という意味で、それは恐らくたどたどしい言葉であつたでしょう。しかし、知能指数の低い身体障害者の子供の体のどこからこの言葉が出たのでしょうか。「お母ちゃん私だけでよかったね」と。

私は奉仕という言葉を目にするたびに、ふと顔が赤らむ気がいたします。自分の心に照らして恥ずかしい気がいたします。私にはずっと忘れられ

ない言葉であります。

1978～79年度のRI会長クレム・レヌフ氏はテーマとして**each Out**（手を差し伸べよう）を掲げられました。「人間が犯した最大の罪は他人を憎むというより、他人に無関心であるということでもあります。そして人間には意志の力でいくらでも引き出せる未知数の可能性が潜在しているのです」という言葉です。これが私達のロータリーの心を明確にする哲学なのではないでしょうか。

お読みいただいた皆さんのお幸せと健康をお祈りし、ロータリーの素晴らしい出逢いを楽しみたいものです。

筆者 拝

筆者プロフィール

戸田 孝

1926年1月7日生まれ

〒659-0065兵庫県芦屋市公光町9-6

大阪大学工学部卒業

株式会社トヤマビル取締役社長 ほか

ロータリー歴

1961年 八尾ロータリークラブ入会

1970年 同クラブ会長

1982年 国際ロータリー第2660地区 ガバナ―

1983～93年(財)米山記念奨学会 一広報委員長、

学友委員長、財務委員、長期計画委員

1986年 国際協議会グループ・リーダー

1987年 同

1989年 シンガポール規定審議会 代表議員

- 1989年 ソウル国際大会 副SAA
1992年 RIAアジア地域リーダーシップ・コーディネーター
1992年 RI会長情報カウンセラー
1992年 RI職業奉仕タスクフォース
1998年 (財)米山記念奨学会 監事
1999年 ローターリー財団恒久基金日本委員
2000年 RI2004年国際大会副統括委員長
2002年 第3ゾーン会員増強、退会防止コーディネーター
2004年 同上

その他

戸田奨学会 会長

大阪大学工業会 理事

ROTARYって何ですか？

ロータリーは知、行、楽

共に生きる、生きるとは分かち合うこと

積善の余慶

文庫版「素晴らしい出逢い

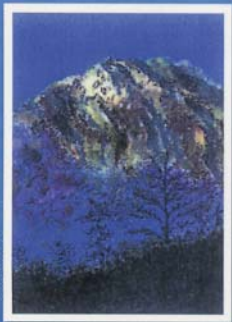
よき師、よき友は人生の宝」について

2006年10月に発行された書籍版「素晴らしい出逢い よき師、よき友は人生の宝」を著者、PG戸田孝氏のご許可をいただき、PC上で閲覧できるように、A6サイズに再編集しPDF化したものです。

この版は、原文を元に作成(Web版と同じ)しています。書籍版とは文言のちがいが一部あります。ぜひお読みください。

2007年6月

大阪南RC Y・木村



ロータリークラブに入ってよかった！

素晴らしい出逢い よき師、よき友は人生の宝」

2006年10月1日 初版発行 著者 戸田 孝

文庫作成 (Web版) 2007年6月